
けいおん! 俺の奏でる音

icbb

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 俺の奏でる音

【Nコード】

N8594Z

【作者名】

icbb

【あらすじ】

初めての執筆です。生暖かい目でみてやってください

第零話

けいおんの二次小説です

初めての執筆で悪い文章ですが、意見、感想のほどよろしくお願いします

なるべく頻繁に更新をしていくつもりなので、よろしくお願いします

主人公、天城空也。

共学になった桜ヶ丘高校に入学することになり、唯たちとは同級生。漣や律とは中学からの知り合いであり、自覚無しのイケメン。学力は小さいときの教育によりできる、運動も上の下。小さい時からギターを弾いていた。実力はプロになる一歩手前でギターはGrass RootsのFOREST。料理もでき、家は琴吹家と肩を並べる大企業である

主人公の幼馴染、不動大地。

空也と共に桜ヶ丘高校に入学した幼馴染、空也からは煙たがられてはいるが空也も信頼する親友。もちろん漣や律とも知り合いである。見た目はそれなりだが空也のおかげで霞んでいる

主人公の父、天城空吾。

いつもは豪快で人のプライバシーを考えないが、ちゃんと空也の事を考えている良き父。一代で会社を琴吹家と肩を並べた卓越した手腕を持っており、空也は父以上の才能があると信じている

大地の父、不動英雄。

空吾の執事であり、友人。物腰の柔らかな口調で、大人の男性。天城家の執事長

執事、和田知哉。

空也の執事。一人で空也の身の回りの世話、料理、食材調達をこなす、英雄曰く、期待の執事。空也曰く、優秀だが性格に難あり。だが空也も頼りにしている

以上がオリキャラの簡単なプロフィールです。新キャラが出るたびに更新していきます。

一応ヒロインは漣です。完全見切り発車ですのでご了承を

第零話（後書き）

次の話より本編です

第一話

四月某日…

「こんな感じか？」

桜ヶ丘高校の制服であるブレザーに袖を通し姿見で確認する

「まあ…そのうち慣れるだろ」

自己完結し、俺の部屋から出た

「あら、おはよう。空也」

母さんが笑顔で出迎え、俺の前に朝食をおき、顔を俺に向けてきた

「あんた、何か部活するの？」

「さあ？」

曖昧な返事をし朝食を食べ、鞆を担いだ

「じゃ、いつてくる」

言葉少なめに家を出た。しばらく歩いていると後方から面倒な存在がやって来た

「おーーーーう、元気か？空也！！」

「お前が来なきゃ元気だ…」

大地に暴言を浴びせ、無言で歩みを進める

「お前は毎回ひどいな…」

大地はそう言いながらもすっかりついてきた。そして学校に近づくにつれて桜ヶ丘高校の生徒が多くなっていった

「女子ばかりだ…」

「うひょー！ー！ハーレムだー！ー！！」

「黙れ…」

大地の腹部にパンチをいれ気絶させクラス表を見にいった

天城空也……平沢唯……不動大地……真鍋和

「何であいつと一緒になんだよ…」

ため息をついて教室に向かった…

入学式を終え、一人一人自己紹介をしていく

「天城空也あまぎくうやです。よろしく…」

簡単に自己紹介を終わらせ、部活の勧誘チラシがある掲示板に向かった

「うーん…めぼしい部活はねえ…か…」

踵を返し教室に戻って返す支度をしていると大地がやってきた

「空也ー帰ろうぜー」

「……………」

それを無視し昇降口に歩いていったそこに漣と律がいた

「あ！空也！」

「ホントだ。クウじゃん」

俺を呼び捨てで呼ぶのは秋山漣、クウとあだ名で呼ぶのは田井中律。
二人とも俺の中学からの友達である

「よう、二人とも。今帰りか？」

「ああ、空也も？」

漣の言葉に俺は小さく頷いた

「じゃあ一緒に帰ろうぜー」

律の言葉に頷いたのは俺ではなく大地だった

「俺も一緒に帰るー！……………ぐはあ！」

大地の腹部に蹴りをいれ俺は歩き出した

「空也と不動は高校に行っても相変わらずだな…」

漣が呟き俺に着いてきた

「漣はどうなんだ？」

「ん？何が？」

「人見知り…俺と大地以外の男と喋れる様になれそうか？」

漣は少しあせった表情をみせた

「まだ厳しそうだな、頑張れ」

「うん…やっぱり空也には分かつちゃうか…」

漣は苦笑いを浮かべた。それから談笑しながら帰路についた

第二話

桜ヶ丘高校に入学して2週間がたった

「空也ー、お前部活何に入るんだ？」

購買から帰ってきた大地が言ってきた

「まだ何も決めてねえよ」

俺の言葉に大地が驚いていた

「なんだと！お前：和ちゃんが言ってたぞ。部活をしない奴は二トだつて！」

「また極端だな。そういうお前は？」

「俺か？俺はテニス部だ」

「お前如きがテニスだと？」

「酷い言われようだな。ちゃんとした理由があるのだよ！」

大地は意気揚々と立ち上がった

「この学校は元々女子高！つまり：「言いてえ事は分かったとりあえず黙れ」ヒドッ！」

大地の言葉を遮り、昼食を手早く済ませた

「そついやお前…軽音部入らねえの？」

「軽音部？」

「ああ。さつき張り紙が有ったぞ？興味があるなら行ってみるよ」

「そうだな…」

言葉少なげに頷き、午後の授業が始まるまで軽音部について考えていた

その日の放課後…

「この先ね…」

山中教諭に部室の場所を聞き、音楽準備室に向かうが一人の少女を発見した

「平沢……だっけ？何してんの？こんなところで？」

「えっと……誰でしたっけ？」

少女は頭をかきながら聞いてきた

「天城空也。一応お前と同じクラスだ」

「そうだった。空也だからクーくんだね！」

「好きに呼べ。んで？何してんの？」

「あ！クーくん一緒に音楽室に来て！」

「何で？」

話を聞くと軽音部に入部したようだが、バンドを組んでもギターができないと理由でやめたいとの事だった

「んじゃ…何ならできるんだ？」

「えっと…カスタネット？」

俺の中で想像しているととても似合っていた

「はあ…まあいい、行くぞ」

俺は平沢を連れて音楽準備室に向かった

「うーん…」

音楽準備室につくと平沢はドアを開くのに躊躇っていた

「ほら、早く入れよ。入部断るんだろ？」

「う、うん…でも…」

まだ入るのを躊躇っていた

「はあ…」

俺は平沢の前に立ち、変わりに音楽準備室のドアを開けた

「ってあれ？ 澪と律じゃん」

そこには澪と律、そして初対面の女子がティータイムをしていた

「空也？ 何でこんなところに？」

「俺は軽音部員を連れてきただけだ」

俺は背中にいた平沢を前に押し出した

「貴方が平沢唯さん？」

「は、はい！」

「入部希望の？」

「は、はい！」

律と澪が平沢を質問攻めにする

「ありがとー！ ギターがすごく上手いんだよね！ 平沢さんみたいな人に入ってもらって心強いよ！」

律が平沢の両手をつかんでブンブン振っていた

「尾ひれが付いちゃってんな…どうする気だ？」

みんなに聞かれない程度に呟いた

「平沢さんはどんな音楽がやりたいの？好きなバンドは？好きなギタリストは？」

律が質問で攻め立てる

「じ…じ…」

漣がじから始まるギタリストを上げていき遂に平沢は黙ってしまった。実は入部を辞めさせてくださいを言いたいだけなのに…仕方ない…

「漣も律も落ち着け、平沢がお前らに話したいことがあるから来んだ」

「「え？」」

漣と律、それにムギと呼ばれた少女も一斉に平沢を見た

「ほら、頑張れ」

平沢の背中をポンと押した

「クーくん…あの、実は入部を辞めさせてください！」

平沢の言葉に三人が固まった

「ギターは弾けないし、もっと違う楽器をやるんだと思って…」

「じゃあ何ならできるの？」

「カスタ……ハーモニカ！」

見栄を張ったのが間違いだった

「あ、それなら持つてるよ！吹いてみて」

律が持っていたのだった

「ごめんなさい！吹けません！」

凄い速さで平沢が謝罪した

「でも、入部しようとしたってことは音楽に興味があるんだよね？」

漣のフォローを皮切りに三人がなんとか入部させようと頑張っていた。お菓子で餌付けしてみたり、他に入りたい部活がないならと誘ってみたり、すると平沢は申し訳なさそうに泣いてしまった

「ごめんなさい、軽い気持ちで入部するなんて言ってしまったばかりに……」

こうなってしまったら平沢を留まらせるためには……

「漣……ちょっと……」

小声で漣を呼んだ

「お前ら演奏できんの？」

「え？あ、ああ簡単なものなら…」

「なら聞かせてやれ。ああなった以上留まらせるためには演奏だ。それで駄目ならしかたねえ」

「わかった」

澪は頷き三人を集めた

「平沢」

「グスツ…クーくん？」

「皆が演奏してくれるつてよ。それ聞いてからでも本当に入部しねえつて事決めても遅くねえんじゃないか？」

「演奏…してくれるの？」

平沢が三人を見ると全員が頷いた。平沢は泣き止み長椅子に腰を下ろした。俺は壁に背中を預けた

「ワン・ツー・スリー・フォー…」

翼をくださいのカバーした曲を演奏した三人、とてもじゃないが上手いと言えないがそれでも充分平沢の心に響いているのを確認できた。そしてそれは俺にも響いた

パチパチパチ

平沢から拍手が起こり席を立った

「なんていうか…凄く言葉にしにくいですけど…」

律が期待をこめた眼差しを平沢に向けたが

「あんまり上手くないですね！」

バツサリと切られた

「でも…なんだかすつごく楽しそうでした！私…この部に入部します！」

その言葉を聴いた漣と律はお互いの頬を抓って夢じゃない事を確認すると律はその場で万歳し漣はこっちにやってきた

「ありがとな！空也のおかげで廃部にならなそうだ！」

「よかったな…」

俺は漣の頭をポンポンと叩いた

「あ、ああ…それでなんだが…空也も入部しないか？」

漣が顔を赤らめながら提案してきた。そんなもの最初から答えは決まっていた

「ああ、てか俺は最初から入部するつもりだったよ。それに…」

「それに…何だ？」

「澪からの頼みを俺が聞かない訳は無いからな」

その言葉を聞いた澪はさらに顔が赤くなった

「お熱いねえ、お二人さん。まあ今はいいや。記念写真撮ろ！ほら澪もクウも！」

律が手招きして呼んでいた

「行くか」

「ああ」

ふたりは並んで歩き出した

第二話（後書き）

アニメ第一話です

オリジナルの部分もありますがご了承ください

第三話

俺が軽音部に入部して翌日…

「うーん…」

俺は自室にあるエレキとアコギを見比べていた

「エレキでいつか…」

エレキギターを左肩に担ぎ自室をでた

「ん？何だお前？ギターなんて持つて」

「使っから持つてんだよ」

親父が興味なさ下に新聞を読みながら聞いてきた

「近くの秋山さん所の娘さんと同じ部活に入ったんですって」

母さんが朝食を運びながら親父に付け足した

「お前ら、小さい時から…お前…もしかし「うるせえ…」ぐあ！」

親父のボディにパンチをぶつけ朝食を食べた

「ま…一生に一度の高校生活だ…後悔するなよ…」

「わかってる…」

朝食を食べ終わるとギターを担いで家を出た

「あ、おはよう空也」

家の前に漑が待っていた

「何でいるんだ？」

「同じ部活に入ったんだ。一緒に登校してもいいだろ？」

「好きにしろよ。とにかく一刻も早くここから立ち去りてえ」

俺は自宅の窓を指差した、そこには親父と母さんが覗き見をしていた

「そ、そうだな…」

俺が歩を進めると漑はそれについてきた

「そっぴゃ、律はどうしたんだよ？」

「律は寝坊したから…」

漑は俺に携帯を見せそこには…『寝坊したから先にいつて』と書いてあった

「ていうか、空也。ギター持ってたんだな…」

「ああ。お前は俺んちに入ることが無かったからな。大地とかなら知ってたぞ」

「へえ…空也のギター聴いてみたいな」

「放課後に見せてやるよ」

雑談を繰り返しつつ桜校の校門までついた

「空也、ギターを置きにいこう」

澪が音楽準備室の鍵を見せ、軽く頷いた

「じゃあ、放課後でな…」

「ああ」

澪と別れ、それぞれ自分の教室に向かった。教室に入ると大地が飛びついてきた

「くうやーーーー！ぐあつ！…！」

大地の腹部にパンチを浴びせ教室に入る

「空也君…おはよう」

「ん？ああ真鍋か…おはよう」

真鍋が近寄ってきた

「大地君ほつといていいの？」

「俺の知ったことではない。そのまま永遠の眠りについてほしいぐらいだ」

そついいながら俺は席に着くと真鍋がそれに着いてきた

「空也君、唯の事ありがとね」

「唯？ああ平沢のことか」

「うん、あの子高校に入って何か部活したいって言ってたから」

それを言う真鍋はまるで保護者の顔だった

「空也君なら何か安心できそうなんだ、唯の事よろしくね。後、和でいいよ」

そついうと満足したかのように真鍋：もとい和わ自分の席に着くとすぐに担任がやってきた

昼休み…

「そついや空也、今朝澪ちゃんと一緒だったな」

「何で知ってたんだ？」

「見たから」

「うぜえ」

「うっせ！お前にもてない男の気持ちが分かってたまるか！」

「お前のがうるせえ。つーかどっかいけ」

「空也の……バカー……!!!!」

大地が泣きながら廊下に飛び出していった。これで静かに昼食が食べられるな。それから午後の授業は寝てすごした

放課後…

「クーくん！一緒に部活にいこー！」

平沢が満面の笑みで近寄ってきた

「ああ」

特に拒否する理由も無いので一緒に音楽準備室に向かった

「こんにちはー」

「……………」

平沢が元氣よく挨拶するとすでに来ていた漣、律、琴吹がそれぞれ挨拶をした

「まさかクウがギターやってたとはなー」

律が俺のギターケースを見ながら言った

「えー!!クーくんギター弾けるの!!」

「誰が初めてつったよ…よっと…」

ギターのストラップを肩にかけアンプをつなげる

〽
〽

軽くストロークすると次はこの前三人が弾いていた翼をくださいを
ロック調に弾いた

「ま、軽くこんなもんだろ」

四人を見ると表情が固まっていた

「どうした？」

俺は首を傾げた。静寂を破ったのは漣だった

「すごい…」

「ああ…」

漣と律が目をキラキラさせていた

「俺のことはどうでもいいが、琴吹、茶が零れてるぞ」

「え？ああっ！」

今それに気づいたようで慌てていた

「そういえば、なんで漣ちゃんはギターじゃないの？」

平沢がふいに漣に聞いた

「ギターは…その…恥ずかしい…」

「恥ずかしい？」

「ギターはバンドの中心で自然と観客の目も集まるだろう？それを想像しただけで…もう…」

ポフン！

漣の頭から爆発音がして漣は机に伏せた

「漣は恥ずかしがり屋だからな。まあギターはイケメンのクウだけだな」

「俺はイケメンでは無いだろ」

「その顔で何を仰るのかな？クウがイケメンじゃなかったら大地はどうなるんだよ」

「そうですよ。空也君はカッコいいと思います。」

琴吹がおっとりとした表情で告げた

「もうなんでもいいが、ギターは俺と平沢で、ベースが漣、キーボードが琴吹、ドラムが律だな？」

「りっちゃんはドラムって感じだね」

平沢の言葉に律が反応した

「私にだって深い理由があるんだよ!」

「理由?どんな?」

平沢が目をキラキラさせながら律に聞いていた

「それは…そのーカッコいいから」

「えーそうなの?」

「だってギターとかキーボードとか手でチマチマしてイーイーってなるんだよ」

律が全身で表現していた

「ムギちゃんは何でキーボードやろうと思ったの?」

「私小さいころからピアノを弾いてたの。コンクールで賞も貰ったのよ」

「(なんでそんなやつが軽音部にいるんだ?)」

俺の思いをよそに復活した澪が声を発した

「平沢さんはもうギタ「唯でいいよ」え?」

「私もう漣ちゃんのことを漣ちゃんって呼んでるし、あ！クーくんも唯ってよんで！」

「じ、じゃあ…ゆ、唯…」

漣が平沢に向かって上目遣いで唯って呼ぶと。矛先が俺に向いた

「じゃあクーくんも！」

「唯、もういいからギターはもう買ったのか？」

あっさり唯というと唯は不満げな顔をし、なぜか漣も同じような顔をしていたが見なかったことにしよう

「空也君！私も私も！」

「わかったよ。紬でいいんだろ？」

「はい！」

何がそんなに嬉しいのか分からんが紬はニコニコしていた

「ギターって値段どれくらいするの？」

「安いのなら一万円ぐらいからあるが…」

「安すぎても駄目だ、そうだな五万円ぐらいのを買えばいいよ」

俺と漣がギターの値段について説明する

「じゃあクーくんのは、どれぐらいしたの？」

「俺のは八万ぐれーだった中学の三年間必死で小遣いを貯金してたからな」

「そんなにするの！あのーりっちゃん…」

唯が笑顔で律に向いた

「部費で落ちませんかね？」

「おちません！」

唯がバツサリ切られ、元気をなくした唯に紬がお菓子で元気付けしていた

「とにかくだ、唯に楽器が無いことには始まんぞ」

「じゃあさ、今度の休みに皆で楽器見に行こうぜ！」

律の提案に皆は頷いた

「俺もか？」

「当たり前だろ。空也が居なきゃ詳しいこと分らないしな」

「そうですか…」

行くしかないようだったそして週末…

「行くぞー空也ー！」

俺がエスケープしないように漣が迎えに来た

「はいはい」

二人で待ち合わせ場所の商店街に向かっていった。商店街に行くと律と紬がすでに待っていた

「見せ付けますなあ、美男美女のカップルは」

ニヤニヤしながら寄ってきた

「り、律！名に言っただ！」

ニヤニヤする律と慌てる漣の漫才を見てると唯がやってきたが、人にぶつかり、犬を可愛がりに行ったりとなかなかたどり着けないでいた

「お金は大丈夫だったの？」

女子が二、三步前を歩き、俺が後ろから付いていくと唯がふいに立ち止まった

「今なら買える！」

ブティックのショーウィンドーに目を光らせていた

「楽器買っただろ！？」

律が連れ戻そうとすると、唯が店の中へ入っていった

「漣、俺その辺の本屋に居るから帰ってきたら呼んでくれ」

「わかった…」

女子四人はブティックの中に姿を消していった。俺は本屋の音楽雑誌を読み漁り、しばらくすると漣が迎えに来た

「ごめん、待たせた」

「想定内だ」

読みたい雑誌を一通り読んだところで楽器屋に行くかと思えば喫茶店に入ってしまった

「楽しかったねー」

だの

「へへー買っちゃった」

だの唯と律は思い思いの事を口にした

「次はどこにいこっか？」

ついにはそんなことを言い出した

「「楽器だ楽器!」」

俺と漑は口を揃えて言った

そんなこんなでやつとこさ楽器店『10GIA』に着いたここは品揃えがよく俺も頻繁に来ている場所である

「ギターがいっぱいだねー」

唯が感想を口にするのと同時に俺は単独行動で自分が欲しい弦の換えやらその他諸々を物色し、唯に合いそうなギターを探していると

「これいいんじゃない？」

価格が四万八千のネックが細めのギターを発見し、漑たちに合流した

「あっちにお前に合いそうなギターが合ったんだが…それがいいのか？」

唯はあるギターに夢中だった

「止めはしないが払えるのか？そんな額？」

値段を見ると二十五万と書かれていた

「うーん…さすがに手が出ないなあ…」

と言いつつも視線は離れなかった

「私もあのベースを買うとき相当悩んだからなあ」

「あたしもあのドラムを買うとき値切りまくったしなあ」

「店員さん泣いてたがな」

漣、律、俺がそれぞれ口にした

「あの一値切るって？」

「欲しいものを安く手に入れるために努力と根性で安くさせたんだ」

紬の質問に律が自慢げに答えた

「すごーい！なんか憧れます！」

「「憧れる要素がどこに！？」」

そんなやり取りをしても唯はギターから目を離さなかった

「じゃあ皆でバイトしようか！唯のギターを買ったために！」

律が言い出した

「これも軽音部の活動だよ！」

「私やりたいです！」

律と紬が賛成し、唯も嬉しそうな表情だった

「バイトか…」

漣は不安そうな顔で呟いたのを俺は見逃さなかった。その日の帰り道

「　　」

律が先行し、俺と漣が並んで歩いていた

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「バイト」

「不安は有るけど。唯の為、軽音部のためって思えると思
う」

「そうか」

俺は軽く笑うと逆に漣から話しかけられた

「空也も…ありがとな。心配してくれて」

漣が俺に向かって笑った。その顔を見て俺は顔を背け

「漣とは長い付き合いだし…な」

そっばを向いて喋るしかなかった

翌日の放課後…

「何のバイトがいいかなあ」

全員でバイト探しをしていた

「ティッシュ配るのは？」

「無理……」

「ファーストフードの店員は？」

「駄目かも……」

律と紬の意見をことごとく漑が却下していた

「漑にはハードルが高いかもなー」

律がフォローするとまた悪いことを考えたのか漑は頭から蒸気を発して机に伏せてしまった

「やれやれ……」

求人雑誌に目を通してしていると漑でもできそうなのを発見した

「これなら漑にもできんじゃないかね？」

机に広げて俺が指差したのは道路交通調査の求人だった。これは比較的人に関わり無くできるもので漑にも適していた

「車の台数や通行人の量を調べるんだよ。カウンターをもつてな。どうだ？」

それならと漑は頷き、週末の二日間は交通量調査のバイトが決まった

週末…

「……………」

カチ、カチ、カチ

カウンターを押す音だけが俺たちの中で響いている

このバイトは総勢八人で行い女子四人、男子四人で別々の場所で調査している。俺の他には大学生と見られる明らかにがり勉の男三人で話すことが何も無い、よって無言でカウンターを押している。向こうは俺を不良だと思っているらしく、ビクビクしている

「（やりにくいつたらねえな）」

仕方なしに鞆から音楽機器を取り出しイヤホンをつけ音楽を聴きながらカウンターを押していく

そんな感じのバイトが二日続き二日目の夕方

「…………お疲れ様でした…………」

バイト代を貰い頭を下げる一日八千円で二日で一万六千それが五人で八万、当初の五万を足してもまだ足りない

「分かりきった事だったが、まだ足りねえな」

「そつだな、後何回かバイトするか」

「また探そうぜ」

俺、漣、律がそれぞれ口にすると唯が口を開いた

「私、やっぱりいいよ、このバイト代は皆それぞれで使って。私はクーさんの薦めてくれたギターを買うよ、私、早く練習して皆と一緒に演奏したい、だからまた楽器店に行くのにつきあって」

唯がそう言うなら俺たちは頷くしかない。バイト代を返却され唯は帰っていった

それから数日後俺たちは『10GIA』にいた

「こつちだ」

俺が案内をしているとやっぱり唯はあのギターの前で立ち止まった

「やっぱりあれがほしいんだな」

「よし、またバイトするか」

漣と律が意気込んでいたが紬が何かを閃いたようだった。なんとなく察しはつくがな

紬がカウンターから帰ってくるとあのギターを五万で売ってくれるとのことだった

「このお店うちの系列なの」

「「え!」」

紬の言葉に漑と律が固まった

「やっぱり琴吹財閥の娘さんだったか…」

「はい、天城グループの息子さん」

同じ調子で返してきやがった。秘密にしていたのにな…

「「ええ！」」

漑と律はなお固まった

「空也、それ本当なのか?!」

「まあな、俺たち直接会ったことは無かったが財閥の跡取りだ」

「クウの家普通の家じゃん！」

「贅沢する必要が無かったからな」

そんな中何も知らない唯がギターを買って帰ってきた

「ただいま〴〵皆何してるの?」

「何もしてねえよ。さあ帰るぞ」

俺は踵を返して家路についた

翌日…

「ふんす！」

唯がギターを持って胸を張っていた

「ギターを持つと様になるな」

「何か弾いてみて」

澪と律がそれぞれ口にする

「うーん…」

唯が弾いたのはなぜか ルメラだった

「まだ練習してないのか？」

「ギターってなんかキラキラピカピカしてて触るの怖くって」

「弾けよ」

「まだフィルムも外してねえしな」

それを見た律は一気に唯のギターのフィルムに手を掛けはがしてしまったショックを受けた唯に紬がお菓子で期限を取り戻させた

「どうやったらライブみたいな音が出るのかなあ…」

「アンプに繋がればでるよ」

律が唯のギターをアンプにつなげ唯がギターをストロークする

「ここからやつとはじまる…」

「軽音部が…目標はでっかく卒業までに武道館！」

「それは無理だ」

俺の突っ込みに律はぶつぶつ言っていたが無視した

「やっぱり私にはまだはやいねー」

唯はアンプのコードを抜こうとした俺はその瞬間鞆からイヤホンを
だしてノイズンセリングを起動した

とたんに爆音が流れ俺を除く四人が耳をふさいだ

「ボリューム下げてからじゃないとこうなるんだよ」

「先に言ってよ」

「クウ、卑怯だぞ！」

「正当防衛だ」

そんなこんなで唯もギターを買いやっつとこれから桜高軽音部が始動
する

第三話（後書き）

アニメ第二話です

いろいろぶっ飛んだ設定になっております
ご了承を

第四話

唯がギターを始めてしばらくが過ぎた…

「クーくん、ここが分かんないんだけど」

漣から渡された『サルでも分かるギター』という本を貰い、唯はその本を見ながら分からないところは俺に聞きながら熱心にコードの練習に励んでいた

「ギターの弦って怖いよね、細くて硬いから手が切れちゃいそう」

「そうだな。手の皮が柔らかいうちは手が血まみれになってもおかしくは無いが「キヤーー!!」ん？」

「漣ちゃんどうしたの？」

唯が隅っこで小さくなっている漣に問いかけた

「痛い話は駄目なんだあ」

両手で耳を塞いで聞こえないそぶりをみせる

「漣らしいな…」

そんな漣に唯がトコトコ歩いて行って手を差し出した

「大丈夫だよ、漣ちゃん。本当に血が出てるわけじゃないから」

それを確認した漣は立ち上がり咳払いをした

「まあ、やってるうちに皮膚が硬くなってくるから大丈夫だよ」

ほらと漣は唯に右手を差し出すと唯は見当違いの事を言い出した

「本当だーぷにぷにー」

漣の右手をぷにぷに押していくと遂に漣のほうが恥ずかしくなってきたようで俺に目線だけで助けを求めてきた

「唯、練習再開するぞ」

唯の首を掴んでずるずる引っ張っていく

「はぁ……」

漣は助かったようなため息をついていた。しばらく練習していると開きの時間になってきたのでギターを片付け帰路についた

「そっぴやもうすぐテストだな」

「そっぴだな」

「……………」

俺の言葉に頷く漣と無言で汗を流す律

「漣は大丈夫そっぴだな」

「あたしはあ!!」

律が声をあげ抗議する

「俺の目を見て大丈夫って言えるか？」

「うつ…ごめんなさい…み〜お〜」

ついに漣に泣き付いてしまった

「毎回だな」

「うるせークウ！中学から50点位しか取れないのに！」

「じゃ勝負してみるか？そっちは漣に教えてもらえよ」

「空也、大丈夫なのか？」

漣は心配そうに俺を見るが俺は黙って親指を立てた

「律に負ける気がしねえ」

「そこまで言うならやってやる！」

律が俺に向かって拳を突き出した

「俺が買ったらハンバーガーのセットを奢れ、お前が買ったらハンバーガーのセットを奢る」

「いいぜ。こっちには漣がついてんだ！」

「漣が証人だ。踏み倒しはきかねえからな」

そんなこんなでテストの点数を競うことになった俺たちはテスト期間に突入する

「負ける気がしねー」

それから数日ごテストが帰ってきた

「ん〜！テスト終わったあ！」

「高校に入って急に難しくなったから大変だったわ」

「そうだな、そしてもっと大変そうな奴がここに」

唯が力のない笑いで答えていた

「クラスでただ二人追試だそうです」

暗い顔で12点の答案を見せた

「うわぁ…」

「大丈夫よ唯ちゃん、今回の勉強の仕方が悪かったただけだって」

「そうだよ。追試なんて余裕余裕！」

紬と律が励ましていたが数秒後に過ちだったと気づかされる

「まあ、勉強はやってなかったんだけど…」

「あたしの励ましの言葉を返せ！」

律が怒鳴った

「ねえりっちゃんは何点だったの？」

唯がいつもの指定席で律に聞いた

「ふっふっふ。今回のあたしは頑張ったのだよ。見よ！」

テストの答案には８９点と書かれていた

「こんなのりっちゃんのキャラじゃない…」

「今回はクウとの勝負してたからな」

「そうなんだ。澪ちゃんとムギちゃんは？」

二人から渡された答案を見ると律が絶句していたが俺を視界に入れるとニヤリと笑った

「さーて問題のクウは何点だったんだ？」

「ん」

「あいた！」

ピツとテストの答案を紙飛行機にして律のデコに当てた

「ちくしょー負け惜しみやがって…」

ガサガサと紙飛行機を戻していくと律の汗の量が多くなった

「零に教えてもらってそれではまだまだだな」

「空也は何点だったんだ？」

零が覗き込むと零も驚愕していた

「ま…満点…」

「零も細もさして変わんねえだろ」

「そうだけど…」

律はずっと固まっていた

「これが実力だ」

ポンと律の肩を叩いた

「ちくしょー!!」

律は叫びながら準備室から出て行った

「でも中学のときはあんまり取ってなかったのに一体どうしたんだ？」

その質問に答えたのは俺じゃなく紬だった

「でも天城グループの御曹司ですから、これくらいは普通じゃない？」

それを聞いて澪が頷いた

「そういえばそうだったな」

「中学のときはそんなことバレて無かったから、50点くらいで抑えてたんだよ。んなことより唯の追試を考えねえと」

すっかり忘れられた唯にもう一度焦点を当てた

「確か追試の生徒は合格点取れるまで部活にでねえらしいからな」

「そうなの！？」

「詳しいことは明日告知されんだろ。今日ぐらいはみっちり教えてやるよ」

そう言っただけは長椅子から立ち上がりお開きになるまで唯にギターを教えていた

翌日…

「クーさんの言うとおりでした、一週間後の追試まで部活に出ちゃ駄目なんだって」

「言わんこっちゃ無いな、しっかり勉強して来い。ま、今日のお菓

子ぐらいは食ってけ」

今日のお茶菓子である羊羹を指差した

「うん！」

ニコニコしながら羊羹をたべる唯の前に俺の分の羊羹を差し出した

「やる」

「ありがとー！クーくん！」

俺は長椅子に座りヘッドフォンをあてギターを持った

「空也何してるんだ？」

「ん？ああ、ちょっとな」

曖昧な返事で澪は頭に？マークを浮かべティータイムに戻っていった

今俺は夏休みに向け作曲中である。気が早いような気もするが現時点で唯が追試で練習できないし、夏休み中に練習できれば桜高祭で演奏できる。それをするためにも今からでも開始しないと間に合わないかもしれない、なんせ現時点で音あわせ自体出来てないのだから

俺は鞆からルーズリーフを出し思考を巡らせる。しばらく考えていると紬が目の前にいた

「お茶はいかが？」

俺に紅茶を差し出してきた

「ああ、サンキュ」

素直に受け取り、一口飲む

「ん、うまい」

「よかった」

感想を聞くと笑顔を見せ自分の席へ戻っていった

一息ついた後に作曲を再開するがお開きまでまるではかどらなかった

翌日以降、唯は部活に顔を見せなくなった残りの三人は唯の心配を、俺は作曲に専念していた

そして日は過ぎ追試前日：

「零ちゃん。勉強教えて」

唯が零に泣きついてきた。どうやら勉強できなかったようだ

ダダダダッバン！

「空也、勉強教えてくれ！」

大地が準備室に駆け込んできた

「うちのクラスの追試ってお前だったか」

「頼むよ。空也しか頼れないんだよ」

「わかったわかった。部活上がりにお前んち行ってやるから、家で待ってる」

そういうと大地は頷いて準備室から出て行った

「やれやれ… 澪は唯を教えるんだろ」

「ああ、このままだと唯が退部になりそうだからな。唯の家でみっちり教える」

「澪ちゃん！」

唯が抱きついて感謝を表していた

「なら今日はもういってやれ。少しでも時間が長いほうがいいだろ」

「空也はどうするんだ？」

「俺はあの馬鹿を教える。まあ、アイツが退学になろうと知ったことでは無いが」

そういつている間にも俺はギターをケースにしまい立ち上がった

「じゃあな。唯しっかり勉強しろよ？俺達と軽音部続けたいならな」

それだけ言って準備室を出てドアを閉める瞬間に

「また明日な！空也！」

漣が笑顔で言っていたので漣に分かるように右手を上げて応えた

「行きたくはねえがな」

階段を下りながら、鞆からヘッドフォンとルーズリーフを取り出した、ヘッドフォンからは出来かけの曲をルーズリーフからその譜面を出し考えながら大地の家にむかった

大地宅…

「あら空也くんいらっしやい」

「どーも。大地は？」

部屋に居るわよと家に招き入れられ、大地の部屋に入る

「空也！待ってたぞ！」

あろうことかゲームをしてやがった

ブチッ

無言でコードを引っこ抜く

「ああっ！なにしやがる！」

「それはこっちの台詞だ。わざわざお前如きの馬鹿のために来てやったんだ。勉強しやがれ」

「お前言葉に棘しかねえ…」

大地はしぶしぶ勉強をはじめた。そして俺はコードを繋ぎゲームをはじめた

「教えてくんねえの？」

「質問は五分に一回受け付ける。自分の分かる範囲でやってみろ」

大地は素直に従った。このペースで勉強を教えていき七時頃にはある程度まで問題を解けるようになった

「こんだけできりゃあ充分だ。あとは明日結果を出すだけだ」

「くっやゝ!」

大地が俺に飛びついてこようとしたが避けた

「男に、こともあるつかお前に抱かれて喜ぶ趣味はねえ。俺は帰るぞ」

そう言っただけで大地の家からだとケータイが震えた

「ん？」

ケータイのディスプレイには律と書かれていた

「なんだよ」

「クウもこつちこねえ？」

「は？」

「だから唯の家にだよ」

「何で俺が、唯を教えんのにほは漣がいるだろ？」

「いいから！いつも唯と別れるところで待ってるからな」

それだけ言って律は電話を切ってしまった

「仕方ねえ、いくか…」

しばらく歩いていると律を見つけた

「遅いぞ！クウ！」

「そりゃ悪かった。さっさと行くぞ」

俺は唯の家に向かって歩き出した。律は俺の横に並んで歩き出した

「最近さ、お前何してるんだ？」

「人に物を聞くには説明不足だな」

唯の家に行く途中で律が聞いてきた

「部活だよ。漣やムギが聞いても曖昧な事しか言わないじゃん」

「今の段階ではまだ話せないな」

俺の言葉に律は不満げな顔をしたがすぐ笑顔になった

「音楽だけは真面目だからな。話せる時になったらちゃんと話してくれよな」

見透かされたような気はしたが素直に頷いた

「ここだここ」

雑談を繰り返していると唯の家に着いたようので律はインターホンを押していた

「律さんおかえりなさい」

唯に似た少女が出迎えてくれた

「誰？」

「妹の平沢憂です。よろしく願いします空也さん」

少女と俺の目が合うと少女は礼儀正しく自己紹介してくれた

「ご丁寧にどうも。天城空也だ、よろしくな」

「お姉ちゃんからよく話は聞いてます。ギターを教えてもらってるって」

平沢妹からスリッパを出され俺たちは唯の部屋に向かった

「皆ークウが来たぞー」

律が先頭に次に平沢妹、最後に俺の順番で中に入っていた

「和？」

そこには軽音部のみならず和がいた

「こんばんは、空也」

適当な所に腰を下ろすと平沢妹がお茶を差し出した

「空也さん、お茶どうぞ」

「ああ、サンキュ。しかし出来た妹だな」

「でしょークーくん！憂々クーくんに褒められた」

唯が平沢妹にくつつく

「別に唯を褒めてるわけじゃないんだが」

この言葉に平沢妹が反応した

「お姉ちゃん男に人に呼び捨てにされてるんだ。凄ーい！いいな」

今度は平沢妹が姉を称えた

「私も名前で呼んでもらっていいですか？」

目をキラキラさせて平沢妹が迫ってきた

「じゃあ憂ちゃんでもいいか？」

はい、と満面の笑みで返され律が眩しがっていた

「で？俺をここに呼んだ理由は？」

「特に無いぞ」

澪が予想外のことを言い出した

「帰っていいか？」

「それは駄目だよクーくん」

「駄目です」

唯と紬が拒否した

「大変ね、空也も」

「和だけだな分かってくれるのは。」

それからしばらく皆で雑談し不意に俺と和の口が揃った

「「そんなことより勉強は？」」

俺と和以外の全員が黙ってしまった

「漣…忘れてたな？」

「うっ！」

漣は慌てていた

「はぁ…さつさと教える下で待っててやるから」

そういつて立ち上がった

「あ…ああ！」

漣は笑顔で返事したのを見ると軽く俺も笑った

「憂ちゃんもいこう、お姉ちゃんの邪魔になるからな」

「はい！」

「じゃあ私も帰るわね」

和も立ち上がり帰る支度をしていた

「また明日な和」

「ええ、空もおやすみなさい。またね憂」

玄関で和を見送りリビングに向かう

「空也さん、お茶いかがですか」

「ありがとう、いただくよ」

憂ちゃんとはばらく雑談していると律が下りてきた

「憂ちゃんなんかゲームしない？」

どうやら居心地が悪くて降りてきたようだ

「いいですよ」

憂ちゃんがそういうと二人はゲームをやりだした俺はギターを弾くのはさすがに迷惑なので文庫本を読んだしばらくすると漣と紬が下りてきてお開きになった

「遅くまで悪かったな」

「いえ、皆さんまた来てくださいね」

漣と憂ちゃんのやり取りを横目に全員が出て最後に俺が出ようとすると

「空也さん、連絡先交換してください」

とケータイを差し出してきた。漣たちに先に行っててくれと合図し俺のケータイを出して連絡先を交換した

「またな。憂ちゃん」

挨拶を済ませ家を出て漣たちに追いついたそれから紬と別れ、いつもどおりの通学路を三人で歩く、夜も遅いので二人を家まで送る

「姉ちゃん、遅かったね」

と律の家の前まで来ると一人の男の子がいた

「澪たちと遊んできたんだ」

男の子がこっちを見ると笑顔にしてこっちに向かってきた

「兄ちゃん！また一緒にゲームやろうよ！俺強くなったよ！」

意気揚々と言った感じで俺に言ってきた

「また今度な。聡」

聡という少年は律の弟でなぜか俺のことを兄ちゃんと呼んで慕われている

「じゃあ、また明日な律」

「澪もな。クウ！夜が遅いからって澪を襲うなよ！」

「り！律——！」

澪が顔を真っ赤にして抗議していた

「近所迷惑だ。じゃあな律、聡も」

澪の頭を軽く叩き律と聡に挨拶し歩き出した

「姉ちゃん、やっぱりあの二人仲いいね」

「そうだな、漣が男子でただ一人ありのままの自分で居れるのがク
ウだからな」

この姉弟がそんなことを言っていたなんて知る由も無かった

「ありがとな空也」

「ん？」

「唯の家に来てくれて、今もこうやって送ってもらってるし」

漣が不意にそんなことを言い出した

「別に礼を言われるようなことはしてねえよ。俺がそうやりたいか
らやってるだけだ」

「それでもありがとう」

街灯に照らされ満面の笑みを浮かべる漣を直視できなかった

「ああ…」

目を背けそう口にしたが気が気じゃ無かった

翌日の追試で唯は見事に満点を取り追試をクリアした後不本意なが
ら大地もギリギリでクリアした

「さて、勉強中もコードの練習に励んだと言う話だから。軽く弾い

てもらおうか」

「どんどこいだよクーくん。XでもYでも」

X？Y？俺と漣は顔を見合わせた

「じゃあ…」

と漣はコードの名前を言っていくが唯の手が止まっていた

「わすれちゃった…」

ついにはこんなことを言い出してしまった

「また一からかよ」

「じゃ空也後はよろしく」

「待てい、お前も付き合え」

漣の首元を掴み強制連行したのは言うまでも無い

第四話（後書き）

アニメ第三話です

結構話を膨らませてみました

第五話

夏休み直前のある日……

「ん？なんだこれ？」

「どうしたんだ？空也……」

漣と二人音楽準備室にいた時に見つけた段ボール箱その中身は昔の軽音部の物だった、その中に一つの桜高祭と書かれたテープがあった

「空也、このテープ再生できるか？」

「ちょっと待ってろ」

そついつて俺は鞆の中から小さなラジカセを取り出し、テープを入れ再生ボタンを押した

くくく

「上手いな」

「私たちも……」

この時漣の中に何かが湧き上がっているのを確認できた。まあ負けず嫌いだしな、対抗意識しかないだろ

その日の放課後……

「合宿をします!!!」

漣がビシッと指をさして決めポーズをとった

「合宿？」

唯が首を傾げた

「もうすぐ夏休みなんだし」

「もしかして海？それとも山？」

律が的外れのことを口にした

「遊びに行くんじゃないよ。朝から晩までみっちり練習…だろ？」

漣は頷いたがすでに二人は聞いてすらいなかった

「うわぁーなに着ていこ」

「水着も持っていないかなきゃな」

「聞け————!!!」

案の定漣は怒鳴ったとりあえず全員を指定席に座らせ俺は長椅子に座る

「夏休みが終わったら、もうすぐ学園祭でしょ！」

「学園祭…」

「そう桜高祭の軽音部のライブは結構有名だったんだぞ…」

澪の言葉が尻すぼみになっていくのに対し律と唯は目をキラキラさせていった

「はいはい！！私メイド喫茶がやりたーい！！」

「えゝお化け屋敷がいいよゝ」

律と唯はまた違う方向へ脱線して言った

「考えても見る唯、澪にメイド服を着せてみる」

その言葉を聴いて俺の中で澪にメイド服を着せてみる……って俺まで脱線してどうすんだ

「ライブやるんだろ？」

いらん想像をしていた律は澪の拳骨をくらい怒られていたその時に紬が遅れてやってきた

「ムギはどう思う？いくらゆっくりやっていこうとは言ったって三ヶ月にもなるのにまだ全員で音あわせしてないことに」

確かに入部して三ヶ月になるがまだ一度も全員で音合わせをしていない、澪や紬とは何回があるが…

「でも…楽しそうですね。皆でお泊りするの夢だったの！」

なんとも小さい夢だな

「じゃあさ！海がいい？山がいい？」

律はまだ遊びに行く気満々だった

「遊びに行くんじゃないっての！」

「でもさ、いくら位するんだろ」

唯が核心をついた

「そうだぞ、スタジオ代もこめるといくら位すると思ってんだよ」

「そ…それは…」

その部分を突かれるとさすがに洩は黙ってしまったがなんとか打開策を思いついたようだった

「ムギ…別荘とか…」

「ありますよ」

「「「……………あんのかい！！」「」」

紬の隠す事のない告知に紬と俺を除く三人がツツこんだ

紬の鶴の一声で軽音部の合宿はとんとん拍子で決まったそしてその
日の夜…

「親父」

「ん？」

「夏休みに入ったら軽音部の合宿に行くから」

「そうか、どこに行くんだ？」

「琴吹財閥の別荘」

「おーそうか！琴吹さんとか！ハッハッハ！楽しんで来い」

親父は高笑いをして自室に消えていった。そして合宿当日

「ギターは二つとも持っていくか…」

右肩にエレキを左腕にアコギを右腕にキャリーバックを持ち集合場所に向かった

集合場所に到着すると唯を除く全員が集まっていた

「おはよう。空也、なんでギターケース二つなんだ？」

「エレキとアコギだ」

「二つも持ってたんだ」

「合宿なら使うかもしれねえしな」

しばらく雑談し集合時間が過ぎたが唯の姿がなくケータイも通じな

かった

「寝てるな」

俺はケータイを取り出し憂ちゃんに電話をかけた

「もしもし」

「憂ちゃんおはよう。お姉ちゃん起きてるかな？」

「今日から合宿でしたよね。すぐお姉ちゃん起こします！」

憂ちゃんが慌てて階段を駆け上がり唯の部屋に入り唯を起こし、電話は繋がっていたので唯に代わってもらった

「もしもし…おはよう」

「オハヨウゴザイマス…ごめんなさい！」

ケータイから唯の謝罪の言葉を聴き慌てて集合場所にやってきた

「ギリギリ間に合ったねえ」

「全く、空也が憂ちゃんの電話番号しらなかったらどうなったかとか」

唯が安堵の表情で澪が呆れた表情をしていた

「でもクウ、よく憂ちゃんの番号しってたな」

「前に唯の家に言った時に交換したんだよ」

通路を挟んで反対側に座っていた俺はそう答えた。なぜか漑が複雑な表情をしていたが見なかったことにしよう

しばらく電車で揺られ海が見えて律と唯がはしゃぎ別荘についた

「ごめんなさい。一番小さいところしか借りれなかったの」

と紬は謝っていたが漑、律、唯には充分大きいといった感じだった

「ま、高校生にはこんなもんだろ」

「「「え!」」」

俺の言葉に三人は驚いていた

「もしかして空也の家って…」

「超金持ち?」

漑と律が紬に聞いていた

「はい!」

「「……………」」

紬の即答に二人は黙ってしまったそれから別荘の中を見て周り、冷蔵庫を開けると高級な牛肉が入っていたそこに「空也へ」と書かれたメッセージカードが入っていた

「なんだ？」

「俺からのプレゼントだ！！父」

「あのくそ親父…」

裏から手を回してやがった…

「悪いな、紬。うちのくそ親父のおかげでどうも普通ではなさそう
だ」

「いえいえ。天城グループのお気遣い感謝します」

二人が礼儀正しくお辞儀した

「なんか世界がちがうなー」

律が遠い目をしていた

「ムギ、スタジオはどこなんだ？」

「こっちです」

紬の案内に俺と漣はついていった。律と唯がついてこなかったが、
どうせ水着に着替えているのだから目の前海だしな

「しばらく使ってないけど」

前置きをして紬がスタジオのドアを開けた

「空也」

「ああ」

ギターを取り出しアンプに繋ぐ

ジャーン

「問題ないな…」

そのまま題名のない曲が作った曲を弾く

「空也君はやっぱりお上手ですね」

「空也が居てくれると唯を引っ張って貰えるから助かるな」

その言葉を聴きつつ一通り弾き終わる

パチパチパチ

「さすがくう「遊ぶぞー!!」もう!」

漣の言葉を遮り律と唯が水着で入ってきた

「こうなることは分かってたけどな」

「そうだぜークウ!目の前に海があるんだから泳がないと損だぜ!」

「練習しに来たんだろ!!」

俺、律、漣の順番で喋ると紬も遊びたそうな目をしていた

「ムギ！行くぞ！」

「待つてるから…ちょっと待って」

律、唯、紬は行ってしまったふと横を見ると海に目が行っている漣がいた

「漣も行つてこいよ」

「だってここには練習に来てるんだし…」

「その気持ちはわかるが、なかなかこんなプライベートビーチみたいな所には来れねえから今のうちに存分に遊ばねえとな」

漣の背中を押し手助けする

「なら空也も来てくれ」

「ああ。わかった」

笑顔で答え漣は着替えにいった

「さて…」

誰もいないこの時に新曲を軽く弾いておくか…

）
）
）

フルコーラスではないが悪くないな…さあ漑たちが待つてるから着替えるか…

「やっときたぜ！おーいクウー！」

水着に着替え浜辺に出ると海で律と唯が手を振っていた

「はいはい」

軽く手を振りパラソルの下で腰を下ろす

「遅かったな。何してたんだ？」

漑が隣に腰を下ろした

「ん？新曲のチェックしてたんだよ、ほら唯が追試で来れない頃からやってたやつだよ」

「あれって曲を作ってたのか？！」

「まあな。今やってる一曲だけでは物足りないしな、後で譜面渡すよ」

「ああ、楽しみにしてる」

漑は嬉しそうに走っていった

「漑ちゃん嬉しそうでしたね」

「そうだな。あいつは何事にも真面目すぎるくらいだから」

紬が反対側に座った

「それは空也君でしょ？」

「こと音楽に対してだけな。漣とは普段の部活から合わせてやるから、漣の考えてることは大体分かる」

「クスッ本当にそれだけ？」

紬が覗き込んできた

「うるせ」

目を合わせるのが嫌で目を逸らした

「私ね、空也君みたいな生活を送りたかったの」

「え？」

「私の家は空也君も知っているとおりだからなかなか普通の生活がで
きなかったの」

「だから皆でお泊りするのが夢だと言ってたのか」

紬は頷いた

「小さい頃私と同じ様な家の子が普通の家に暮らしてるって聞いて
羨ましかった」

「それって俺か？」

「うん、お父さんの話で聞いただけだったけど本当に羨ましかった。だから…今こつやつて皆で遊んで皆でご飯を食べる。それだけですつごく楽しいの！」

それを言う紬の顔はとてもすがすがしい顔をしていた

「なら…もつと楽しまなきゃな」

俺は立ち上がって紬に手を差し出した

「うん！」

俺の手をとり立ち上がった紬は元氣よく遊びに行った、軽音部の女子四人と一緒に遊んでいるのを確認すると俺は別荘に戻った

手早く着替えを済ませ、時間を見ると夕食の準備をする時間だった。親父のあまり嬉しくないプレゼントの肉の塊を取り出し一人分にカットしていく。カットが終わると米を洗い炊飯器にセットする。ご飯を炊いている間に付け合せのサラダやスープを作っていくベランダから海を見れば四人の姿が見えなかったのでカットした肉を焼く準備に取り掛かる。

「こんなところにいた！」

嚙を先頭に四人がリビングに入ってきた

「もうちょつと待ってる。後は肉焼くだけだから」

「これ空也君が作ったの？」

「ああ、そうだけど？」

「これ凄くおいしい…」

絢がスープの味見をしていた

「あの肉の塊が綺麗にカットされてるぜ」

律が肉のチェックをしていた

「ちゃんとご飯も炊けてる！」

唯が炊飯器を開けていた

「濡ちよつとご飯入れててくれ。肉を焼いてしまってから」

厚切りにしたステーキを五枚暖めてある鉄板に乗せ上からブラックペッパーとニンニクをかけ両面を軽く焼いたらカットし別で暖めてあった一人用の鉄板に乗せる

「ほいできた！」

一気に五枚分焼き全員そろって食べる

「うまいー！」

「美味しいね！りっちゃん」

律と唯は「ご飯をお代わりして夕飯を食べる

「スープも具にしっかり味が浸みてる……」

「お肉が絶妙な焼き加減で舌の上で溶ける……」

漑と唯一舌が肥えてそうな紬からも大絶賛だった

「ふう〜食った食った」

「おいしかったね〜クーくんのご飯」

「口に合って何よりだ」

キッチンで洗い物をしながら答えた

「空也、洗い物くらい任せてくれてもいいのに」

「じゃあ洗った食器拭いて片付けてくれるか？」

「わかった」

テキパキと動く漑を横目に俺は食器を洗っていく。紬が問題発言するまでは……

「まるで新婚さんみたいね」

途端に漑の手から皿が落ちていく

「あぶねえ！」

とつさに皿をキャッチする

「ななな何言つて…」

漣の動きがギクシャクしだして一気に危なっかしくなっていく

「漣」

「ななな何だく、空也…」

顔を真つ赤にさせた漣が振り向いた

「もういいよ。ありがとな」

漣の手から皿を預かる

「先にスタジオで練習してくれ。これが終わったらすぐに向かうから」

漣はギクシャクしながら頷きスタジオに歩いていった

「ほら、お前らも先に行つてろ」

「はい…」

「ちえ…今日はもう疲れたよ」

「先に行つてますね空也君」

三者三様の答えが返ってきてスタジオに歩いていったそれを確認すると俺は黙々と家事を終わらした

スタジオにつくと律と唯が床に寝そべっていた

「遊びすぎだな」

「空也もムギもちょっと耳を塞いでてくれ」

漣がベースアンプを二人の頭元に置くとボリウムを最大にした。俺はヘッドフォンを紬に着けさせ電源を入れ、俺は耳栓を着けた。途端に耳栓を着けてても分かるぐらいの振動を感じ、二人が飛び起きた

「起きたか…ほれ」

起きたのを確認すると。全員に新曲の譜面を渡した。歌詞はまだフルコーラスができてないので書いてないが

「細みにパツとできたわけじゃないが、あの曲とこれの二曲やろうぜ」

マスターテープが無いので全員の目の前で演奏する

「どうだろうか？」

曲が終わると意見を求めた

「私は良いと思う」

「カッケー!!」

「カッコいいね」

「私も好きです」

高評価を受け俺は胸を撫で下ろした

「よしやろうぜ!」

完全に目が覚めた律を中心にまだタイトルの無い曲の通し、新曲『Funny Bunny』の個人練習に励んだ

「疲れた…」

律がスティックをドラムに置き床に伏した。時計を見ると結構長い間練習したので流石に俺も軽く疲れていた

「少し休憩するか…」

俺もギターを専用のスタンドにおいて軽くストレッチした

「外に涼みに行こうぜ」

律と紬、そしてなぜかギターを持って出て行く唯

「ひとまず俺らも行くか」

「そうだな」

二人でスタジオを出た

「そっぴゃスィカがあつたけど食うか？」

「ああ、頼む」

それを聞くと俺はキッチンに入つて冷水で冷やしたスィカを水から取り出し五等分して皿に乗せて御盆にのせ塩を取つて外に持つていく

「ほれ」

御盆に乗せたスィカをテーブルに置いて一つを漑に渡す

「ありがとう」

漑が受け取つたのを確認すると俺も一つとつて漑の隣に座る

「何やつてんだ？」

「さあ？それやつたら練習に戻るからなー！」

「分かつてるつてームギ！そっちいいか？」

「うん！」

「せーの！」

律の合図と同時に絢が点火し唯の後ろから噴出花火が上がった

「最後の曲！いつくぜー！」

ライブの真似事なのだがその光景は充分感動的なものを感じ取った

「空也、そのラジカセ取ってくれないか」

漑は今聞かせるのが一番だと判断したようだ

「ああ…」

ラジカセを漑に渡す

「目指せ武道館！」

律が拳を突き上げたの同時に漑が再生を押した

「武道館目指すならこれぐらい出来る様にならないとな」

「上手いもんだな」

しばらく聞いているととんでもない声が聞こえた

『お前が来るのを待っていたあゝ…ギャーーーーー………!!!!…!!』

ヘビメタの音楽だった

「ん？」

俺の背中に漑が張り付いていた

「聞こえない聞こえない聞こえない…」

聞こえないと連呼していたそれを見た律は悪い顔をして漑に近づいていった

「膝の皿屋敷…」

「キャー!!!」

「膝の皿の内側にフジツボがびっしり…」

「いやー!!!」

遂には俺に抱き着いて泣いてしまった

「律…悪ふざけしすぎ」

軽く律を睨む

「ごめんなさい…」

抱きつく漑の手を取り後ろを向く

「漑、大丈夫だ。お化けなんていねえよ。大丈夫だ」

手を握ったまま漑を慰める

「グスッ…ほんと？」

涙を両目いっぱい溜めて上目遣いで見てくる

「か、可愛い！」

「……！！！」

律と唯が少し遠くでそれを言ったが目の前でやられている俺にはとんでもない破壊力である

「お…俺、先に戻ってるから…」

手を離し、慌ててスタジオに戻る

「今は駄目だ…今は卑怯だ…」

俺の顔が真っ赤になってたのが手に取るように分かったので元に戻るまでギターを弾いていた

「クーくんどうしたんだろ？」

「零のあの顔を真正面から見たからな、あの破壊力はすさまじいぞ。お、スイカあるじゃん！唯食おうぜ！」

律が冷静に分析していたことすら知る由も無かった

しばらくすると零たちが戻ってきたが零はまだ拗ねていた

「零、悪かったって」

「っーん…」

そんなに可愛く拗ねないでください、俺が持たん…

「ねえクーくん」

「ん？」

「さっきのカセットのギターってそんなに難しいの？」

「もしかして弾けるのか？」

「うん！みてて！」

俺の目の前でさっきのラジカセの音と同じ音を鳴らす唯がいた

「どお！？」

「ちょっと待て…絀」

「はい？」

「ちょっと適当にキーボードを弾いてくれないか？で唯は聞いた音をギターで鳴らせ」

「「わかった」」

まず絀が適当にキーボードを弾き、終わった後で唯が俺が聞く限り完璧な音で弾いていく

「どうだ？」

紬は頷くだけだった

「絶対音感か…」

馬鹿と天才は紙一重というのがまさかここまでとはな

「絶対音感？」

唯が首をかしげた

「いや、わかんねえならいい。練習しようか…」

それからしばらく練習しお開きになった

「ふう…」

俺は今大浴場に浸かっている。女子たちは外付けの露天風呂に入っている

「今日は長い一日だった…」

本当に長かった…おかげでいろいろな事を知った充分収穫はあった
律も唯も明日は練習してくれるだろうそして…いま何故か溼の上目
遣いのあの顔が出てきた

バシャ！

「いらん事考える前にさっさと出よう」

さっぱりとした気持ちでキッチンに向かうと誰だかわからない少女

がいた

「誰？」

「あたしだよ！」

そういつて前髪をあげる

「なんだ律か」

「なんだたあなんだ！クウはぜんぜん変わんねえな」

「それが俺の売りだ」

コップに牛乳を注ぎ一気に飲み干す

「今日は疲れた…俺は寝るぞ」

「澪なら外で涼んでるぞ」

俺は右手だけ上げて応えたバルコニーに出ると律の言ったとおり澪がいた

「寝ないのか？」

「あ、空也…ちょっと涼んでるだけだ」

「そうか…」

澪のとなりで手すりに背中を預ける

「空也は、合宿に来て良かったか？」

漣が景色を見ながら俺に聞いてきた

「なんだ？いきなり…」

「いや、思ったただけだ」

俺は立ち上がり、漣と同じように景色を眺める

「一言で言うなら良かった。まだ練習不足とかそういう要素は有るがバンドをやるに欠かせないチームワークがより一層高まったとは思う」

「ああ…私も空也の知らなかった所も知ったし唯やムギの事もな」

「他者の全部を知らなくてもいい。ただ一つでいいんだ」

「え？」

漣が俺の顔を見た

「ただ一つそいつの心の底にある想い、それを知ればいい。唯みたいに天真爛漫な生き方が全員できるわけじゃない、どんな形であれそいつの心の底にある想いは表現しているそれを汲み取ってやる事だ」

「……………」

漣は黙って聞いていた視線を俺から離さずに

「やっぱり空也は優しいな」

そういつて漣は笑った

「ガラじゃねえな。じゃあ俺は寝るから」

漣の頭を撫でバルコニーから戻ろうとすると

「おやすみ、空也」

俺は右手を上げ応え、自分に当てられた部屋に戻った

翌日：日中は海で遊び、夕方から練習という日程になった三日目の午後の電車で帰るので三日目の午前中も練習になったみっちり練習し家に帰る頃にはヘトヘトになっていた

数日後律が漣に見せてはいけない写真を見せて意識を落とされていたのは知った事ではない

第五話（後書き）

アニメ第四話です

途中で出てきた曲は実際にある曲でいい曲なので興味がある方は検索してみてください

第六話

合宿も終わり、夏休みも中盤に差し掛かってきたある日

「空也でかけるぞ。準備しろ」

親父が俺の部屋にノックも無しに入ってきた

「ノックぐらいしろよ」

「お前なんぞに持ち合わせるマナーは無い」

仮にもアンタの息子だぞ…まあいい

「で？どこに行くんだ？」

「パーティだ！」

親父は勝手に俺のクローゼットからタキシードを取り出し俺に渡してきた

「ご遠慮します」

「それは受け付けん！五分で着替えろ。もっ下に使いの者を用意したからな」

それだけ言って親父は部屋から出た

「俺の意見はまるで採用されねえな」

渋々渡されたタキシードに着替え、待たせてある使いの者…もとい
大地の父だが…の所に向かった

「久しぶりだな、空也君。大地が空也君が軽音部に入ってから話す
機会が無いって寂しかったよ」

大地の父…不動英雄^{ふどうひでお}さんが車のドアを開け待っていた

「んなこと俺の知ったこっちゃねえよ。で？今日はどこのパーティ
に行くんだ？」

車に乗り込み、英雄さんが運転席に座る…というより親父はどこに
行ったんだ？

「今日は我が天城グループと琴吹財閥のパーティだよ」

「琴吹財閥とうちは関わりないだろうが」

紬と俺の家はお互いが巨大財閥で互いに名前を知っているだけで
本格的な関わりはなかった

「空吾から聞いたんだけど、この前、空也君と琴吹財閥のご令嬢が
軽音部の皆さんと一緒に合宿をやったそうじゃないか」

英雄さんの言葉に頷いた。ちなみに空吾というのが俺の親父の名前
である

「空吾は元々琴吹財閥に興味があってね、アプローチを掛ける絶好
のタイミングになったそうなんだよ。いつもなら代理の者を立てる

んだけど。この時は空吾自身が琴吹家に出向いてね」

「そこで意気投合したわけか…」

「ははは、さすが空也君、理解力があつて助かるよ」

「親父の事だ、これを機に本格的に琴吹財閥と親交を深めるつもりなんだろう」

英雄さんは頷いた

「空吾はああ見えて会社の経営手腕はすごいからね」

「知ってるよ。親父がここまで大きくしたんだから」

「そして、それは空也君にも受け継がれてる。その理解力と洞察力は空吾を遥かに凌いでいる、天城グループはまだまだ大きくなるよ」

「気持ち悪いいよ。英雄さん」

英雄さんは軽く笑っただけだった

「さあ、着いたよ。琴吹家だ」

英雄さんがドアを開け絨が出迎えてくれた

「空也君、お待ちしておりました」

パーティの衣装らしくドレスを着ていた

「紬、合宿以来だな。ドレスよく似合ってるよ」

「ありがとうございます。空也君もタキシードよくお似合いですわ」

紬と共にレッドカーペットを歩く、会場に入ると俺たちにお辞儀をされ会場の中心に招かれる

「だからこういうのは嫌いなんだ」

会場が俺たちを一個人と見ない、見ているのは俺や紬の父を見ている、それが嫌だった。音楽なら…バンドなら俺を俺として見てくれる…俺という存在を確認できる、俺はここにいるんだと…

「やっぱりこういうのは嫌いだった？」

紬が心配そうに俺を見てくる

「いや、そろそろこれにも慣れなきゃいけない…俺個人として見られなくてもな」

「そうですよ、空也君には不安そうな顔は似合わないわ、もっと自分に自信持つてください」

「ああ、ありがとな」

紬に笑顔を見せ、シャンパンを手取る。もちろん俺達にあわせノンアルコールである

「おお紬ここにいたか」

奥から高級そうな和服を着た初老の男性がやってきた

「お父さん、こちら天城グループ会長の御曹司で」

「天城空也です。この度はお招きいただき感謝します」

シャンパンを置き深々とお辞儀する

「ははは、空也君。そんなに畏まる事はない。もっと気楽に」

「ありがとうございます」

俺は頭を上げた

「うむ、空吾さんに良く似ている。大きくそしてすべてを包み込む大空のような目だ…資質は空吾さんを凌ぐものを持っている…どうだ？うちの紬を嫁にせんか」

「お、お父さん！」

爆弾発言に紬が慌てていた

「俺はそういう政略結婚みたいな事は好きじゃないです。お互いの為にもなりません、金儲けのためだけに結婚をしたくありません」

俺ははっきり紬の父にそう告げた

「ははは、そういうと思ったよ、同じ事を空吾さんから言われた。いや、試すような事をして悪かったね。私も政略結婚は好きじゃないそれでは子供たちに申し訳ないからね。空也君ははっきりしてい

ていいもう一人前の男だね」

「いえ、そんなことは…」

「謙遜する事はない、それは君の父も言っていた事だ。『あいつは俺よりも人の上に立つ資質があるって』ね」

「親父が…」

「ああ、まあせっかくのパーティだ楽しんでいきなさい」

琴吹父がそういつて去っていった

「ごめんなさい…父が」

紬が謝ってきた

「いや…いい親父さんだ。しっかり紬の事も考えてた、あの人なら俺の親父が興味を示す理由が分かる気がする」

「空也君…ありがとう」

紬が頭を上げ笑った

「礼を言われるような事は言っただけだよ」

飲みかけのシャンパンを手に取り一口飲む

「そつだ。空也君せっかく会ったんだし音合わせしない？」

「構わないが、俺ギター持ってきてねえぞ？」

「向こうにあるから大丈夫よ」

絀に連れられスタジオに入ったそこにはキーボードやピアノ、ギターにヴァイオリンといった楽器が置いてあった

「ヴァイオリンか……」

ヴァイオリンを手にしクラシックを弾いていく

「なら私も……」

絀がそれに対抗しピアノに座って俺に合わせるその時少しスタジオの扉が開いたのを確認できなかった

一通り弾き終わるとスタジオの扉が勢い良く開いた

「親父！」

「お父さん！」

お互いの父親が入ってきた

「さすがだな空也。ギターやめてやっぱりヴァイオリンにしないか？」

「空吾さんこれやらない手は無いですよ」

琴吹父がすぐに係りの者を呼び俺たちはパーティ会場のステージに

上げられた

「ここでさっきのを弾いてくれるかい？」

「俺は別に構わないが、紬は？」

「私も大丈夫」

琴吹父に承諾の意思を示し、ステージの幕が上がる。そして親父がナレーションをする

「ご来場の皆様、予定を変更し我らが天城家と琴吹家の嫡子二人によるコンサートをお聞き下さい」

親父が目で俺達に合図し、俺は紬に目線を送ると紬が頷きクラシックを演奏した

くくく

演奏が終わると拍手が舞い上がった。俺たちは礼をしてさっきいたスタジオに戻った

「紬、こういうの慣れてたのか？」

「ええ、小さい頃良く弾いてたし、今日も弾く予定だったから。それに空也君が引っ張ってくれたから安心して弾けたわ」

「そりゃ良かった」

俺はヴァイオリンを置きギターを手に取った

「空也君のヴァイオリン凄く上手だったしカッコよかった…私…空也君となら…結婚しても…」

紬がぶつぶつ言っていたのを聞こえていたが聞こえないフリした

「何か言ったか？」

「ううん！なんでもない！」

紬が顔を赤らめて首を振った

「そうか、じゃ音合わせしようぜ」

「うん！」

それからしばらく紬と音あわせをしてパーティに戻っていった

「嬉しそうだね」

「そう見えるか？」

帰りの車の中で英雄さんが話しかけた

「ええ、あのコンサートから戻ってきた時清々しい顔をしてたからなんとなくね」

「まあ…な」

窓の外に目を向けると澪と律を見つけた

「悪い、止めてくれるか？」

車を止めてもらい先に帰っててくれと合図し漑たちも下に向かう

「二人とも何してんだ？」

「クウ、なんて格好してんだ？」

「ん？ああ忘れてたな」

目を下げるとタキシードのままだった

「カッコいい…」

漑が俺から目を離さなかった

「まあ確かによく似合ってるけどな。その姿を見ると改めてクウの家が金持ちなんだって思うな」

律も素直な感想を告げた

「そんな事より何してたんだ？」

「ああベースの弦を買いに来たんだよ」

漑が袋を見せてくる

「それからお茶しようって流れなんだけど。空也も来るか？」

「ああ、構わねえよ」

「クウのタキシード姿をもっと見たいもんなんぜ」

律が漑をジト目で見る

「り！律！」

漑が顔を赤らめ律に抗議する

「キヤー！クウ助けてー」

律が俺の背中に隠れる

「あ…」

漑と俺の目があう、するとより漑の顔が赤くなった。マズイ、このままなら俺も顔が赤くなりかねん

「さっさと行くぞ」

漑の頭をポンと叩き俺は歩き出した

「ちょっと待てよークウ！」

律が俺の後について来るそれから二、三步遅れて漑がついて来る。そして喫茶店に入りコーヒーを啜る

「タキシード姿のクウはコーヒーが似合うな」

「あ…ああ…」

澪がまだ顔を赤らめていた

「澪もいいかげん慣れるよ」

それを皮切りに三人で雑談をし夕方になったので俺たちは店を出た
律と別れ澪と二人帰り道を歩く

「夏休みももう後半分か…」

「そうだな…」

俺の呟きに澪が返した

「空也は夏休みの課題はもうやったのか？」

「ああそれは終わった、最近はずっとギターを持ってるよ」

「夏休みが終わるとすぐ桜高祭だもんな」

「ああ、初めての俺たちのライブ…絶対成功させような」

「ああ！」

俺たちは夕日に照らされ笑いあった

その日の夜…

「さて…」

俺はギターを手にしヘッドフォンアンプにつなぎ練習する

「空也入るぞ」

「もう入ってんじゃないか」

親父が部屋に入ってから言った

「気にするな」

「気にするわ！で？何の用だよ」

「特に用は無い！」

じゃあ何で来たんだよ…

「あ、俺と母さんな明日からアメリカに行くから」

「何い！？」

結構重要なことだぞアンタ…

「で？いつ帰って来んだよ」

「分からん、仕事が片付くまで…一年ぐらいだな」

「結構かかるじゃねえか…良いのかよせっかく細んこと繋がりが出来たのに」

「残念だがしかたない。英雄にしばらく任せる」

「英雄さんなら大丈夫だな」

息子の大地はどうしようもないがな…

「それにお前がああ娘さんと一緒に部活をやる限り大丈夫だろ」

じゃあなといって親父が部屋から出て行った

「けっこうな嵐を起こしていきやがったな」

アメリカね…親父たちが行くのは珍しい事じゃねえが一年はなかなか長いな

「練習する気も無くなったな…風呂入って寝るか…」

翌日…

朝に親父たちを見送り、そのままの流れで商店街を散策する

「そっぴやギターの弦とピックが少なくなってたな」

俺は『10GIA』に向かい弦とピックを購入した

「うーん…ゲーセンでも行くか…」

購入したものを鞆の中にしまいゲーセンに向かう

「あー兄ちゃん！」

そこには律の弟、聡がいた

「聡じゃねーか。どうしたんだ？」

「家に居ても暇だし、遊びに来ただけど…一人じゃ面白くないね」

俺に期待の眼差しで見てる

「しゃーねえな…今からお前んちに行つてやるよ。ゲーセンは中学生には出費がきついだろ」

「さっすが兄ちゃん！」

目を輝かせて俺の手を取り俺を引っ張る

「分かったから手を離せ」

俺は苦笑いで律の家に向かった

「兄ちゃん早く早く！」

律の家に着くと聡が急かした

「姉ちゃんまだ起きてないよ」

律はまだ起きてないようだった

「兄ちゃんが来るの久しぶりだな」

聡がウキウキしながらゲームの準備をしながら呟いていた

「まあたまにはいいか…」

「俺強くなっただよ！」

聡がニヤリと笑った

「俺に勝ってから言えよ」

俺はコントローラーを持った

「…また負けた…」

聡が絶望の表情を見せた

「聡もまだまだだな」

時計を見ると一時すぎだった

「聡、ちよつと飯食おうぜ」

「うん、何食べる？」

次から次へとカップラーメンを取り出した

「聡…ちよつとキッチン借りるぞ？」

呆れて俺はキッチンに向かった

「ほれ」

簡単にチャーハンを作り、聡の前に置く

「兄ちゃん料理できたんだ。しかもめっちゃ上手い！」

聡がチャーハンをがつつくのを確認し俺も自分の分のチャーハンを食べた

チャーハンを食べ終わると洗い物をしながら聡と雑談していたそこに寝起きで明らかに無防備な律が下りてきた

「ク…クウ！何でこんなところに！」

律が顔を真っ赤にしていた

「お前、無防備だな」

俺の言葉に余計に顔を赤くし慌てていた。律も普段はがさつだけどやっぱり女の子だな、さすがに異性に寝起きは見られたくないだろ

「とりあえず、顔洗って着替えて来い。飯作ってやるから」

律は無言でコクコクと頷きリビングから消えていった

「さて…オムレツとウインナー、聡！朝はいつもパンか？」

「そっだよ」

「了解だ」

パンをオーブンに入れつまみを回す、卵をとき、粉チーズ、隠し味にマヨネーズを少量入れフライパンで形を整えつつ丸めつつ一緒にウィンナーを焼く

「こんなもんか…」

オムレツとウィンナーを一緒に皿に載せ、オムレツ、ウィンナーにケチャップをかける。オーブンからパンを取り出し、冷蔵庫にあったバターと一緒に乗せ食卓に置く、付け合せの少量のサラダを添えてオムレツも食卓に置くと律が下りてきた

「ナイスタイミングだ。できたぞ」

律を食卓に座らせ俺が反対側に座る

「クウの料理はいつでも美味しいな」

「そりゃ良かった」

律の感想を聞き聡がやっているゲームに目を向ける

「ありがとね」

「ん？何が？」

律に似合わない言葉が聞こえた

「聡と遊んでてくれて」

「気にすんなよ。俺にとっても弟みたいなもんだ」

軽く言葉を交わし律が食べ終わったので冷えた麦茶を入れて律の前に置き食べ終わった食器を取り上げ洗っていく

「それにお前の意外な一面も見れたしな」

「な！ク、クウ！」

律は俺に顔を赤らめて俺に抗議する

「受け売りだけど…もっと自分に自信持てよ。女の子なんだからな」

洗い物を終え、律の頭をポンと叩き聡の下に向かいしばらくゲームをした後夕食の食材を買わなければいけないのでお暇させてもらう

「またな律、聡も」

「またね！兄ちゃん！」

「また部活でな、クウ」

俺は律の家を出て、スーパーに向かう

「んー何を食うかな…」

不意ながら今日から飯の一人暮らしが始まったので夕食の食材を吟味する

「あれ？空也さん？どうしたんですか？こんなところで」

憂ちゃんが話しかけてきた

「憂ちゃんか、久しぶりだね」

「お久しぶりです。でこんなところでどうしたんですか？」

「夕食の食材を買いに来たんだ」

「空也さん自分で作るんですか？」

「ああ、自分ひとりだけなんでどうしようかと悩んでたところだ」

憂ちゃんが少し考えたような表情を見せ、俺に提案してきた

「じゃあ私の家で一緒に食べませんか？お姉ちゃんも喜ぶと思いますし」

「それはありがたいが、親御さんに迷惑だろ」

「大丈夫です。今日は家に帰ってきませんから」

いや、それはそれで問題があると思うのだが…

「あっ！もちろん嫌ならいいです！」

慌てたように、そして残念そうな顔を見せる憂ちゃんを見て少し笑ってしまった

「わかった。じゃあご相伴にあずかるうか」

俺の言葉に憂ちゃんの顔がパツと明るくなった。二人で買い物をしあまり材料は買わなかったが、一度俺の家に寄り、クーラーボックスを担いで唯の家に向かう

「空也さんが家に来るの久しぶりですね」

「久しぶりというか、これでまだ二回目だけど？」

「それでもです」

帰り道で憂ちゃんは上機嫌だった。憂ちゃんとはメールを何度かしただけで顔をちゃんと合わすのもまだ二回目だった

「さあ、どうぞ」

憂ちゃんがスリッパを用意して平沢家に上がる

「おかえり〜憂〜。あれ？クーくん？どうしたの？」

「スーパーで会ってね、一人で食べるみたいだったから招待したの」

「そうなんだ〜。クーくん憂の料理美味しいんだよ〜」

「お姉ちゃん…」

唯の言葉に憂ちゃんが照れていた

「憂ちゃん、俺も手伝うよ」

「いえいえ、大丈夫です！空也さんはお客さんですので待って下さい」

憂ちゃんは両手をブンブン振って断る

「ただご馳走になるだけじゃ悪いよ。でもってさすがに憂ちゃんにはこれはちょい厳しいだろ」

俺はクーラーボックスを開き、マグロの塊を見せた

「シンプルに刺身にしようと思ってな。これが天城家のやり方だ。」

「さっすがクーくん！」

唯がマグロに目をキラキラさせていた

「そういうわけで憂ちゃん良いかな？」

「そついつことならどうぞ」

憂ちゃんの承諾を受け、持ってきたまな板にマグロを乗せる。そしてマイ包丁を取り出した

「よし！」

マグロの塊を手際よくカットしていく、憂ちゃんは味噌汁やサラダを作っていく。ある程度までカットすると短冊のように切っていくそれを皿の上に盛っていく

「よし、こんなもんだろ」

「こつちも出来ました」

食卓に料理を並べていき全員で食べる

「おいしーい！」

「そりゃ良かった」

同じ言葉を昼ごろ言ったような気がするが気にしないでおう

「そつえば空也さんの包丁、細くて綺麗でしたね」

「よく見てるね憂ちゃん」

すつと俺の包丁をケースから取り出す。俺が小さい頃に親父に買ってもらったものであまり好感は持てない代物だ

「いいな、そんな包丁が私も欲しいな」

「憂は本当に料理が好きだもんね」

憂ちゃんが羨ましそうな顔をし、唯はひたすらマグロを食べていた

「この包丁、憂ちゃんにあげるよ」

包丁をケースに入れて憂ちゃんに差し出す

「えっ！そんな悪いですよ！」

「今日招待してくれたお礼だ。それに俺はあまり料理をしないから、毎日料理する憂ちゃんの手にあつたほうがこの包丁も幸せだよ」

俺は笑いながら憂ちゃんの手に渡した

「ありがとうございます！大事にしますね！」

憂ちゃんが包丁を抱きしめ満面の笑みでこたえた

「いいな〜憂〜」

「唯にはまた今度な」

「約束だよクーくん！」

「はいはい」

包丁をもらった憂ちゃんは終始嬉しそうな顔をしながら夕食を食べていた

夕食を食べ終わると憂ちゃんが洗い物をしてくれていた

「唯、ギターもってこい。見てやる」

唯が頷き素直にギターを持ってくる

「クーくんここがわからないんだ〜」

唯が譜面を渡してくる

「ここはな…」

唯のギターを借り実演しながら教える

「空也さん、お姉ちゃん。お茶どうぞ」

「サンキュ、憂ちゃん」

憂ちゃんからお茶を受け取り、ひとまず休憩する

「さすがクーくんだね。私がわからないところすぐ分かっちゃうんだもん」

「分かる範囲で、だけどな」

「空也さんが分からない部分なんてあるんですか？」

「まあな」

お茶を飲みながら雑談を交わしていく

「でも唯は本当に飲み込みが早いな。教えがいがある」

「えっへん！」

「でもまだまだだけどな」

胸をはった唯がどんどんしぼんでいった。それからしばらく唯のギターを見て。遅くなっではいけないので早めにお暇させてもらう

「唯、また部活でな。憂、また今度な」

「今日はありがとうございました。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

唯の家を出てしばらく歩く

「ん？ 澪か」

コンビニから澪が出てきた

「あ…空也…」

「よう、なにしてんだ？」

「ああ、ちょっとアイスを買いにな」

コンビニの袋を俺に見せ、並んで歩き出す

「あ、ちようどいいのがあるぞ」

そういつてクーラーボックスの蓋を開く、まだ中は冷えていた

「じゃあ遠慮なく」

クーラーボックスに澪のアイスを入れて再び歩き出す

「空也はどこに行ってたんだ？」

「唯の家に、ご相伴を預かりにいった」

「え？」

「親父と母さんが仕事でアメリカに行つてな、今日から一人暮らしなんだ。」

それから唯の家にいった経緯を簡単に話した

「一年も一人暮らしで寂しくないのか？」

「なんとかなるさ。漣や軽音部の皆が居る。寂しくは無いさ」

漣の頭をポンポンと叩き笑顔をみせる

「そうだな」

漣が軽く笑った

「後、この事は他の人には言つなよ？お前に言ったのが初めてなんだからな」

「なんで私なんだ？」

「お前とは家が近いっていうのもあるが、なんとなくお前には言うときだった」

「それって……」

「特に深い意味はねえよ。それよか早くしないとアイス溶けちゃう」

ぞ」

「そ…そうだな」

澪が慌てて俺の横に並んで歩き出し、しばらくすると澪の家の前に着いた

「ほれ」

クーラーボックスから澪のアイスを取り出す

「ああ、ありがとな。そうだ一個空也にあげる」

コンビニの袋から一つアイスを取り出して俺に渡す

「サンキュ、じゃお休みな」

「ああ、おやすみ」

家に帰るとアイスを冷凍庫に入れ、軽くシャワーを浴びベットになった

第六話（後書き）

完全オリジナルです。アニメで合宿が終わると新学期が始まってたので入れてみました

第七話

夏休みも終わり、二学期に突入した。分かっていた事だが親父たちはまだ帰ってこない。この前、英雄さんじゃない使いの者が親父たちの冬服を取りに来たから年内に帰ってくる事は無いものと推測できる

「空也、ちょっといい？」

和に話しかけられ、周りを見るとHRが終わり各々部活に行く者や帰る者もいた

「空也？」

「ん？ああ、悪い。何の用だ？」

和が俺の顔を覗き込み不思議そうな顔をする

「空也がボーっとするなんて珍しいわね」

「失敬な。唯じゃねえんだから」

「ヒドいよ！クーくん！」

和の後ろにしっかりと唯が居た

「クーくん、一緒に部活にいこ！」

「悪い、和がちよっと俺に用事があるようなんだな、先に行つてて

くれ」

「ごめんね、唯。ちょっと空也借りるから」
人を物みたいに言うなよ

「わかった。じゃクーくん後でね!」

パタパタと走って唯は音楽室に向かった

「じゃ、行こうか」

俺は席を立って歩き出す

「どこに行くつもり?」

「生徒会室。軽音部に用があるんだろ?」

「空也は察しがよくて助かるわ」

俺と和は並んで生徒会室に向かった。そこで知らされたのは衝撃の事実だった

「軽音部が部活として認知されてないだど?」

「部活申請紙が出されて無いみたいなの」

俺の前に申請用紙がファイリングされたファイルを差し出す

「マジでねえな」

「でしょ？空也が部長だと思ったからこうして来てもらったの」

「残念ながら俺は部長ではない。たぶん律あたりだろ。漣が部長ならこんな事にはならないからな。俺でもこんな事はしねえよ」

そんな話をしていると生徒会室の扉が勢いよく開いた

「たのもー！」

「あたしが部長だ！」

唯と律が乱入してきた

「和ちゃん！それにクーくん！なんでここに？」

「だって私生徒会だし、空也には生徒会からの用事で来てもらったの」

「生徒会からの用事？まさか！クウを生徒会に引き抜こうって魂胆か！」

「違う。そして律、お前今自分であたしが部長だって言ってたな？」

俺が席を立ち律に詰め寄る

「そうだ！あたしが部長だ！」

「なら部長さん！何で部活申請用紙が出てないのかな？」

ユラリと俺は律に近づく

「何だそれ？あたしは知らないぞ？」

「知ってるだろ！」

漣が入り口に立って禍々しいオーラを放って事の顛末を話すと律は目を泳がせた

「「やっぱりお前の仕業か……！」」

俺と漣が怒鳴る

「まあまあ、りっちゃんも悪気があってやったんじゃないんだし……」

「「紬、（ムギ）は律を甘やかしすぎなんだ……！」」

紬をも一蹴し漣と二人で律を怒鳴る

「なんていうか……唯にはぴったりの部活ね、軽音部って……」

この一連のやり取りを見て和がポツリと呟いた

「しょうがないわね、私がなんとかしてあげる」

そっいつて和は部活申請用紙を取り出した

「軽音部って、部長は田井中さん、副部長は？」

「クウ！」

「俺かよ！つてか和も素直に書くなよ！」

「だってピッタリじゃない。軽音部の舵取りお願いするわ」

和の悪びれた素振りの無い態度に何も言えなくなった

「顧問は？」

「……顧問？」「……」

俺以外の四人が首を傾げていた。てか漚もかよ

「はあ…山中先生あたりがいいんじゃないか？音楽担当だし、あの人の手をチラッとみたが相当ギターをやりこんでる手だったぞ」

「そうか！者共！突撃ー！」

律を先頭に四人が部活申請用紙をもって山中先生の下に向かった

「やれやれ……」

「空也も大変ね」

「まあな。でもあいつ等のおかげで毎日が飽きない」

俺は和に振り返って笑った

「今の空也、いい顔してるわ。唯のことお願いね」

「ああ」

俺は生徒会室を出て音楽準備室に向かったそしてドアを開けると机の上に卒アルが置いてあった

「これは…あのダンボールに入ってたやつか…」

パラパラとめくっていくとメイクをしているがそこには山中先生が写っていたということはあのテープの声は山中先生か…これは面白くなりそうだ

ニヤリと笑ってアルバムと小さいラジカセを持って物陰に隠れる。すると部室の扉が轟音を立てて開いた

「そこまでだ。山中先生」

「天城君！」

「先生なら来ると思ったよ。こんな過去は知られたくないもんな」
卒アルを開き写真を見せる

「なんかクウが名探偵みたいだ」

追いかけてきたであろう女子四人が入り口に立っていた

「そしてさらにこの声だ」

カチッとラジカセの再生ボタンを押す

『お前が来るのを待っていたあゝ…ギャーーーー！！！！！！』

これを聞いた山中先生は隅っこで小さくなった。その隣で漣が小さく震えていたがあえて今は気にしないこれも顧問獲得のためだ

「先生のイメージからは遠くはなれた、ヘビメタをなぜ…？」

「あれは…八年も前のこと…」

「…突然回想を始めた！」「」

律、唯、紬が突っ込んだがあえてここも無視してギターを持つ。話を聞くと高校時代に好きな人がいたのだが告白したところ断られ、もつとワイルドな人が好きという人のためヘビメタをやりだし早い話が行き過ぎてしまったようだ

「じゃあ先生ギターできるんだよね！」

「ちょっと弾いてみて！」

律と唯が先生に無理やり唯のギターを持たせる、途端に先生の中で衝撃が走ったようだ…面白くなってきたな…唯のギターをアンプに刺し、電源を入れ、俺は先生の横に立つ

「しゃーねえな…」

「…目つき変わった！！」「」

先生が眼鏡をとり立ち上がる

「空也！しっかり付いて来い！」

「任せろ！」

俺と二人で早弾き、タッピング、齒ギター…は流石に俺はやらなかったが先生はそこまでやっていた

「お前らぁ！！！」

「「「は…はい！！」「」「」

「音楽室を勝手に使いすぎやねん！！！！」

「「「すみませんでした！！」「」「」

目つきが変わったままで先生が怒鳴り、女子たちが土下座する

「だいたいなあ…ってあれ？」

先生が正気に戻ったようだ

「今の見た…？」

女子四人がコクコクと頷いた

「せっかくここまでおしとやかな先生で来てたのに」

山中先生が膝から崩れ落ちた

「先生…顔上げて」

律が先生の肩に手を当てる

「リッちゃん…」

まわりから見ればいい光景なのだが…いかんせん俺には悪魔の笑顔にしか見えなかった

「バラされたくなければ」

「軽音部の顧問をやってください」

律と俺が息を合わせた

「りっちゃんとクーくん！たくましい子！」

この脅しをとどめに山中先生は頷き部活申請用紙を和に提出した

「確かに受け取りました。桜高祭頑張つてね」

俺は頷き部室に戻る

「帰ってきたな、空也。今から先生に聞いてもらうんだ。用意してくれ」

「はいよ」

まだ名前すら決まっていなかった曲と『Funny Bunny』を聞いてもらう

「ていうオリジナルなんですけど、どうですか？」

二曲が終わると澪が先生に聞いた

「出だしのタイミングとかいろいろあるけど…ボーカルは誰なの？」

「……あつ！」「……」

「もしかして、歌詞とタイトルもまだ…とか？」

女子四人が目を泳がせる

「二曲とも？」

「二曲目だけは。タイトルも歌詞も有る」

俺は鞆の中から歌詞カードを皆に配った

「二曲目は俺の作曲だからな。その辺は抜かりなくやっている」

「じゃあ二曲目はいいとして一曲目は？」

また女子たちが目を背ける

「貴方たちボーカルも無しに！桜高祭に出ようとしたわけ！」

遂に先生が切れた

「貴方たちねえ！」「先生！」「ああ！？」

「…ケーキいかがですか？」

紬がケーキを差し出した。今ケーキは必要か？

「……いただきます！」

「」「」「食うんかい！！」「」「」

ティータイムで話し合った結果俺に何でも任せようでは駄目だという事で澪が歌詞を作る事になった

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「歌詞作りだよ」

「正直な所不安はある。私なんかで出来るのか…でも空也ができたんだ。私にも出来るはずだ」

「その自信が有ればできるさ」

澪の頭をポンポンとたたく

「全く、空也は凄いな…私が言わずとも私の気持ちを分かってくれて…」

「偶然だよ。確信なんてどこにも無い。ただの勘だ」

「それでもだよ…ありがとな」

「ああ」

俺はニッと笑った

数日後…

「もう出来たのか？」

漣が頷き一枚のルーズリーフを取り出した…ある意味天才だな

「見せて見せて！」

「見せろー漣！」

「私も見たいです！」

女子三人が我先にと言つもんだから漣は余計に出しづらくなっていた

「やれやれ…よつと」

「あつ！こら空也！」

漣の手からルーズリーフを取り上げ歌詞を読んでいく

君を見てるといつもハートDOKI DOKI

揺れる思いはマシユマロみたいにふわふわ…

「かゆっ！」

律と山中先生が背中を掻き毟っていた

「やっぱり駄目なんだろうか？ 私なりによく書けたと思うんだけど……」

漑が瞼に涙を溜めていた……

「悪くは無いんだけど！ ただもうちょっと……なあ唯？」

律が助けを求めて唯を見るが

「すごくいい……漑ちゃん！ 私すごく好きだよこの歌詞！」

「なっ！」

唯はこの歌詞を好きになっていた

「ムギは！」

紬は目をキラキラさせていた

「ムギもこの歌詞好きか？」

「はい」

「本当に？」

「yes」

「マジで？」

「ほんとこいです」

律と紬のやり取りを横目に漑が俺のところに来てきた

「く、空也はどう思う？この歌詞…やっぱり駄目かな？」

漑が上目遣いで俺を見てくる

「良いんじゃないの？よく出来てるよ。もっと自信を持てよ。そしてそんな目で俺を見るな、勝てん」

「ありがとう…でも何に勝つんだ？」

「深く聞くな、で？ボーカルは誰がするんだ？」

「そりゃ漑だろ」

「え！？」

漑の視線が俺から律に変わる

「私は無理だよ」

「何で？」

「だって…こんな恥ずかしい歌、歌えないよ！」

「「おい作者！」」

漣が小さくなり俺と律がつっこむチラツと唯を見ると目をキラキラさせていた

「ムギ、やってみるか？」

「私！？私はキーボードで精一杯だし」

「だよなあ」

律がチラツと唯を見ると発声練習していた

「クウは？」

「俺ももう一曲のほうで手一杯だ。それに…まあ…あれだ」

俺は律に目線で唯を見るように合図する。唯は今にも泣きそうな目をしていた

「唯、やってみるか？」

「え？私？」

律の言葉にパツと笑顔になった

「でもあゝ私い、あんまり歌うまくないしい、ちゃんと勤まるかどうか「じゃあいい」嘘！歌う！歌わせてください！」

いらん言い訳をすると律がバツサリ切り唯は手のひらを返して懇願していた

「じゃあ歌ってみようか！」

俺たちは唯の歌をテストした

「君を見てると「ストップ！」え？」

「ギターを使えギターを！」

「あ、忘れてたあゝ」

「全く……」

次はちゃんとギターを弾いてるが……

「今度は歌を忘れてるな」

「うつつうつ……ギターを弾きながら歌が歌えない……」

「しょうがないわね、私が特訓してあげるわ」

さわちゃんが唯に提案する

「それじゃまず歯ギターのやり方から」

「いらん事教えんでいい」

「ぶうゝ、仕方ないわね。しっかり着いていらっしやい！」

「はい！」

唯とさわちゃんは走って音楽室を出て行った

「じゃあ次はクウ歌ってみようか」

「何で俺まで？」

「クウも唯みたいな事になってたら嫌だからな」

「まあいいけど…」

俺はギターを持って歌いだした

）
）
）

「こんなもんだ」

あっさり歌い上げ感想を待つ

「クウは人間なのか？何で何でも出来るんだよ！」

「すごいまかった」

「はい…とても上手でした」

三者三様の感想を貰い、唯はさわちゃんのマンツーマンでの練習なので俺は自分の練習に専念できた。そして事件は数日後に起きた

ブブブッブブブ

不意にケータイが震えると憂ちゃんからの着信だった

「憂ちゃんどうしたんだ？」

「お姉ちゃんが、お姉ちゃんが…」

電話先の憂ちゃんが慌てて電話してきたようで一度落ち着かせて用件を聞いた

「お姉ちゃんが声枯れちゃって…なんか凄い声になってるんですけど…」

「それマジで言ってる？」

「はい…」

この時期に声が枯れるって桜高祭まであと数日だぞ？

「とりあえず。そっちいくから待ってて」

電話を切り、自転車に乗って唯の家に向かう。しばらくすると唯の家についた。インターホンを押し中に入れてもらう

「グーぐんどうじだの？」

誰だよグーぐんって…

「見事にやつちゃったな」

「ぞうみだい…」

「分かったから何も喋るな」

唯は素直に頷いた

「どうしましょう…空也さん。私こんなこと初めてでどうしたらいいか…」

「落ち着け、憂ちゃん。一時的なものだから数日立てば治る。けど、とりあえずのど飴と喉に優しい食事をお願いできるかな？」

「分かりました。でも、それで学園祭間に合うんですか？」

「正直な所、難しいな。治らなかつたら別のボーカルを立てるしかない。唯、明日は部室に来るのか？」

唯は頷いた

「じゃあそこで考えるしかないな…」

消去法で漣しかないがどうにかするしかないな…

有る程度まで憂ちゃんに指示をした後俺は帰ることにする

「夜分遅くにすいませんでした」

「いいよ。また困った事があつたらいつでも言ってくれたら良い。またな」

翌日…

「じゃあ『ふわふわ時間』と『Funny Bunny』、ボーカルは一曲目は唯、二曲目は空也でいいのね。でも本当にいいの？唯がボーカルで」

「大丈夫だろ、ここ一週間ずっとさわちゃんの家で練習してたからするとバンと部室のドアが開きさわちゃんが現れた

「さあ唯ちゃん！見せてあげて！」

唯が脇から現れ、ギターを披露する。確かにギターの腕は上がっているが、問題の声は…

「ぎみをみでるといずもばーどどぎどぎ」

ボエーという表現がよく似合っしやがれ声だった…やっぱり駄目だったか…

「練習させすぎちゃった」

「ごえがれじゃった」

同じポーズをとって謝る

「やかましい！」

「どうするの？ボーカル変えるなら今日中よ？」

ボーカルまで細かく聞くんだなここの生徒会は…

「そうなのか！？じゃあ…」

自然と漑に視線が集まる

「え？わたし？」

「しかいねえんじゃね？歌詞覚えてるだろうし…」

「私がボーカル…プシュ」

漑が顔を真っ赤にして倒れてしまった

「和、『ふわふわ時間』のボーカルは漑でよろしく」

「ええ…わかった」

桜高祭まであと三日！

第七話（後書き）

アニメ第五話です

呼んでいる方に質問しますサブタイトル着けたほうがよろしいでしょうか？

ご返答お待ちしております

第八話

ボーカルが唯から漣に代わり、早三日が過ぎた本日、桜高祭が開催された

「いらっしやい、いらっしやい！焼きそばおいしいよ。空也も声出せよ！」

「てか、お前久しぶりだな大地」

大地と二人クラスの呼び込みをする

「休学でもしてたのか？」

「毎日来てたわ！お前と話す機会がなかったただけだ！お前が軽音部に入ってからというもの俺は「はいはい」久しぶりの出番を被せるな！」

「テニス部に入っただんじゃなかったのかよ？」

「辞めた」

「あつそ」

「興味無いんだったら聞くなよ！」

大地がやいやい言ってるのを横目に適当に呼び込みをしていると漣がやってきた

「空也、練習しよう」

「俺はかまわねえよ」

「あ、澪ちゃん！」

「不動君、久しぶりだな」

「澪ちゃんまで……てか空也！お前当番抜け出す気かよ！」

浮き沈みが激しいな、新芸か？

「抜け出すんじゃない、この場をお前に任せると言っただよ」

「任せる？」

「お前の能力があれば俺は違う場所に行って呼び込みが出来る。俺の期待を裏切るのか？」

俺の言葉に大地が目を燃やした

「そういうことならこの俺、不動大地に任せろ！」

「おお任せた！」

大地が大声を張り上げ呼び込みに行ってしまった

「いっちょあがり」

「不動君、相変わらずだな」

「まあな、んじゃ行くぞ」

それから唯の当番の場所に行った

「唯、練習しようよ」

「零ちゃん！行きだいいんだけど朝一の当番だから…」

「てか天城くんも当番でしょ」

クラスの女子からジト目で言われた

「俺の分も大地がカバーしてくれるから問題ない」

「不動君…なんで疑問を持たないんだろ…」

俺に呆れるより大地に呆れていた

「じゃ頑張れよ唯」

その後俺たちは律と紬の場所に向かった

「律、練習しよう！」

律はお化け屋敷の受付をしていた

「行きたいんだけど…あたしが言いだしっぺだからなぐせめて自分の当番はやらないとな」

俺の右耳を襲う高音、発生源はもちろん漑だ

「漑ちゃんだいじょうぶ？」

「今お前が来るのは逆効果だ。それより律と同じ時間で交代か？」

「うん」

「了解だ、俺たちは先に行って練習してるな」

紬と別れ、右腕に漑をぶら下げたまま出口に向かう

出口付近で漑に話しかける

「もう出口だ。もう大丈夫だからな？」

「あ、ああ…助かった」

ふらふらとした足取りで出口から廊下に出て、二人で音楽室に向かう。後方で律がニヤニヤしていたが俺はそれに気づけなかった

「結局俺たちだけか…」

ギターを取り出しチューニングする

「空也のギターが有るだけでもまだマシだよ。空也が来てくれなかったらアカペラで歌うところだったからな」

「じゃあ『ふわふわ』をメインでやるぞ？まだ不安なんだろう？」

「ああ、頼む」

メトロノームを取り出し、そのリズムに合わせてギターとベースの二重奏を奏でる

くくく

何度も通して漑はベースとボーカルの練習をする

「どうだ？少しは落ち着いたか？」

「ああ、少しな」

「そりゃ良かった」

「空也はいつも私のそばにいて助けてくれるな」

「何だ？いきなり？」

俺は壁に背中を預け漑の話聞く

「私、怖がりで、恥ずかしがりで、痛い話もだめで…でも、空也がいるから、空也と一緒になら…そのどれもが克服できる…だから…ありがとな」

漑の心から出てるであろう笑顔に俺の鼓動が高まった

「ガラじゃないこと言っなよ…練習するぞ」

このまま行くと俺の顔が赤くなるから、慌てて話題を変える…ん？

「何見てやがる」

部室のドアを開けると律、唯、紬がいた

「何か入りづらい空気だったから…つい…」

「はぁ…さっさと練習するぞ」

「「お…おー！」」

唯と紬がギクシャクした動きで右手を上げる

「やれやれ…」

それからしばらく練習をして少し休憩を取っていると

「皆居るわねー！」

さわちゃんが入ってきた

「不本意だけど軽音部の顧問になったわけだし、何か手伝おうと思つて、衣装作つてきましたー！」

さわちゃん俺たちに着せたいだけだな

「タイミングが…その…」

律が目線で澪を指す

「あ、あ、あ、あんな服着て…わ、わ、わ、私がボーカル…」

澪がカタカタしていた

「うーん…お気に召さなかったかあ…じゃあ私の昔の衣装はどう？」

どこに持っていたのか知らないがヘビメタとも言いがたい衣装を持ち出した

「さっきの衣装のほうがいいです！」

「さわちゃん、こんなのあたしたちが来ても恥ずかしいぜ」

「だよな！」

さすがに律が澪に味方する

「でもあの子達を見て」

さわちゃんの目の先には衣装を着てはしゃぐ唯と紬がいた

「空也君にはこれを用意したし」

さわちゃんが俺に執事の服を持ってきた

「じゃ頑張つてねえ」

衣装を置くだけ置いて出て行ってしまった

「まったく…あの人は…」

「何も無かった…何も無かったんだ…」

律はそう自分に言い聞かせ

「は…はは…ははは…」

漣は遠くを見て笑っていた

それからしばらく練習した後機材を運ぶ時間になったので皆で手分けして運ぶ

「ゝ」

鼻歌を歌いながら機材を運ぶ紬と

「ほい」「そら」「よつと」

テキパキ運ぶ俺のほとんど二人係で運んだ

「ふう…」

「はい、空也君」

俺の指定席の長椅子に座ると紬が紅茶を渡してきた

「サンキュ」

素直に受け取り、紅茶に舌鼓をうつ

「機材運び終わった？」

気分転換に行っていた澪が戻ってきた

「ずいぶん落ち着いたじゃねえか？」

「私も大人にならなきゃいけないからな。こんなことで緊張してられないからな」

そういつて澪は紅茶を持つ

カチャカチャカチャ

尋常じゃないほどティーカップが震えていた

「ぜんぜん駄目じゃねえか！」

律がツツコミ澪はティーカップを置いて

「……………やだ」

「え？」

「律！たのむボーカル変わってくれ！」

「じゃあドラムはどうするんだよ？」

「ドラムは私がやるから！」

「じゃあベースどうすんだよ？」

「ベースも私がやるから！」

「じゃあやつてもらおうか！逆に見てみたいわ！」

漣と律の漫才を聞きながら紅茶を飲む

「ごめんね、漣ちゃん。私がこんな声になったばかりに……」

唯の声は有る程度は戻ったがまだ声は枯れていた

「ごめん、そんなつもりで言ったんじゃないんだ……」

一気にしんみりとした空気になったこれじゃ成功するものも成功しないな

「あ！MC考えなきゃな！」

その空気を打破したのは律だった

「メンバー紹介します！まず最初に休みの日はゴロゴロ、大好きなものはお菓子！ギター平沢唯！」

唯が弾き真似をしながら飛び跳ねる

「お次もギター！プロ並みのギターの腕と甘いマスクで観客を魅了！さらに作詞作曲もでき、ボーカルも勤める軽音部ただ一人の男子！天城空也！」

「続いてキーボード！お菓子の目利きは私に任せろ！おっとりぽわ

ぼわ琴吹紬！」

紬も弾き真似をして応える

「つづいてベース&ボーカル！怖がりで恥ずかしがり屋！軽音部のデンジヤラスクイーン秋山澪！」

ガン！

「誰がデンジヤラスだ誰が！」

「そのあたりが…」

律が澪に拳骨を貰っていた

「最後にドラムのこの私！容姿端麗、頭脳明晰！さわやか笑顔で皆のアイドル田井中律！」

ゴン！

「自分を持ち上げすぎだ」

再び澪から拳骨を貰っていた

それを見ていた唯と紬から笑い声が上がり、澪もつられて笑った。それをみた律は満足げに笑った

「律…」

律にしかわからない声で呟いた

「ん？」

「ナイス！」

律の頭をポンと叩く

「あ…あたしは部長だから」

律が若干顔を赤くなりながら胸を張った

「そうだな。さあ、そろそろ時間だ行こうぜ」

俺は立ち上がり俺を先頭に講堂に向かった

「来たわね軽音部。向こうに更衣室があるわ。着替えてきて」

講堂に入ると和がスタンバイしていた

「了解だ」

各々衣装を持って更衣室に入る。着替えた後、控え室にもどる

「へえ…空也執事なんだ」

「お呼びでしょうか？お嬢様？」

執事のように胸に手を当てる

「なにやってんの、大人しくしてて頂戴」

「承りました。お嬢様」

「全く……」

同じ生徒会であろう女子が俺から目を離さず、ずっとこっちを見ていた

「あの…何か？」

「いえいえ！お気になさらず！」

それでも俺をずっと見てくるが、気にするなと言われたので気にしないようにする

「クウ似合ってんじゃない！」

着替えが済んだ女子陣が出てきた

「クーくんかつこい〜」

「空也君は何着ても絵になりますね」

「お褒めのお言葉、痛み入ります。お嬢様」

胸に手を当て深々とお辞儀する

「クーくんなりきってるね〜」

「ほら澪も何か言ってやれよ！」

漣は黒をメインにしたドレスっぽい衣装を着ていた

「あゝ…まあ…似合ってるよ」

「あ…ありがとう…」

言葉少なげにお互いを見合う。そして生徒会の女子はより一層目をキラキラさせていた

「さあ、そろそろよ、準備して頂戴」

和の言葉に全員の空気が引き締まる

「く…空也！」

「どうした？」

「て…手を…」

俺が手を漣の前に差し出すと両手で包み込み漣の胸の前で祈るかのような形になった

「……………よし！」

パツと手を離し目を開ける

「落ち着いたか？」

「ああ、大丈夫だ」

若干俺の気が気じゃないのは言わないでおう

「さあ、行くぞ！俺たちの初ライブ！」

「「「おー！」「」」

「おー…」

俺の言葉に漑を除く全員が声を上げた、漑も小さいながら声をあげた。各々持ち場に着く。客席から見て前列に右から俺、漑。後列に紬、律、唯とスタンバイする。スタンバイが完了すると和に合図を送り幕が上がる。チラツと漑を見るとすでに汗を流していた。頭が真っ白になってやがる。それを察して律が曲を始めない

「皆さんこんにちはー！軽音部です！」

俺がマイクを通して喋りだした。やけくそだ、なるようになれ。律に手で漑を落ち着かせると合図を送る

「漑、クウが時間を作ってくれてる。落ち着け」

「皆、漑ちゃんが頑張って練習してるの知ってるもん」

「漑ちゃん。自信もって」

「空也…皆…」

とにかく早くしてくれ…俺が真っ白になる…

「クウもついいよ」

律の言葉が聞こえたので適当なところで話を切る

「じゃあ最初の曲聴いてください！『ふわふわ時間』！」

「ワン・ツー・スリー・フォー」

律のドラムと俺のリードギターから始まり、唯のサイドギター、絀のキーボード、澪のベースが入ってきて五重奏になり澪が歌を歌いだす

「君を見てるといつもハートときどき…」

澪が歌い上げると拍手が舞い上がった

「みんなー！ありがとうー！」

感極まった澪が声を上げた

「ここいらでメンバー紹介いきます！皆さんから見て左手奥をご覧ください！」

観客が唯を見る

「いつも一生懸命で天真爛漫！才能溢れるギター初心者！ギター＆ボーカル、平沢唯！」

ギューンとギターを弾いてからお辞儀する

「続きまして右手奥をご覧ください！」

「普段はおっとり、そして上品な物腰のお嬢様！キーボード、琴吹紬！」

キーボードを弾いて同じようにお辞儀する

「続きまして、左手前！普段は恥ずかしがり屋で怖がり、でもここぞという場面でしっかりと力を魅してくれ、先ほども見事なボーカルを務めてくれました！ベース&ボーカル、秋山澪！」

ベースを弾いて少し照れたような表情の澪がお辞儀する

「そして、舞台中央！我らが軽音部の部長！明るく活発でいつも元気一杯！ドラム、田井中律」

ドラムを叩き立ち上がってお辞儀する

「そして最後にこの俺！」

「いつも私たちを助けてくれて、私たちを引っ張って行ってくれる。私たちバンドの中心人物」

「ギターの腕も上手くて」

「作詞作曲も出来て」

「いつも私たちを包み込んでくれる大空のような人」

「『『ギター＆ボーカル、天城空也』』」

俺の言葉を遮って、漑、唯、律、紬と言葉を繋いでいき、最後に全員で声を合わせて俺の名前を呼ぶ

「やれやれ…」

俺は笑い、ギターを早弾きをしてお辞儀する

「次で最後です！聞いてください！『Funny Bunny』！」

くくく

俺と唯のギターと律のドラムから始まり漑のベースと紬のキーボードが入り、俺が歌を歌う、歌い終わると再び拍手が巻き起こった

「皆さんありがとうございました！」

全員で深々とお辞儀し、舞台から引いていく。その時嫌な予感がよぎり振り向くと漑がコードに引っかって倒れそうになっていた。

「チッ！」

体が勝手に反応しギターを投げ捨て、倒れる瞬間俺の体を滑り込ます

『おおー！』

観客から歓声が巻き起こり俺の上に人がいる感触があった

「空也、どうして？」

「何か知らんが体が勝手にな…」

「でも空也ギターが…」

「気にすんなよ。立てるか？」

俺が立ち上がり手を差し伸べる

「ああ」

俺の手を取り漣が立ち上がる。すると途端に観客から歓声が沸きあがる

「目立ちすぎたな。和、ボーっとすんな幕を下ろせ」

「ああ、うん！」

幕が下がりやつと一息つく

「カッコよかったぜ〜クウ」

などと茶化されたが対応できる許容範囲がすでに無かった。それからふわふわとした気分で片付けして帰った

数日後：

「ライブは大成功だったな！唯は初ライブにしては上々だったぞ」

「いやーそれほどでも」

「澪とクウにはファンクラブが出来たらしいしな。あの事件が拍車をかけたみたいだ」

二枚のチラシを律が差し出す

「当の本人たちは。舞台上で抱き合ってしまったまでに真っ白だけどな」

律が俺たちに目を向けると俺は長椅子で、澪は指定席でうつ伏せになっていた

第八話（後書き）

アニメとは違う結果に見えました。賛否両論だと思いますが、ご了承ください。

第九話

「……………」

俺は壊してしまったギターを見つめる。ネックが曲がり、ボディも割れていた

「ごめんな、俺が投げ捨てたばかりに…」

愛着があつたギターだけに悲しみが大きかった

「ごめん、空也！私のせいだ…」

「澪のせいじゃねえ。これは俺の責任だ」

後ろで澪が謝っていた。俺は振り向かずに応える

「また買えばいいじゃん！」

律の無神経な言葉に、俺はいつもの余裕が無かった

「お前、自分のドラムが壊れた時にそれを言われて嬉しいのかよ」

俺の刺々しい言い方に律は俯いてしまった

「悪い、お前に当たるつもりは無かったんだが…すまない、今日は帰るな」

俺は壊れたギターをケースにしまい、音楽室から出て行った

《零 Side》

初めて見た…

空也のあんなに悲しそうな顔を…

いつも優しく微笑んでくれる顔はどこにも伺えなかった…

なんだろう…？この胸の奥がズキズキと痛い…

空也にはいつも笑ってて欲しい…笑って私の頭を撫でて欲しい…

空也はいつも私を助けてくれた、踏み出す一歩をくれた。今度は私が助ける番…

でも、どうすればいいのかわからない…

空也が帰ってから少し練習したが、指揮官を失ったみたいに引つ張ってくれるギターが居ないから練習にならなかった

それから数日後…

空也はあれから姿を見せなくなった。唯と遊びに来ていた和から話を聞くと学校にも来ていない様子だった。空也の居ない部屋…なにか大きなピースを失ったみたいで無機質なものになっていた。律が元気を出して盛り上げようとしてくれるが空回りしていた

「はあ…」

いつもなら空也と帰るこの道も今は一人で歩く…どこか寂しく、ため息しか出ない。すると空也の家の方向から不動君がやってきた

「あれ？ 澪ちゃん？」

「不動君、どうしたんだ？」

「空也の所に行ってたんだ。あいつ最近学校に来ねーから」

空也と付き合いが長い不動君なら、何か分かるかもしれない。私は事の経緯を不動君に話した

「そうか、あんなドラマチックな場面の裏でそんな事が起きてたのか…なら空也を元気付けられるのは澪ちゃんしかいないな」

不動君は真剣な目をしていた

「でも、私…どうすればいいのか分からないんだ」

「なあ澪ちゃん、心ってどこにあると思う？」

不動君が真剣な顔のまま聞いてきた

「胸…？ 頭…？」

私は明確な答えが出なかった

「そう、心は心臓にも無い、脳にも心と呼べる所は存在しない。心

つてのは形無きものなんだ、形無きものだから空也は物に使い手の心が宿ると信じてる。ましてやギターだ、音楽をやる以上使い手の相棒になる存在、だから空也はギターに心を込めて弾いていたんだと思う。空也は自分の心を投げ捨てた事と思ってるんじゃないかな？でもその心を投げ捨ててまで助けたかったのは他ならぬ澪ちゃんなんだ、空也の心の中には澪ちゃんの存在が大きいんだと思う」

そう言って不動君は鍵を差し出した

「空也の家の鍵だ。親父から預かってきたんだけど澪ちゃんが使ったほうが良さそうだ。鍵は空也に渡してくれればいい」

私が鍵を受け取ると、不動君は行ってしまった。なんとなく空也が不動君を信頼する意味が分かったような気がした

私は空也の家の前に立つ覚悟を決めてインターホンを押すが反応が無い、私は不動君から預かった鍵を使って中に入る

「お、お邪魔します…」

昔の記憶を辿りに空也の部屋に向かいノックする

「く…空也…私だ。澪だ」

少しすると部屋のドアが開き、空也が姿を見せた

「澪…何でお前…」

「不動君から鍵を預かってきたんだ」

私は鍵を空也に差し出す。空也は鍵を受け取り私を部屋に招きいれる私はベッドに座り、空也は椅子に座る

「えっと…その…」

空也の顔を見て安心したのか私の頭の中は真っ白になって苦し紛れに部屋を見渡した

「あれ…ギターが…」

合宿の時に見たアコギしか置いてなかった

「前のは処分したんだ。もう直せないし、終わってしまった事をいつまでも引きずってられないしな」

空也の顔を見るとすこしふっ切れた顔をしていた

「じゃあ、私が来た意味が無いじゃないか…」

「なんだ、心配してきてくれたのか？」

私は小さく頷いた

「ありがとな、心配してくれて」

空也は立ち上がって私の頭をポンポンと叩く、これだ…これがいいんだ…少し恥ずかしいが心地いい、空也の優しさを感じる…

「せっかく来たんだ、飯ぐらい食ってけよ」

空也が部屋の外で手を叩くと。若い男性が現れた

「お呼びでしょうか。空也様」

空也様！？

「二人分の食事を頼む、整ったら迎えに来てくれ」

「畏まりました」

品のいいお辞儀をして男性は去っていく

「く、空也今の人は…？」

「ん？ああ執事だ」

執事！？

「仕事中は来て貰ってるんだ」

空也が指を指すと机の上に書類が積まれていた

「なんか忙しい時に来ちゃって悪いな」

「気にすんなよ。たいした量じゃない」

しばらく談笑していると、執事さんが迎えに来てリビングで食事を取り、空也は部屋に戻り、私は邪魔をしては悪いのでお暇する。執事さんが見送りに来てくれた

「本日はありがとうございました」

突然執事さんが私にお辞儀した

「な…何がですか？」

「空也様のことでございます。空也様は私共や、大地様が話しかけても、一言もお声を発せられませんでした。ですが本日、貴方が来られた事により、いつもの空也様に戻られたように思います。本日は本当にありがとうございました」

執事さんがまた深くお辞儀する

「いらん事言つてんじゃねえよ。それよりコーヒーを頼む」

空也が二階から降りてきて執事さんを一喝する

「漣、今日は来てくれてありがとな、これは礼だ。これからいつでも来い」

小さい箱を貰い開けると鍵が入っていた

「空也様もなかなかやりますね」

「うるせ！和田！いいからさっさとコーヒー入れて来い」

畏まりましたと執事さんがお辞儀してキッチンに消えていく

「俺もなるべく早く仕事片付けて、学校に行くから。そんな時にな」

「ああ、分かった。じゃあ空也、おやすみ」

空也が頷くのを確認すると私は空也の家から出た。よかった…空也が元気になって…

私は貰った鍵を見ながらそう思った

《空也 Side》

仕事を溜めていた訳じゃない

ただ今は違う事をして忘れたかった

後悔はしていない、澪を助けるためだったんだ

頭では分かっているが、この心にポツカリ空いた気持ちを受け止め

きれてないだけだ…

全ては俺の心の弱さだ…そんな時に澪が来てくれた。俺の体裁だけの言葉を信じてくれた、ホッと胸を撫で下ろす澪を見ると俺も気が楽になった

「空也様、コーヒーをお持ちしました」

「サンキュ」

コーヒーを受け取り一口すする

「いい子でしたね。あれが空也様の奥様になるわけですか…」

ブッ！

俺はコーヒーを噴出してしまった

「違うのですか？」

和田は軽く笑っていた

「ほんと、いい性格してるな」

「よく言われます」

悪びれも無く言いやがった

「でも本当に良かった。空也様が元気になられて…」

「ありがとよ」

「それはそうと先ほど空吾様からお電話がありまして、三日ほど前に未発売の新型のギターをお送りになられたそうです」

いろんなところにパイプを持つてるな…

「独自のルートなので明日の午後にはこちらに着くものと思われる。それから空吾様から伝言を預かりました『本格的に音楽をやるなら必要なものだから受け取れ』との事です」

「了解だ。それまでに仕事を済ませておく」

「はい、よろしく願います」

お辞儀をして和田が部屋から出て行く、新しいギターのためにも、さっさと仕事を終わらせるか…

翌日…

「別人のようなペースですね」

朝食を持ってきた和田がそう呟いた

「昼前には終わる、その時にまた来てくれ」

朝食を食べながらペンを走らせる

「ふう、こんなもんか…」

時計を見ると十一時過ぎだった

「空也様、ギターが届きました」

「いいタイミングだ。こっちも終わったぞ」

とりあえずギターを受け取り、ケースを開けると青を多く配色し、所々シルバーが光るギターだった

「これはなかなかお値段が高い代物ですね…」

「ああ」

アンプに繋ぎ、軽くストロークする

ジャーン

前のギターより音がクリアで低音が良く響く

「悪くないな…あ、忘れる前に渡しておく」

書類の束を和田に渡す

「そのまま英雄さんの所に戻ればいい」

「わかりました」

そう言っ て和田は部屋から出て行っ た

「さて、俺は学校に行くか。今まで迷惑かけたしな」

制服に着替え、ギターケースが肩に担げるタイプじゃないので左手に持ち家を出ると

「そうだろうと思ってました。近くまでお送りします。どうぞ」

和田が車のドアを開けて待っていた

「ほんとに気が利く執事だな」

「お褒めに預かり光栄です」

素直に車に乗り込み近くまで送ってもらっ

「では、私はこれで失礼します」

「ああ、英雄さんに宜しくな」

和田は頷き車を走らせ行ってしまった

「どうせ音楽室は開いてないしな。このまま教室に行くか…」

教室は日本史の授業中だったが、躊躇無く入り、自分の席に座る

「あいな、天城…」

「天保の改革！」

黒板の内容から推測し答える

「いや、そうなんだが…」

「水野忠邦！」

「いや、それもそうなんだが…まあいい授業を続ける」

「勝ったな…」

教師は授業を再開し、俺は勝ち誇っていた、そして休み時間、俺の席に唯と和、それに大地がやってきた

「クーくん遅いよ！」

「学校にも来ないで、心配したじゃない」

「空也ー！会いたかつぐふっ！」

大地のボディにパンチを浴びせ唯と和に向き直る

「悪かったな。心配かけて」

「そうだよークーくん！クーくんが居なかったから私ギターの練習できなかったんだから」

「さわちゃんがいるだろ」

「さわちゃんお茶飲んでばかりで教えてくれないんだもん」

「もしかして俺が居ない間お茶ばかり飲んでたのか？」

この問いに答えたのは和だった

「そうよ、私まで付き合わされたんだから」

「そりゃ迷惑かけたな」

「構わないわ。唯とも久しぶりにお茶飲めたし」

「そう言って貰えるとありがたい」

「やっぱり軽音部には空也が居ないと駄目ね。これからもしっかり舵取りお願いするわ」

「責任重大だな。おい、そろそろ授業始まるぞ、席に着け」

唯と和は自分の席に着いた。俺の横で気絶している大地をほっという

「ん？不動、何してるんだ？」

入ってきた教師が大地に聞くが反応は無い

「先生、こいつの事はほっとしてもらって結構です」

代わりに俺が答える

「そうか、では授業に入る」

通じちゃったよ。大地、ご愁傷様

そんなこんなで放課後：

「クーくん！部活にいこ！」

「ああ」

俺はギターケースを持って席を立ち、音楽室に向かう

「よう、皆の衆！元気か！」

音楽室の扉を勢い良く開ける

「空也！」

「空也君！」

「クウ！」

改めて聞くと誰一人呼び方が一緒の奴が居ないな隣のやつに至ってはクーくんなどと言ってくるしな

「ところで空也、そのケースはなんだ？それが新しいギターか？」

「ああ」

ギターをケースから出し、ふわふわ時間を弾く

「さすがに上手いな。クウは」

「ああ、前のギターより音もクリアになってる」

「クーくん、カッコい」

弾き終わると、紬は俺に紅茶を渡してきた

「空也君、どうぞ」

「サンキュ」

ギターを俺のスタンドにおいて長椅子に座り紅茶を受け取る

「やっぱり空也がそこに座っているのがしっくり来るな」

「そうだな」

漣と律が俺の前でそんなことを言っていた…そして俺は音楽室の扉から視線を感じた

「何見てんだ？」

音楽室から顔を出すと数人の女子が目をキラキラさせて俺を見ていた

「えっと…なに？どうしたの？」

「あの！空也君！握手してください！」

手を差し出され思わず握手すると私も！と、全員が手を出してくる

「律…なにこれ？」

俺が律に聞くととんでもない事が帰ってきた

「なにつてファンクラブだろ？」

「はい！私たち空也君ファンクラブです！」

そういえばそんなことを言っていたような気がするが…本当に有ったのか…

「ありがたいけど、ここに居ると部活の邪魔だから、節度は守ってな」

作り笑いだが女子たちは喜んで、去っていった

「やれやれ…出るんじゃなかった…」

少し冷めてしまった紅茶に一口つける。女子たちが笑いながら俺に寄ってくる。ここから再出発だ…

第九話（後書き）

オリジナルその式です

空也のギターはESP社のアンテロープANTELOPEです。価格は七十五万
ほどでオーダーメイドのカラーリングですので参考にどうぞ

以前まで使っていたギターはESP社、安価ブランドグラスGLASS R
フォレストootsのFORESTです価格は7万程です

皆様明けておめでとunggざいます

新年一発目です

第十話

「クリスマスパーティーをします！」

十二月も半ばに入り、いつものティータイム時に律が高らかに宣言した

「日時、十二月二十四日。場所ムギの家。経費千円…」

漣が律が作ってきたチラシの内容を読み上げる

「さて…」

俺は持ってきたアコギに手を伸ばした。新歓ライブに向けて、作曲中だ。前はエレキだったので今回はアコギを使って作曲する。前回の反省も踏まえて今回は先に歌詞を作ってから作曲する

「こら！クウ！人の話を聞けー！」

「ん？クリスマスパーティーだろ？聞いている聞いている」

律に顔を向けずに適当にあしらう

「聞いている聞いているって二回言う奴に限って聞いてないんだよな」

結構痛いところを突いてきやがる

「わかったよ、話聞きゃいいんだろ」

俺はさわちゃんが普段使っている椅子に腰を下ろした

「よし、話を戻すぞ。ムギの家はやっぱり駄目なんだよな」

「はい、ごめんなさい…」

律の言葉に紬が頭を下げる

「別に紬が謝る必要ねえよ。あいつが勝手に決めてたんだから」

俺が紬を慰める

「それを言われるとツライ…てかクウの家はどうなんだよ！」

「家も無理だ。クリスマスは毎年、執事たちがやけくそで家でパーティ開いてるから」

「それ家でもありますー」

俺と紬の意見が思わぬところで合ってしまった

「この二人の家って一体…どんだけ大きいんだ…」

漣と律は口を揃えて呟いた

「唯の家はどうだ？」

「私の家は大丈夫だよ」

即答だった

「いいの!？」

「うん、クリスマスはお父さんもお母さんも旅行でドイツに行つて居ないし」

なんともまあラブラブな夫婦だこつて…

「何か持つていきましようか？」

「大丈夫だよ。料理なら任せて」

紬の言葉に唯が胸を張つて立ち上がった

「憂ちゃんが作ってくれるもんな」

その後で言おうとしてるのが分かったので先に言つてしまう

「出来た妹で良かったな…」

澪がそう呟き、クリスマスパーティーの場所が決定した

「じゃあさ、プレゼント交換しようぜ!」

「あ!私やりたいです!」

律の言葉に紬が即座に応えた。まあ全員分のプレゼントを買うより遥かに楽ではあるから否定はしない

プレゼント交換をする事も決まり、やっと曲作りに戻れる。

「空は何してるんだ？」

澪が覗いてきた

「曲作りだよ。今のうちからやらねえと、俺のペースでは間に合わないからな」

「歌詞はどうするんだ？」

「それはもう出来てるが…今見せてもしょうがねえから曲が出来た時にみせるよ」

澪は頷きティータイムに戻っていった。俺はしばらく作曲をしてお開きになった。皆でそろって下校すると和が居た

「和さんも一緒にクリスマスパーティーしない？」

「私軽音部じゃないけどいいの？」

「いいのいいの！友達じゃん！」

律の言葉を決め手に和は頷いた。この日の夜、憂ちゃんからメールが来た

『もしかしたらクリスマスパーティーの料理一緒に作りませんか？』

憂ちゃん含めて七人分だもんな、一人ではきついだろう。憂ちゃんに承諾のメールを送り、二人で何を作るか電話をして夜も遅くなつたので電話を切り、ベッドに入る。プレゼント買いに行かなきゃな…

週末になると、俺の身の回りの世話に来ていた和田に留守を頼み商店街に足を進める。行きつけの店に入りプレゼントを買ったと紬に出会った

「よう、紬もプレゼント買いに来たのか？」

「はい。この後商店街の福引に行くの」

紬は福引の引換券をもってウキウキしていた

「俺もちょうど行くところだった。一緒に行くか」

紬と二人、商店街を歩く、終始紬は楽しそうだった

「紬からやれよ」

福引会場に着くと俺は、紬の背中をおした

「うん！」

引換券を一枚係りの人に渡し、福引でよく見る回るアレを回す。出てきたのは金色の玉だった

うん、強運だね…

「一等が出ましたー！」

カランカランと鳴らし高らかに係りの人が告げる

一等はハワイ旅行らしく、目録を紬に渡そうとするが、紬が拒否した
「ムギ!」

隣でよく聞いた声が聞こえると思ってはいたが…漑と律、それに唯と和も居た

「クーくんも居る!」

紬が交換してもらった。四等の某双六ゲームを持って向こうに歩いていく

「もういいですか?」

金色の玉の中にもどし、ひたすら混ぜていた係りの人に声をかける

「あ、はい!どうぞ」

引換券を渡し回す。出てきたのは金色だった

「……………あはは……………」

ひたすら混ぜていた係りの人は絶望の顔色をしていて、俺は苦笑いした

「「こいつらの強運は一体……………」」

律と漑が驚いていた。素直に目録を受け取り、皆のところに向かう

「くれ!」

律が手を差し出してきた

「何だよ……」

律の手を払った

「空也もプレゼント買いに来たのか？」

「ああ」

「クーくんは何買ったの？」

「言ってしまったら意味無いだろ」

「ぶう〜」

唯が文句を言っているが。あえて無視する

「じゃ、俺は行くな」

「空也、お茶ぐらい皆で飲んでいかない？」

和が俺を引き止めた

「魅力的な提案だが、これから用事があるんでな。また誘ってくれ」

俺は右手だけ上げて家に帰った

「お帰りなさいませ。空也様」

家に帰ると和田が待っていた

「和田、すまないが食材の手配を頼む」

「畏まりました。何の食材でございますか？」

「ターキーを作るんだ。その食材の手配を」

「畏まりました。二十四日の早朝にこちらに着くよう手配します」

和田は部屋の奥へ消えていった。ほんと気が利く執事だな、英雄さんが期待する理由が良く分かる

そして俺は秘密の特訓に入り、数日後、日付は二十四日

「空也様。食材が着きました」

少し早めの朝食を取っていると和田が姿を現し、クーラーボックスを俺の前に置いた。中には七面鳥や玉葱、ホワイトブレッドなどが入っていた

「早かったな」

「今日はここの飾りつけもしなければいけませんので」

そういつて色とりどりの装飾品を取り出した

「ま、頑張ってくれ。これは俺からのクリスマスプレゼントだ。皆で行ってくれ」

俺はこの前当てたハワイ旅行の目録を渡した

「ありがとうございます。これがあるからここの執事は辞められませんか」

はつきり言いやる

「ほんとにいい性格してるな。じゃあ、ありがとな。行ってくる」

「行つてらっしゃいませ」

和田のお辞儀を確認すると唯の家に向かった

ピンポン

食材が痛むと駄目なので英雄さんに送ってもらいインターホンを押す

「空也さん！いらっしゃい！どうぞ！」

憂ちゃんがスリッパを用意してくれる

「ありがとうございます。憂ちゃん」

憂ちゃんがキッチンに案内してくれる。キッチンには俺のためにプレゼントした包丁とまな板が用意されていた

「使ってくれてたんだ」

包丁を手にとるとちゃんと使われていた事が良く分かった

「はい！」

憂ちゃんが笑顔で頷く、いい持ち主に出会ったな…

俺はまな板の前に立ちクーラーボックスを開け七面鳥を取り出した

「打ち合わせどおり、俺はターキーを作るから。ケーキとかをお願いするな」

憂ちゃんは頷き料理に取り掛かる。俺も七面鳥からレバーとネックと呼ばれる部位を取り出した後七面鳥の中を洗い充分に水気をふき取る。その間にオーブンで焼いていた食パンを取り出しカットしていきオーブンをそのまま暖めておく、セロリと玉葱をカットしフライパンで色が変わるまで炒め、隣で茹でていたネックを手で解すのだが…

「どうしたの？ 憂ちゃん？」

憂ちゃんが俺の手元を凝視していた

「あ！ いえ！ 何でもないです！」

慌てて目を逸らすがちらちらとこちらを見ていた

「憂ちゃんも一緒に作るか？」

手を切られても困るので、憂ちゃんにも手伝ってもらい、溶き卵と予め作って持ってきたチキンブロス、ネックと炒めた野菜、トーストを混ぜ温めておいたオーブンに入れる

「よし、これで三十分焼いて、その間に七面鳥にバターを塗るぞ」

「はい」

二人で七面鳥にバターをくまなく塗り、塗った後に上から塩コショウをかける

「こうしたほうが香ばしくなるから覚えてた方がいいよ」

憂ちゃんはメモをしながらついてくる。少し時間が余ったので、サンドイッチやケーキに手を出し三十分経った

「こんなもんだな」

焼いた食材を取り出し、オーブンをもう少し高い温度で温めておく。焼いた具材を七面鳥の中に詰め込み穴を縫って塞ぎ再びオーブンの中に入れる

「次は一時間だな、サンドイッチとケーキに取り掛かるう」

「はい」

俺はサンドイッチを担当し憂ちゃんがケーキを担当するリビングに目をやると唯がまったりしていた

「唯は飾り付けするんだろ？皆が来る前にやってしまえよ」

「分かってるよークーくん」

そう言つて唯ははさみと折り紙を取り出した

「そこからかよ…」

「あはは…」

俺の呆れ顔に憂ちゃんは軽く笑っていた

「サンドイッチあがり！さて…ターキーは…」

オープンを見るといい感じに焼けていた

「こっちもケーキが焼きあがりました」

ターキーをひっくり返し、少し温度を弱くしてまた一時間焼く

「後は飾り付けだな。憂ちゃん、任せた。俺はおにぎりを作る」

憂ちゃんが頷き、作業に取り掛かるとインターホンが鳴った

「私行ってきますね」

憂ちゃんがエプロン姿のまま玄関に向かい濡たちを家に上げる

「ようー！」

俺はおにぎりを作りながら濡たちに挨拶をした

「空也も料理してるんだ」

「まあな、お前らは唯を手伝ってやってくれ」

「まかせろー！その代わり上手い料理を作ってくれよな！」

律に軽く答えると、皆は飾り付けを頑張っていた

おにぎりやサンドイッチを食卓に置きオーブンを開き竹串を刺す、
中から透明な汁が出てきていた

「よし、完成だ」

「こっちも出来ました！」

ケーキと同時に出来上がり、憂ちゃんを先頭に食卓に向かった

「おおー憂ちゃん凄いなー」

律がケーキを見て憂ちゃんを褒める

「そしてこれがメインディッシュだ」

食卓の真ん中にターキーを置く

「これ、空也が作ったのか？」

「ああ、憂ちゃんに手伝ってもらったけどな」

「とても勉強になりました」

憂ちゃんは俺にむかって笑顔でそう言った

「さて、後は和だけだな」

「和は遅れるらしいから先に乾杯しちゃお！」

唯がそういつと皆が頷きシャンパンの入ったグラスを持った

「くくくくくかんぱーい！」「くくくくく」

ちよつとまで…一人多くないか？

見渡すとさわちゃんがいつのまにか座っていた

「どこから不法侵入しやがった」

「失礼ね、空也君。なんでクリスマスパーティに私を呼ばないわけ！？」

「先生は彼氏さんと過ごすと思つて」

唯が爆弾を投下しまわりの空気が固まった

「私も過ごすつもりだったわよ！でも向こうがいきなり会えないつて…」

ドタキャンされたんだな

「罰として唯ちゃんはこれに着替えてきなさい！」

さわちゃんはサンタのコスプレ服をとりだした

「どこに持ってたんだ…そんなもん…」

俺はターキーを食べながらそう呟くが無視された

「じゃーん！どう？」

着替えてきた唯がポーズを取った

「駄目ね、唯ちゃんはやっぱり恥じらいが無いわ、ここは…やっぱり…」

さわちゃんが俺の隣に座っている澪を見た

「ひっ！」

途端に俺の後ろに隠れる、てか俺を盾にするな

「観念しなさい！」

躊躇無く澪に襲い掛かるさわちゃん

「いやー！」

「ちょっ！澪！俺を盾に！」

澪に引つ張られ玄関に逃げる、何で俺まで…

「こんにちはー」

玄関の外から和の声が聞こえた

「追い詰めたわよ！」

「空也！助けて！」

相変わらず俺を盾にする漣、それを見る和。なんだこの構図は…

「間違えました」

「ちょっと待て！和！」

ドアを閉めようとする和を止め、なんとかさわちゃんをなだめリビングに戻る

「和ちゃんも来たことだし、プレゼント交換しようよ！」

唯が言い出すと皆が頷いた

「いいけどさわちゃんが」

律がさわちゃんをみる

「私も有るわよ」

「彼氏さんにプレゼントするんじゃないんですか」

またも唯が爆弾発言する、天然って恐ろしいな…

「さあ、皆出なさい！私が歌うから歌い終わった時手元にあるも

のがプレゼントよ!」

さわちゃんがやけくそになって場を盛り上げる。内心は辛いんだろ
うな…

「さあ!いま持つてるのがプレゼントよ!」

「これあたしのだ」

律がそう告げる

「じゃあ交換しましょ」

さわちゃんと律がプレゼントを交換する

「なにかしら」

さわちゃんが包装を破り捨て箱を開ける

バシン!

びつくり箱が勢い良く開きさわちゃんの顔にぶつかる。女子たちが
俺を盾にカタカタ震える

「あはははは!これ最高!」

壊れたな…さわちゃん…

「あたしはなんだろ…」

律があけると、瓶詰め的大海苔が出てきた

「それ私ね」

和がそう告げる。なんかお歳暮みたいだな…

「私は…」

紬があけるとマラカスが入っていた

「それ私だ」

澪が告げる、紬と澪は笑い合っていた

「私のは…」

和があけると大きなぬいぐるみだった

「それ私よ」

紬が告げる

「ありがとう、琴吹さん」

「私は…」

澪が開けると可愛い装飾のはいったネックレスだった

「俺のだな」

「空也…あ、ありがとう…凄く嬉しい…」

漣が満面の笑みでそう言った

「そこまで喜んでくれると光栄だな」

「クウはあけねーのかよ！」

「俺のはさわちゃんのだから形から察するにヘビメタのCDって所だろ」

「良く分かるわね。空也君」

さわちゃんが感心していた

「ただ、酷い事を言うようだが、彼氏さんが貰っても嬉しくないんじゃないか？」

さわちゃんに鋭く刺さったようでソファに項垂れた

「後は唯と憂ちゃんだな」

「うん！憂、一緒に開けよ」

唯と憂ちゃんが同時に開けると唯が手袋、憂ちゃんがマフラーだった

「憂がマフラーが無いって言ってたから」

「お姉ちゃんが手袋が無いって言ってたから」

同時にそう言っていた。お互いがお互いの欲しいものを買っていたのだった。仲の良い、いい姉妹だ

「よっしゃあ！じゃあ皆一発芸でも披露するか！」

なんちゅう無茶ブリだそれは…良い雰囲気だったんだがな

「誰からやる？」

律はそんなこと気にせず回りを見渡す

「私やります！」

憂ちゃんが手を上げ志願し、腹話術を披露し、各々一発芸を披露する

「後はクウだけだぞ！」

「良く見てろよ」

腕を伸ばしテーブルの真ん中で手を開くと一本の花が出た

「すげー！」

律に花をプレゼントし、両手からトランプを出す

「以上だ」

軽いマジックだけだったが充分だった

「さて、そろそろお開きにするか」

某双六ゲームを皆で楽しんで、時計を見るともう遅い時間だった

「そうね、ムギちゃんは私が送っていくわ」

さわちゃんは車で来たらしく、一番遠い紬を送っていった

「じゃあ俺たちも行くか…じゃあな二人とも」

唯たちに挨拶し、ここからなら比較的に近い律から送り、最終的にいつもの帰り道を漑と歩く

「ありがとな、これ」

漑がネックレスを取り出し俺に見せる

「ああ」

漑がネックレスを自分の首につける

「どうだ？似合ってるか？」

「良く似合ってるよ」

俺は街灯に照らされた漑を見ながら笑っていた

それからの正月まではほとんど寝て過ごしていた

「めんどくせえ」

正月になり、天城グループの新年挨拶をする

「はっはっは。空也君はこういうの苦手だからね」

「それもこれも親父のせいだ」

親父から正月も帰れないとの報せに、新年挨拶が誰がやるかという話になり俺になった。そして今俺は、英雄さんの運転で家の近くにある神社に向かっている。軽音部の皆で初詣に行くからだ

「近くで下ろしてもらえばいいからな」

「わかってるよ」

英雄さんに神社の近くで下ろしてもらい待ち合わせ場所に向かう

「あークーくん遅いよ!」

唯が俺に向かって手を振る

「悪かったな」

「空也君、袴姿よく似合ってます」

紬が俺を褒める

「用事の後だからな。着替える暇が無かった。で?なんで澪は隠れてるんだ?」

澪は待ち合わせ場所の看板の裏に隠れていた

「澪も晴れ着で来てんだよ。ほら！」

律に後ろから押され反動で俺に軽くぶつかる

「あ……」

必然的に俺と澪の目が合う

「澪……よ……良く似合ってるな……」

慌てて離れて俺はそう言う

「あ、ありがと……空也も……」

そんなやり取りを律はニヤニヤしながら見ていた

「とにかくだ、さっさと御参りするぞ」

これ以上居るとめんどくさい事になりそうだったので、参拝客の列に並ぶ

「待てよークウ」

律を先頭に俺に追いつく、そして順番が来た

「皆、何お願いした？」

「家内安全」

「美味しいものいっぱい食べれますように」

「体重が下がりますように」

「商売繁盛」

律の質問に紬、唯、漣、俺の順番で答える

「皆、軽音部のことお願いしようぜ」

というわけで仕切りなおし

「曲を作るペースが早くなりますように」

「ベースをもっと弾けますように」

「皆で楽しく過ごせますように」

「ムギちゃんの持ってくるお菓子をいっぱい…」

ガン！

唯が律に拳骨を食らった

「ギターが早く上手くなりますように」

唯は泣きながら言い換えた

「よし」

俺たちは順番を次に譲り、皆でお茶をして解散になった

第十話（後書き）

アニメ第七話です

クリスマスパーティー。引っ張りすぎました

第十一話

冬休みも終わり、時期は一月も終盤に差し掛かった

「うーん…」

最近妙に視線を感じる。桜高祭のライブ以降から周りの生徒からの視線は感じられてはいたが、今感じている視線は全く別物だと思われる。なんとなく視線のレベルが違う、もうね凝視されてる感じがする

「めんどくさい事になったな…」

「どしたの？クークン？」

一緒に部室に向かっていた唯が俺を覗き込んでいた

「いや、なんでもねえよ。たぶん気のせいだろ…」

どう考えても気のせいでは無いだろうがな、現に今だって感じてる…

「早く行こうよクークン！ムギちゃんのお菓子が待ってるよ！」

気楽でいいな。お前は…

「はいはい…」

気にしても仕方が無いと判断し、部室に入る

「あ、やつときたな。空也、ちょっといいか？」

澪が小声で俺に聞く、真面目な顔をしているので素直に頷く

「少し、席をはずそう、唯、俺の分のお菓子は食べても構わないが
澪の分は残しといてやれよな」

唯の返事を聞かずして俺たちは部室の外に出た

「で？ いったいどうしたんだ？」

「うん…笑わずに聞いてくれよな…」

澪はそう前置きして話し始めた

「最近、誰かに見られているような気がするんだ」

俺の中で疑問が確信になった。誰かが俺たちの後を着けてきている。
所謂ストーカーだな

「いつからだ？」

「初詣に行ったときから…最初はあまり気にしなかったんだけど最近
はより酷くなって…この事律たちにも言っただけど、ちゃんと
聞いてもらえなくて…」

俺が視線を感じはじめた時とほぼ同時期だな…ということは同一犯
の可能性が高い…この学校の生徒の犯行で二人に共通するもの…フ
ァンクラブか…いきすぎた生徒の犯行ってとこだろう…っーかちゃ
んと聞いてやれよ。部長だろ、律…

「奇遇だな、俺もその時期から視線を感じるようになったよ。ま、ここで悩んでても仕方ない、生徒会にでも相談に行くか……」

俺は生徒会室に向かって歩き出した

「和居るか？」

生徒会室のドアを開けて和を探す

「あら、空也、それに秋山さんもどうかしたの？」

書類の整理をしていた和がこっちを見る

「そこそこ困った事になってな……」

和に経緯を説明した

「二人とも誰かに見られてる……しかも同時期に、ストーカーの類いかしら……」

「だろうな……なんとかならねえか？このままじゃ俺はよくても漚がな……」

「そうね……」

俺と和が二人で打開案を模索していると不意に生徒会室の扉が開いた

「真鍋さん、引継ぎの資料持ってきたわ」

「ありがとうございます。曾我部先輩」

曾我部先輩と呼ばれた女生徒は和に資料を渡した

「誰なんだ？和？」

「紹介するわね、生徒会長の曾我部先輩」

「元だけだね。よろしくね、天城君と秋山さん」

俺の問いかけに和と曾我部先輩が答える…なんで俺たちの名前を知っているんだ？

「やっぱり知らないかあ、軽音部の人は…」

軽音部だって事も知っている。ま、桜高祭のライブの時に紹介したから知っていてもおかしくは無いが…

「二人とも、どうぞ。お茶会のお茶より高級なものじゃないけど」

俺たちに緑茶を渡してくる、何故軽音部がお茶会を開いている事を知っているんだ？思い切って揺さぶりをかけるか…

「何個か曾我部先輩に質問が有るんだが？」

「何かしら？天城君？」

曾我部先輩は俺に顔を向けた

「何故、俺たちが軽音部だって事を知っていた？」

「桜高祭でライブをやったでしょ？そこで知ったの」

だろうな。これは軽いジャブだ、もう一発ジャブを…

「俺たちの名前もそこで知った？」

「ええ…」

よし、ここでストレートだ

「何故俺たちが音楽室でお茶会をしているのを知っている？」

「そ、それは…前に真鍋さんが話してくれて…」

「私、そんなこと言っていないですけど？」

和が追い討ちをかける

「そ、そうだったかしら？ごめんなさい。用事があるから、失礼するわね…」

曾我部先輩が踵を返すと一枚のカードが落ちた。それは漣のファンクラブの会員証だった

「そ、それはさっき廊下で拾ったの…」

カードを見ると曾我部先輩の名前がしっかり書いていた

「貴方がストーカーの犯人だな」

「ごめんなさい！悪気は無かったの！でも私あと一ヶ月ちょっとで卒業でしょ？だから寂しくなって…」

ついに曾我部先輩が自供した

「じゃあもしかして空也にも…」

「そうよ…私がやったの…」

漣が聞くと曾我部先輩が頷いた、やっぱり同一犯だったか…

「会員番号一番…」

「私が漣ちゃんのファンクラブの会長なの…もちろん空也君もね」

曾我部先輩がもう一枚カードを取り出すと俺がプリントされたカードだった

「マジかよ…」

曾我部先輩が俺と漣のファンクラブの会長…だったのか…

「桜高祭のライブの時二人ともすごく輝いてた。最後に空也君が漣ちゃんをかばって抱き合った所も…」

曾我部先輩が説明してくれるのはありがたいが、それは言わなくてもいいんじゃないか？聞いてて凄く恥ずかしい…

「最初、空也君が曲が始まるまで喋ってたでしょ？あれは漣ちゃん

のためだつてすぐに分かった、だつて澪ちゃん凄く緊張してたから…そんな仲間思いの空也君や、皆の励ましがあつて歌う事ができた澪ちゃんがとても眩しく見えたの」

なんだかんだ言つてよく見てるな、この人…

「私もそんな風になりたかった、でもなれなかった。だからファンクラブを作つて応援しようつて決めたの」

「もういいよ。先輩…」

俺が曾我部先輩の肩に手を掛ける

「俺たちは先輩を責めるつもりは無いから…」

「空也君…こんな私を許してくれるの…?」

俺は頷き笑つた

「ありがとう…空也君…!」

曾我部先輩は俺に抱きつき泣いてしまった、年上だけど、やっぱり女の子だな…。少し恥ずかしいが今回は仕方ない…

「ごめんなさい…みつともないところを見せてしまつて…」

しばらくすると曾我部先輩が泣き止み俺から離れた

「どういたしまして…」

「やっぱり軽音部の皆や和が信頼する意味が良く分かるわ。やさしく包んでくれる…生徒会に引き抜きたいくらいね」

そんな事を言わないでくれ、恥ずかしい…

「遠慮します」

「そう思うたわ…本当にごめんなさい、漣ちゃんも空也君も」

曾我部先輩がもう一度深く頭を下げた

「もういいですよ、曾我部先輩。私も話が聞けて嬉しかったですし、空也の言うとおり責めるつもりは無いです」

漣がそういつて俺たちは生徒会室を出た

「なあ、空也。私たちが曾我部先輩になにか出来ないだろうか？」

部室に戻る最中に漣が聞いてきた

「そうだな、なにかしてあげたいな。あんなに俺たちの事を想ってくれてたんだ。そう思っても当然だな」

俺たちが出来るのは、音楽しかないだろうと漣と頷きあった…部室に帰ったら皆に提案してみよう…曾我部先輩のためだけにライブをする事を…

俺たちが部室に戻ると、まだ皆は残っていた。ちょうどいい、今のうちに話しておこう

「長かったなー二人とも！何してたんだ？」

律が俺たちの姿を確認し声を上げる

「三人ともよく聞いてくれ。卒業式の日にある人のためだけにライブを開きたい。嫌なら嫌と言ってくれて構わない。俺たちはたとえ二人だけでもその人のためだけにライブをする」

俺の横に居た漑が頷いた

「私たち二人だけでもあの人のために、感謝の気持ちを込めて演奏したい」

俺たちの真剣な目に反応したのは律だった

「あたしはいいよ。あたしたちは軽音部じゃん。水臭い事いうなよな！」

「そうよ！空也君！」

「やろうよ、クーくん！漑ちゃん！」

律を皮切りに皆が頷いた。普段はやる気が感じられないがいい仲間だと本当に思った

「皆…ありがとな…」

漑が皆にお礼を言う。それを見た三人は笑顔だった

「で、なにやるんだ？」

律が譜面を出す

「今回は、ボーカルが俺と漫、曲は『ふわふわ』と新曲『キミノトモダチ』でやらせてくれ」

ライブの曲目を俺主体の元決めて、その二曲を練習することになった

「和に卒業式が終わった後で講堂が借りれるか聞いてくる。皆は練習してくれ」

俺は再び生徒会室に向かった

「和、何回も来て悪いな」

曾我部先輩は帰ったようで好都合だった

「空也、今度はどうしたの？」

「卒業式が終わった後、講堂を貸してもらいたい」

単刀直入に用件を言い説明する

「そういうことなら構わないわ。私も何か手伝えるかしら？」

承諾を貰い、和が聞いてくる

「じゃあ。当日に曾我部先輩を講堂に連れてきてくれるか？」

「分かったわ」

和は頷いた

「悪いな、世話かけて」

「大丈夫よ。私も曾我部先輩にはお世話になったから。ライブ楽しみにしてるわ」

「ああ」

和に右手を上げて応え生徒会室を後にする

「本当にあの行動力は生徒会に欲しいわね」

和がそんな事を呟いていたなんて知る由も無かった

「生徒会の許可を取ってきた。これで心置きなく練習が出来るぞ」

俺の言葉に皆は笑顔を見せ、練習に気合が入った

そして月日が過ぎ、卒業式の日…

「どうしたの？真鍋さん？講堂なんかに来てきたりして？」

和が曾我部先輩の手を引いて講堂に連れてくる

「私たちから先輩へのプレゼントです」

和の声を聞き、俺は幕を上げるスイッチを押して定位置に立つ

「曾我部先輩、ご卒業、おめでとつございます」

「これは俺たちからの感謝の印です。聴いてください。『ふわふわ時間』そして新曲『キミノトモダチ』」

漣の言葉に俺が続ける

「ワン・ツー・スリー・フォー」

律がリズムを取り、初ライブの時のように漣が『ふわふわ時間』を歌い上げ、続けて俺が『キミノトモダチ』を歌い上げる。この曲はこのシチュエーションにピッタリの曲で歌っていると曾我部先輩から涙が落ちていた

「曾我部先輩…」

和が背中をさすり曾我部先輩をなぐさめていた

「ありがとう…ありがとう空也君、漣ちゃん、軽音部の皆さん…」

曾我部先輩の涙は止まらずしばらく泣き続けた。それを見て俺と漣は微笑んでいた

「曾我部先輩…泣かないで下さい」

俺が舞台を下りて曾我部先輩に歩き寄る

「空也君…」

「これは俺たちの感謝の気持ちですから…」

俺は笑ってそう告げる

「空也君…！」

またも俺に抱きつき、曾我部先輩が泣きじゃくる

「やるね〜クウ」

「空也君…曾我部先輩…」

「おお〜！」

律はニヤニヤしながら、紬は顔を少し赤らめ、唯が目をキラキラさせてそれぞれ呟く

「いいなあ…」

なぜか漑は羨ましそうに見てくる

「最後に、空也君と漑ちゃんにお願いがあります」

泣き止んだ曾我部先輩が俺から離れ、改めて向き直る

「サイン下さいー！」

何を言い出すかと思えば…ってサインかよ…

「それならお安い御用だ」

俺は普段仕事で使っているサインを色紙に書いた

「わ、私ですか!？」

「当然よ」

漣はギクシャクした手つきでサインを書いた

「今日は本当にありがとう。今日の事は一生忘れないわ」

曽我部先輩は最後に笑顔を見せて去っていった

「やってよかったな…」

「そうだな…」

俺の呟きに、漣が答える。俺たちは笑顔で見送った

ちなみに和が曽我部先輩の跡を継いでファンクラブの会長になったことを知るのは三年になってからの話である

第十一話（後書き）

この話は空也たちが二年の時の話らしいですけど。梓が全く絡まないの一年の時にしました。和が生徒会長になるのは三年からなのでこの小説の中では曾我部先輩との引継ぎの場面はカットします

次の話は少し時間を戻し、バレンタインの話を書きたいと思っています

第十二話

曾我部先輩卒業ライブの練習が真っ只中の二月初め

「バレンタインか…」

練習帰りの漣がそう呟いた

「もうそんな季節か…すっかり忘れてたな…」

普段の軽音部とは思えない練習の日々…ではないが、少なくともこれまでよりか練習する頻度は多くなって忘れていた

「く…空也は…誰かから貰うのか？」

漣が言いづらそうに聞いてきた。

「そんな約束をした覚えは無いな」

「そ、そうか」

漣は少しホツとしたような表情だった

「どうしたんだ？」

「い、いや…なんでもない…」

手と首をブンブン振って否定する

「そうか…いないのか…」

何かブツブツ言っているがこの際気にしないでおこつ…

漣と別れ、自宅に入る

「おかえりなさいませ、空也様」

和田が出迎えにくる

「お前、普通に居るようになったな」

クリスマスからここまで和田は普通に家に居た。なんでも親父からの命らしい。まあ楽だからいいんだけど…

「空也様にお荷物が届いております」

和田は何個も小さい箱を持ってきた。あて先を見ると色んな会社の社長令嬢のものばかりだった

「世間はバレンタインですからね。これを機に天城グループとの関わりをといる者ばかりでしょうね」

和田が冷静に分析する

「中身はほとんどチョコか…俺を高血圧&糖尿にさせる気なのか？」

「こんなのもありますよ」

和田が一つの箱を開けるとスカイリーの形をチョコにしたでかい

やつがあつた

「どうやって食うんだよ……」

「気合入ってますね」

そういうことじゃねえよ……

「まあいい。これ全部執事たちで食ってくれ」

「私たちが……ですか？」

和田は見るからに嫌そうな顔をした

「お前は太った俺を見たいのか？」

「それはそれで面白そうですね……」

おい……

「冗談です。畏まりました。中には独り身の執事も居ますしね、これでぬか喜びさせてやりましょう」

和田は悪そうな笑いを浮かべる……最悪だなコイツ……

「とりあえず俺は着替えてくるな」

「畏まりました。私はこれを片付けてお食事の準備を致します」

「頼むな」

俺は自室に上がり私服に着替え、リビングに下りると食事の用意が済んでいた

「良いタイミングですね空也様」

「お前も一緒に食べよ」

食卓を見ると俺一人分だったので和田にそう提案する

「宜しいのですか？」

「一人で食うより二人で食ったほうがいいだろ」

「では、お言葉に甘えて…」

和田は自分の分の食事を用意し二人で夕食を食べる

「空也様、さっきの件ですけど。あの中からお決めになる気は無いのですか？」

「ん？何の話だ？」

「結婚相手でございます」

何をいきなり爆弾発言してるんだ？

「まだ高校生だろうが」

「高校、大学なんてすぐ終わりますよ。空吾様もあまりお気になさ

れてませんけれど、私共、執事にとっては気になるところでございますから」

だろうな。執事は俺達に仕えてるんだ。執事なりに考えてくれてるのだろう

「ま、あんまり気にすんなよ。楽に行こうぜ」

俺は食事を食べ終わり、ギターのメンテナンスをするため自室に戻った

「こんなもんか…」

メンテナンスが終わりヘッドフォンアンプに繋ぎギターを弾き、風呂に入って就寝した

そして数日が過ぎ、本日二月十四日…

「空也！今日は何の日か知ってるか？」

いつもは自転車通学の大地が俺と一緒に登校する

「Ｊ　Ｕ　の誕生日」

「そうなのか？」

「ああ」

会話が終わり無言で登校する

「そういうことじゃない！今日はな！バレンタインだ！」

なんでコイツはこんなにテンションが高いんだ？

「はいはい…」

適当に相槌をうつて歩く

「なんだ？空也、自分が貰えないからって拗ねてんのかよ。俺は既に一個貰ったのだ！」

意気揚々と箱を俺に見せ付ける、これって俺の家に届いてたやつじゃねえか…一度中身を見たが…たしか『空也様大好き』って書かれてなかったか？

「なんと朝ポストを見たら俺宛に入っていたのだ！」

和田の仕業だな、面白い事するな。アイツも…

「お前、中身確認したのか？」

笑いそうになるのをこらえて、大地に聞く

「いや、ただだけど？なんだ？羨ましいのか？」

ここは乗っていった方が面白そうだな…

「ああ、羨ましいね。俺にも中身を見せてくれよ」

「仕方ない、空也の頼みだ。いくぞ！せーの！」

勢い良く大地が箱を開くと案の定『空也様大好き』の文字があった

「残念だったな…」

笑いながら大地の背中を叩く、大地は静かに泣いてチヨコを齧っていた

学校に着くと元気を取り戻した大地が元気良く下駄箱の扉を開いたが一個も入っていなかった

「ちくしょー！空也はどうなんだよ！」

大地が勝手に俺の下駄箱の扉を開けると落ちるほどにチヨコが入っていた

「なんだよー！ちくしょー！」

大地は泣きながら走っていった

「こんなになるまで入れんなよな…」

俺は冷静に入っていたチヨコを鞆の中に入れ、教室に入った

「おはよう、空也。不動君が教室に来てからずっと泣いてるけど、どうかしたの？」

自分の席に着くと和が話しかけてきた

「世の中の理不尽さに泣いているんだよ」

「ふうん…そうだ空也、はいチョコ。いつもお世話になってるから」

和がナチュラルに渡してきた

「サンキュ、和」

「クーくん、私も作ってきたよー！憂の分も預かってきた！」

唯が二つ俺に渡してくる。姉妹で一個で良いだろと思ったが素直に受け取る

「やっぱり天城君はモテてるね」

俺の席の隣の女子が話しかけてきた

「朝から騒々しいだけだよ」

「謙遜しないの。はいチョコ、私も作ってきたんだ」

またチョコを受け取る。もう数えんのもめんどくさくなってきた

「やれやれ…」

とりあえず落ち着こうと鞆から教材を出して机に入れようとするが何かに当たり教材が入らなかった

「中にもかよ…」

中には数個のチョコが入っていた

「すごいわね、空也。もう何個目なの？」

「もう数えんのもめんどくさい…」

「さすがクーくんだよ！」

何がさすがなのかは良く分からないが、あまり突っ込まないでおう

「桜高祭のライブが効いてるわね…」

「だろうな…」

それから休み時間の度に別のクラスの娘からチョコを貰い続けた結果…

「これ…何年分のチョコなの？」

鞆に入りきらなくなり、机の上に溢れていたチョコを見ながら和が呟いた

「きつと俺を高血圧と糖尿で殺す気だな」

全部が全部本命では確実に無いだろうから、おもしろ半分のやつが大半だろう…

「大地ー！紙袋貸せ！持ってきてんだろ？」

「チクシヨー！空也のバカーー！」

俺に紙袋を投げつけ泣きながら出て行ってしまった…

紙袋に机の上にあるチョコを入れて部活に向かう

「あ！クウ！これみるよ！ってクウもすげー！」

音楽室のドアを開けると遷の指定席の前に大量にチョコが積まれていた

「あ…空也…どうしようこれ…」

遷が俺に助けを求めてくるが、俺も同じ状況だったので助けようが無い

「今日のお菓子はチョコケーキよ」

紬がティーセットを持ってやってくる。またチョコだ…

「唯！俺の分も食べえ！」

「あいあいさー！」

唯の皿の上に二つチョコケーキを乗せる

「律…私の分も食べていいぞ…」

「マジ！？ラッキー！」

唯と律が嬉しそうにチョコケーキを食べる

「ごめんなさい…そんなに貰ってるとは思ってなかったから…」

紬が謝る

「謝んなよ。俺たちだって予想外だったんだ。気持ちだけ受け取っとくよ…」

少しでも消費しようとチョコを齧る。うん甘い…

「紬、すまないがブラックを頼む」

「はい、どうぞ」

紬からブラックを貰い甘いのと苦いのを往復させる

「空也あ…お願い私のも消費してえ…」

澪が半泣きで自分のもらったチョコを指差す

「そればかりは勘弁してくれ…」

「だよね…」

「「はあ…」」

俺と澪のため息が揃う

「さすがに我が軽音部の二枚看板は違いますな」

「だよね…さすがクーくんと澪ちゃんだよ!」

「「嬉しくないよ……」」

律と唯の言葉をまたしても揃って言う

「漑……練習するか……」

「そうだな……」

俺と漑は開き直って練習を始め、チヨコに手を付けなかった

「またかよ……」

部活帰りに下駄箱の扉を開けるとまたチヨコが入っていた

「「はあ……」」

漑の方にも入っていたらしくまたため息が揃っていた。その日の帰り道……

「く、空也……」

いつもの帰り道を二人で歩いていると漑が口を開いた

「もう、いっぱい貰って嬉しくないかもしれないが……貰ってくれるか？」

漑が鞆の中からチヨコを取り出して俺に差し出していた

「もう……いらないか……」

チョコを差し出していた手が下がったが俺はその手を掴んでチョコを受け取った

「あ…」

俺は中に入っていたチョコケーキを食べる

「美味しいよ、ありがとな。漣…」

俺は笑って漣の頭をポンッと叩く

「こっちこそ。受け取ってくれてありがとう…」

漣の顔は笑顔だった。俺は慌てて前を向く

「まあ…なんだ…ホワイトデー、楽しみにしてる…」

俺の顔はいま絶対に赤くなってるだろう

「クスッ！ああ！楽しみにしてる！」

俺たちは再び並んで歩き出し、俺たちは自分の家に帰った

「貰いすぎです。空也様」

鞆と紙袋の中身を確認して和田が突っ込む

「しかたねえだろ…いらないと追い返すわけにもいかねえし…」

「ですが…どうするんです？こんな量…」

「とりあえず冷やしてくれ。これで当分チョコには困らん」

「困ったものですね。空也様にも」

和田は困った表情をしていたがどこか嬉しそうに笑っていた

《澪 Side》

私はお風呂に入りながら空也のことを考えていた…

もう受け取ってもらえないと思っていた。

音楽室で空也を見たときから…空也は鞆と紙袋にいっぱいチョコを貰っていたから…

私ですらこんなに貰ったんだ、空也がそれ以上貰っているのは想像するのは簡単だった。

でもせっかく空也のために作ったんだ。自分で食べるんじゃなく、空也に食べてもらいたかった…だから勇気を出して空也に差し出した…少し待ったが空也から手は伸びなかった

やっぱり受け取ってもらえなかった…そう思った矢先に空也がチョコを受け取ってくれた。その場で食べてくれた。「美味しい」って言うてくれた、それがとても嬉しかった…

やっぱり私は…空也が…空也の事が好きだ…

中学の時からずっと私を支えてくれた空也、ギターが壊れて塞ぎこんでしまった空也、すこし照れくさそうに私の隣に居る空也、笑って私の頭を撫でてくれる空也、そのどれもが空也だ…私は空也の全

てが好きなんだ…改めて確認できただけでも。充分だったと思う…

空也は私の事をどう思っているんだろう？

誰にでも優しく、仲間思いで、皆を平等に接する空也…それをしない空也は空也じゃないと言える位だ空也が私だけを見てくれるとは思わない、律やムギ、唯が困っていたら躊躇することなく手を差し伸べるのが空也だ…

どんなに考えても答えが出なかった

第十二話（後書き）

バレンタインで澄の空也への気持ちを表してみました

次にホワイトデーの話をして二年生に入ります

第十三話

曾我部先輩へのライブが終わり、日付は三月十四日：世間はホワイデー

「おはよう、空也」

「よう、和。これバレンタインのお返しだ」

俺は和に小さい箱を手渡した

「なんだろ、開けて良いの？」

俺が頷くのを確認すると、和は箱を開けた

「あら、万年筆ね」

「あまり使わねえ物より実用的な物を渡したほうがいいだろ？」

「そうね。じゃあありがたく使わせてもらっわ」

和はうれしそうに自分の席に帰っていった

「ほら、お前にも」

俺は自分の席の隣の女子にも小さい箱を机の上に置いた

「天城君、私なんかにもいいの？」

「かまわねえよ。机の中や、下駄箱に入ってたやつは調べようがねえから手渡しにくれたうちのクラスの女子や知り合いにはちゃんとお返しをしねえとな。これが天城家のやり方だ」

女子は笑顔で素直に受け取った

「唯には憂ちゃんとお揃いのペンダントだ」

星の形をしたアクセサリーが付いたペンダントを渡す

「ありがとークーくん！憂も喜ぶよー！」

それからしばらくホワイトデーのお返しを配り、放課後…

「疲れた……」

俺は長椅子に横になっていた

「クウもママだなーあたしなんてバレンタインのチョコも作ってねえのに」

「そうだな……だからお前にはやらん…紬！」

体を起こし、紬にまたも小さい箱を軽く投げて渡す。中にはプレスレットが入っていた

「ありがとございます 空也君！」

紬はうれしそうに笑った。紬は同年代の誰かからプレゼントを貰うのが少ないみたいで、こういうことには人一倍喜んでくれるな

「りっちゃんりっちゃん！私も貰ったんだよ！」

唯が自慢げにペンダントを律に見せ付ける

「うるせー！そんなの見ても羨ましくねー！」

唯と律の漫才を見てると、漑がチラチラとこっちを見てきた

「ま、当然の反応だよな……」

俺は小さく呟くとアコギを手にとってBGM変わりに練習した

《漑 Side》

唯もムギも羨ましいな……『ホワイトデー、楽しみにしとけ』空也のこの言葉が蘇る。空也は嘘をつかないって信じたい、そう思って空也を盗み見る、空也はいつもと変わらない笑顔を見せている

「はぁ……」

ため息をついても仕方ないがやっぱり寂しいな……すると突然アコギの音が小さく鳴った、振り向くと空也がアコギを弾いていた。律たちの邪魔をしないようにボリュームを抑えて。なんとなく背中からでも空也の気持ちかわかるような気がする。私は紅茶を持って空也の隣に座る

「……………」

空也は何も言わなかったが、少し私を見て笑った

「俺はお前に対して絶対に嘘はいわねえよ…絶対にな…」

しばらく弾いていると空也が私にしか聞こえない声でそう言ってくれた。まるで私の考えていた事を分かっていたかのように…

「うん…」

私は頷いた

そんなやり取りを見ていた他三人…

「ねえりっちゃん…澪ちゃんってやっぱりクーくんの事…」

唯が小さい声で律に話しかける

「今はそつとしといてやろっぜ…」

「でもお似合いね…」

「そうだな…」

律が落ち着いた様子でそう呟いていた

《空也 Side》

ほぼいつもどおりの感じになった練習をあまりしない部活がお開きになり、澪といつもの帰り道…

「澪。手え出して」

俺は澪の手に綺麗にラッピングされた箱をポケットから取り出す

「皆の前で渡しても良かったんだが…ちょっと照れくさくてな…」

頭を掻きながら澪に差し出す

「空也も緊張したりするんだな…」

「俺は機械じゃ無いんでね…」

そんな事を言う間も俺は澪の顔を見れなかった

「開けても良いか？」

俺から受け取った澪がそう聞いてくるので、頷いた

「イヤリング…」

小さい箱を開けるとシルバーのイヤリングが入っていた

「ネックレスはクリスマスに渡したから、ペンダントはジャンルが被るしな。澪に似合うと思う」

これは俺の勝手な意見だけだな…

「あ…ありがとう…」

漣は少し照れながらも俺にそう言った

「ああ」

照れ隠しに漣の頭をポンと叩き、俺は歩き出した

《漣 Side》

意外だった、空也が緊張するなんて…桜高祭のライブも、曽我部先輩の時もあんなに堂々としてたのに、空也はなんでも出来るってイメージだった。でも落胆したとかそういう感情は一切無い、むしろ私に弱い部分をみせてくれる事が嬉しかった

「なあ、空也」

イヤリングをポケットにしまい、空也に話しかける

「二年生になったら同じクラスになれると良いな」

「そうだな…」

私たちは笑い合って自分の家に帰っていった

《空也 Side》

翌日…憂ちゃんの桜高受験の合格発表…

「この場面に俺は必要か？」

私服で俺は桜高に来ていた

「そっちなよ、空也」

そっちなよ。空也は自分の鞆からカメラを取り出し前に居る唯と憂ちゃんを撮った

唯が憂ちゃんの手を握っている所から察するに合格したんだろ。というより姉で合格できたんだ、妹が落ちる事は天地がひっくり返らない限り無いだろ

そんな事を考えていると唯たちが目立ち始めていた

「落ち着け、唯。憂ちゃんおめでとう」

いまだはしゃいでいた唯を落ち着かせ、憂ちゃんに向き直る

「ありがとうございます。空也さん！あと、ペンダントありがとうございます。ありがとうございました」

やっぱり礼儀正しいなこの子...

「気にすんなよ。んなことより早く家帰って着替えて来い、合格祝いだ」

「分かりました。行こ？お姉ちゃん」

憂ちゃんは唯を連れて一旦家に帰っていった

「ん？」

誰かに見られているような気がして辺りを見ると周りの女子が俺を見ていた

「中学生にも人気だな〜クウ！………嘘だと思っなら笑ってみるよ」

律の最後の言葉を聞いて、作り笑いをしてみる

『キャーーーーー！！！！』

周りにいた女子数人…といっても結構な人数が一斉に声をあげ、あの去年ここの文化祭で見た事ある！だの、この学校に受かってよかった！だの、何で私落ちたんだろ…と本気で泣き出す奴も居た

「何だコレ…」

「これが今のクウの人気だな」

「さすがね、空也君！」

俺の言葉に律と紬が反応し、澪を見ると少し複雑な表情をしていた

「人気があるのは結構だが…ストーカー騒ぎになんのが嫌なんだよ」

『絶対しません！嫌われたくないから！』

しっかり聞いてやがる…

「やれやれ…」

俺は苦笑いをするしかなかった

「心配すんな。俺はどこにも行かねえから…」

ずっと複雑な顔をしていた漣に、漣にしか聞こえないようにそう呟く

「うん…ありがとう…」

漣も俺にしか聞こえない声でそう呟く、それを聞くと作り笑いじゃない笑顔を見せ漣の頭をポンとたたいた

『キヤーーーーー！』

「そろそろうるさいから、やめてくれ。それと男子にも掲示板を見せてやってやれ」

校門の方に目を向けるとまだ数は少ないが男子が待っていた

「悪かったな、独占して」

比較的俺の近くにいた男子に声をかける

「自分は気にしてないです。お気遣いありがとうございました！」

男子が敬語を使って、俺に頭を下げる

「受かってるといいな。お前ら」

肩をポンと叩き俺は学校を後にした

「空也、ちょっと待ってくれよ！」

漣たちが俺についてくる

「少なくとも俺が居ないほうが良いだろ」

「まあ軽いパニックだったしな」

俺と律が納得しあう

「空也君は中学生の時からこんなに人気があったの？」

「ここまでではなかったけど、人気があったのは確かだよ？なあ漣？」

「そうだな…特に女子からの人気が凄かった」

紬の疑問に律が答え、漣がその答えを肯定する

「マジか？あの頃は今と違ってギターを弾いてるところも見せてなかったし、家の事も知られてなかっただろ」

「だってクウ、イケメンじゃん？」

またそれが…

「普通だろ」

「クウの顔で普通だったら大地はどうなるんだよ!」

「あいつは人間じゃない、魚類だ。魚人だ魚人」

「不動君…ひどい言われようだ」

居ない奴の事を気にしても仕方ないぞ、零…

「けっこつ時間食っちゃったな。唯と憂ちゃんと合流しようぜ」

俺は商店街で待っていた二人と合流し、ハンバーガーを食べたり、ウインドウショッピングをした

さあもうすぐ高校二年生だ。部員集めなきゃな…

第十三話（後書き）

ホワイトデーの話と憂の高校合格の話です

すいません短い文章で…

次の話から二年生に入ります

第十四話

桜舞う四月…俺たちは二年生になった

「私二組だ!」

「あたしも二組だぜ!」

「ほんと!? 私も二組よ!」

唯、律、紬と一緒に became たらしく喜んでいた

「澪ちゃんとクーくんは?!」

「一組…」

唯の言葉に澪は唯の期待する言葉を出せなかった

「澪ちゃん…クーくんは?」

俺は男子のクラス発表の用紙を見て澪たちの所に戻ってきていた。
別にする必要はあるのか?

「唯達には悪いが、俺も一組だ」

澪の頭に手を置いて答える

「空也…本当なのか…?」

「んなことで嘘言ってどうすんだよ。だからそんな寂しそうな顔すんなよ」

俺は薄にニツと笑った

「皆さん、おはようございます!」

一年のクラス表を見てきた憂ちゃんがお辞儀する

「あ、憂ちゃん。制服似合ってたじゃん」

律が褒める

「ありがとうございます。あ、お姉ちゃん、クリーニングのタグ付きっぱなしだよ。それにここも寝癖直ってないし」

「起きる時間が遅くなっちゃって」

「もうちょつと早く起きようね」

憂ちゃんが櫛を取り出し唯の寝癖を直していた

「お前ら姉妹、姉と妹逆のほうがいいんじゃないか？」

「反面教師って言葉があるがまさかここまでとはな」

そんな二人を見て律と俺がそう言う

「二人ともひどいよ」

唯が俺たちに抗議していると予鈴が鳴った

「予鈴だな。教室に行くか…憂ちゃんもまたな」

「はい」

憂ちゃんに挨拶をして教室に向かう

「二組は二階なんだ」

「一組だけ一階なんだよ。じゃあな」

唯の呟きを正し、俺は歩く

「ちょっと待ってよ空也」

澪がそれに慌ててついてくる

「これで二人の仲が進展すると良いんだけどな」

律がそう呟き

「澪ちゃん頑張って！」

紬がそう言っていた事を俺は知る由も無い

「空也…待ってたぜ…！くはあ！」

一組の扉を開けると大地が飛びついてきたので腹にパンチをぶつけ鎮める。一年の時同じクラスだった奴は見向きもしない、他のクラスだった奴は何事かと見てくる。まあすぐに慣れるだろ

「不動君…変わらないな…」

澪も中学の時から見慣れているので別段、気にした様子も無い

「澪！それに空也も！よかった」知り合いがいて」

和が俺達に近寄る。大地、無視されたな…

「和も一緒だったか…またよろしく頼むな」

「こちらこそよろしく頼むわ、澪もよろしくね」

和が澪を見る

「良かった、知り合いがいて！よろしくな、和！」

澪が和の両手を握っていた。俺が居るって言っても、性別が違うからな。和の存在は大きいだろう

「嬉しいのはわからんでもないが、そろそろ座れ、担任が来るぞ」

大地が入り口で気絶しているのを無視して二人も自分の席に座る

「ん？不動、何で倒れてるんだ？」

「無視してもらって結構です。先生」

「そうか、では出席をとる。秋山、天城……」

また通じちゃったよ。なかなかやるなこの学校の教師も…

「不動…はそこで倒れてるつと…」

起こす事もしないんだな。哀れ、大地

そして昼休み…新入生の部活動誘いの時間…

「さすがに三年が居る部活は手際が違うな」

一年の教室がある廊下はすでに一杯だった

「漣、ビラ見せて」

律は漣からビラを貰って確認する。そこには『バンドやりませんか？軽音部』という文字とギターやドラムの絵が書かれていた

「良くも悪くも普通のビラだな」

「インパクトが足りない！もっとインパクトがあるもの！」

俺の言葉を律が否定した。そんなにインパクトをビラに求めるのは違うんじゃないか？

「お菓子とお茶、お代わりし放題とか？」

「軽音部じゃねえだろそれ」

「音楽室使いたい放題とか？」

「一年になんのメリットが有るんだよ」

紬と唯の意見をことごとく却下していく

「じゃあクウはどうしたいんだよ?!」

「俺は別にこのままで良いと思ってる。インパクトをビラに求めてもしかたねえだろ」

すると俺の肩に手が触れた、見るとさわちゃんが居た

「そうよ、ビラより見た目にインパクトを作れば良いのよ!」

結果…

「軽音部、よろしくお願いしまーす!」

「どうしてこうなったんだ？」

俺たちは着ぐるみを着て勧誘していた

「なぜ着ぐるみ？そして何故俺はパンダなんだ？」

漚は馬の、律は犬、紬は猫、唯は鶏の着ぐるみを着ていた

「逆効果だろ。まるで人寄ってこねえじゃねえか」

俺はパンダを脱ぎ捨てた

「だめだよ、クーくん。せっかくさわちゃんが用意してくれたのに」

「さわちゃん感覚がおかしいんだよ。あ、憂ちゃんだ」

俺が指差すと憂ちゃんが友達と歩いてきていた

「うーいー!」

唯が鶏のまま走り出した。さすがに憂ちゃんも唯とはわからず逃げてしまった

「何アレ……」

俺の近くでツインテールの女子が呟いていた。リボンの色を見るに一年だ

「ほれ、軽音部。興味あるなら放課後、音楽準備室に来てくれ」

ツインテールの女子にビラを渡す

「はあ……」

ツインテールが俺の顔を覗き込んでいる

「どうした？」

「いえ、なんでもないです」

ツインテールを揺らし、足早に去っていった。結局その子にしかビラを渡せず、音楽室に帰ってきた

「ただ熱いだけだったな」

「明日のライブで取り返すしかないな」

机に着ぐるみの頭を置いて話し合う

「こんなのも作ってみたんだけど…」

さわちゃんがメイド服を取り出していた。あんたのせいで逆効果だったんだが…

「さあ、午後の授業始まるぞ！」

律が無視していた。さすがにイラッときたんだな

放課後…

「結局着てんじゃねえかよ…」

俺は律に話しかける

「ムギと唯に押し切られた…クウだって…執事じゃん…」

「俺はさわちゃんに押し切られたよ…」

「「はあ…」」

二人のため息が揃う

「いいじゃん、二人とも似合ってるよ!」

「そうね!」

唯と紬はノリノリだった

「嬉しくねえよ...」

俺は定位置の長椅子に座ってギターのチューニングをしていると扉がノックされ、憂ちゃんがやってきた

「いらっしやいます」

唯がメイド服で出迎える

「お姉ちゃん!？」

「お、憂ちゃん!」

「いらっしやい!」

「律さん!? 紬さんまで!？」

憂ちゃんは全てに対応してくれた

「助けてえーーーーー!」

さわちゃんが澪とメイド服を持って一気に駆け抜けていった

「あーあ…」

踊り場から下を見ると昼休みにビラを渡したツインテールが居たがすぐに歩いていった

「空也さんも、すごい格好してますね」

「あまり言ってくれるな。とりあえず二人とも中に入れよ」

憂ちゃんともう一人の団子みたいな髪型をした女子を中に招き入れる

「ごめんね〜クリスマスからさわちゃん、皆にコスプレさすのが好きになつたみたい」

憂ちゃんと団子へアーを椅子に座らせ、唯が談笑する

「これ持つてつていいのか？」

「空也君、お願い」

「はいよ」

紅茶がカップに注がれ俺は御盆において憂ちゃんたちのところに持つていく

「執事っぽくやれよな〜」

「御待たせ致しました。お嬢様…」

上品に二人の前に紅茶とケーキを置く

「これでいいか？」

律の無茶振りを難なくやりきる

「純ちゃん、紹介するね。私の姉の唯」

「平沢唯です。よろしくね！」

憂ちゃんの紹介で俺たちは自己紹介していく

「律さん」

「どうもー！部長の田井中律です！」

律の自己紹介をしているとふいに扉が開いた

「ちょっと！律！また講堂の使用許可書出してなかったでしょ！明日ライブできなくなるよ！」

和の言葉に俺が反応した

「りっつさん…俺、散々言っただよな」

俺と和の二人で律を睨む

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

律は泣きながら俺達に謝っていた

「「……………」」

一年二人は呆然としていた

「次が琴吹紬さん」

「はじめましてーごめんねー騒がしくて…」

紬の自己紹介の間も和の怒りが収まってなかった

「だいたい、空也もだけどその服は何なのよ！」

「あたし達に言うな！」

怒りの矛先が俺に変わる前に抜け出すと漑が帰ってきていた

「次がいま覗き込んでる、秋山漑さん、とても恥ずかしがり屋さんなの」

「どうした？覗き込んでないで入れよ？」

「ヤダ、笑うもん…」

漑が顔を赤らめていた

「笑いませんよ、似合ってますし」

憂ちゃんがそう言う。漑は少し顔を赤らめながらも入ってきた

「「かわいい！」」

憂ちゃんと団子へアーは口を揃えて感想を述べた

「うーん…」

いつの間に入ってきたのかさわちゃんが一年二人をじっくり見ていた

「この人は？」

「山中さわ子先生、軽音部の顧問なんだ…」

「貴方たち…着てみない？」

どこからかメイド服を取り出し提案していた

「「結構です………」」

「さわちゃん、ちょっと黙っててくれ」

さわちゃんを黙らせると俺は団子へアーに顔をむけた

「最後に天城空也だ。一応副部長をやってる、よろしくな。せつかくきたんだ、演奏を聴いてってくれ」

俺は皆に目配せして楽器を持たせる

「澪ちゃん、ストラップが引っかかる」

「そうだな…」

「裾が邪魔だな…」

各々メイド服に苦戦していた

「やれやれ…着替えて来いよ。待っててやるから」

各自ブツブツ不満を漏らしながら出て行った

「先輩も大変ですね」

団子へアーが口を開いた

「まあな。すまないが、名前を聞かせてもらえるか？」

「すみません、鈴木純っていいいます」

団子へアーは頭を下げて謝った

「謝ることはねえよ。鈴木か純、どっちで呼ばれたほうが嬉しい？」

「あ、じゃあ純でお願いします」

「了解だ、純。パートは？」

「ベースです」

「ベースなら漣をよく見とけ。入部するかしないかは自由だが、ベースはこの学校で一番上手いと思うぞ」

「わかりました。でもなんで私が経験者ってわかったんですか？」

純が首を傾げる

「手をみりゃわかる。紅茶を置いた時に手にギターやベースを持ってるのできるタコがあっただんな」

「すごい…あんなちよつとで…」

「俺には十分な時間だ。さて、皆が帰ってきたみたいだな」

すると扉が開いて四人がジャージで帰ってきた

「おつまたせ〜！あれ？どうしたの？」

唯が元気良く帰ってきて純と憂ちゃんが固まっていたので首を傾げる

「どうもしねーよ。さつさとやるぞ」

それぞれが所定の位置について『ふわふわ時間』を演奏するが、ぐだぐだだった

「悪かったな、たいした演奏も出来なくて」

「いえ…」

「明日の新歓ライブで五曲演奏するから見に来てくれよな！」

律の言葉に純が苦笑いで応え憂ちゃんと共に帰っていった。憂ちゃんとはともかく純の方は望み薄だな

「さ、もう今日しかないんだ、練習するぞ」

俺の声を聞いて皆が練習を始める

《憂 Side》

「純ちゃんどうだった？」

私は隣で歩く純ちゃんに話しかける

「なんか…凄かった。憂のお姉ちゃんもそうだけど、皆の個性が強く、空也先輩がそれをうまく纏めてた」

「空也さん、凄かったね、純ちゃんの手を見ただけで経験者だって分かるし、お姉ちゃん達が帰ってくるときも一番最初に気付いてた」

「それでいてカッコいいんだもん。なんか卑怯だよ」

卑怯って…空也さんも大変だなあ…

「あたし、トイレ行ってくるから先行ってて」

これは望み薄かなあ…

翌日…

《空也 Side》

「曲目確認するぞ、『ふわふわ時間』『Funny Bunny』『私の恋はホッチキス』『ふでペン』『ボールペン』『キミノトモダチ』の順番でやる」

「ねえクーくん、ボーカルは私とクーくんだけで良いの？」

唯が俺に聞いてきた

「良いんじゃないか。今回漑にはコーラスをやってもらってから」

俺は漑を見る

「コーラスなら…なんとか…」

「ということだ」

「了解です！クーくん隊員！」

唯が敬礼する

「俺からは以上だ。じゃあ部長、号令を」

「わかった。絶対成功させるぞー！」

「……オー！」「」「」

息を合わせ意気込む。さあ二回目のライブだ…幕が上がりきるとリズムをとって、そのリズムに合わせて『ふわふわ時間』と『Funny Bunny』を連続で演奏する

『えー皆さんご入学おめでとうございます！軽音部です！』

俺が水を一口飲んでMCを開始する

『楽器が出来ないとか、歌が上手くないとかそんな小さいことは気にしないで誰でも気軽に音楽準備室の方に遊びに来てください！僕の隣に居る娘はギターを始めてまだ一年です。しかも最初は軽音部って軽い音楽ってかくので口笛とかカスタネットを叩くもんなだと思ってたそうです』

『クーくんそれ言わなくて良いじゃん！』

『まあ聞け、てかこういう場でクーくんって言っなよ』

唯に突っ込む

『クーくんはクーくんだもん』

『はいはい、話を戻しますけどギターを今から始めても最低限ここまでできます。だから楽器が出来ないって理由だけで入部を諦めずに、気軽に遊びに来てください！では次の曲行きます！聞いてください』私の恋はホッチキス』！』

正直な所、この曲が成功するか否かでこのライブが決まるだろう、それほど唯のパートが難しいが唯は難なくやってのけたが：

「歌忘れてやがる…」

それに今気付いたらしく、テンポが乱れたが、それを救ったのは漚

だった

「漣…唯、早く歌え」

漣が歌い、ピンチを救った。テンポを整えた唯が歌に参加し事なきを得た

それから『ふでペン〜ボールペン〜』と『キミノトモダチ』を連続で演奏してライブは終わった

「何してんだ？お前ら？」

機材を部室に運び終えて一息していると漣、唯、律が扉を少し開けて外を覗いていた

「何で来ないかな？ライブも良い感じだったのに…」

律がブツブツ行っている

「お茶入ったんだけど…？」

「サンキュ」

お茶を受け取り、三人の下に向かう

「いい加減にしろ、お茶でも飲んで待ってるよ」

三人を軽く叩いて指定席に戻らせる

「仕方ない、憂ちゃん。捕まえて入部させるか」

お茶を飲みながら律が呟く

「虫じゃねえんだから。憂ちゃんにも事情があるだろ」

コンコン…

そんなことを話していると不意に扉がノックされ、あの時のツインテールが入ってきた

「入部希望なんですけど…」

「今なんと？」

皆が固まっていた

「入部希望だよ。ようこそ、軽音部へ」

俺は立ち上がり、ツインテールを中に招き入れた

「新入部員確保〜！」

「キャーーーーー！」

律がツインテールに飛びつき、抱きついていった

第十四話（後書き）

アニメ第八話です

二年生に入り、梓が入部しました。

がんばります

第十五話

我が軽音部に待望の新人部員がやってきた！

「名前は！」

「あ…中野です…」

「パートは？」

「好きな食べ物？」

律の質問に答えただけで、紬、唯の質問にはしどろもどろになってきていた

「お前ら、落ち着け」

中野と部員の間割ってはい

「なんだよー！クウ！こっちは質問してんだよ！」

「その質問攻めで喋れなくなってるんだよ、落ち着けて」

俺は三人を落ち着かせる

「悪いな、いきなりこんなことになって」

「いえ…ありがとうございます…」

中野は俺に頭を下げた

「次騒いたら漣の鉄拳制裁が待ってると思え」

俺と漣がサイドに付いて中野を真ん中に立たせる

「「恐怖政治だ!」」

律と唯が抗議する

「騒ぐなと言ったはずだが?」

「「すいませんでした……」」

漣が腕まくりをしているのを見てしまった二人は黙ったのを確認すると中野を見て頷いた

「えっと……一年二組の中野梓といいます。パートはギターを少しやってます」

「ギターなら俺とそこで正座してる唯だな」

俺は唯を指差した

「よろしくお願いします。空也先輩、唯先輩!」

梓が深くお辞儀をする

「唯先輩……先輩……」

先輩という響きが良いのか唯の顔はにやけていた

「あいつはほっとけ、んじゃちょっと弾いてもらおうか」

俺は俺のギターを手渡した

「このギターって…FORESTですか？」

「詳しいな、このギターはANTELOPEって言ってな、FORESTの新型でまだ日本じゃまだ発売されてない」

「そんな高級なギター私なんか触ってしまつて良いんですか？」

「空也のギターってそんなに高いのか？」

漣が聞いてくる

「俺の前のギターを覚えているか？」

漣が頷く

「あれと同じ会社のものなんだが比較的安価のGrass Rootsで、価格は七万程だな。今のギターが会社オリジナルモデルで、尚且つオーダーメイドの配色と作りなんだ。限りなく俺にピッタリ作られたな…価格で言う…七十五万程になると思う」

「七十五万！？」

漣と梓が驚く、律と唯が固まった

「まあ…」

紬だけが普通に聞いていた

「そんなことはどうでも良いんだが…とりあえず弾いてみるよ」

半ば強制的にギターを渡す

「わ…わかりました…では…」

梓はぎこちない動きだけれど、充分上手かった。少なくとも唯よりは確実に…

「ど、どうでした？」

梓がこちらを見る

「」「」「」………「」「」「」

女子四人は固まっていた

「上手いな」

俺はそう呟き、唯のギターを手に取る

「梓、合わせろ」

俺と梓は向かい合ってギターを弾いた

ちゃんとこちらにあわせてくる…初心者でも何でもねえな…

「空也先輩凄く上手いです！今後ともご指導よろしくお願いします！後ギターもお返しします！」

梓は目をキラキラさせて俺に詰め寄ってくる

「ああ、教えがいがありそうだな」

ギターを受け取り、俺は笑った

「さて…唯先輩、どう思う？」

まだ固まっていた唯に話しかける

「ま…まだまだだね！」

見栄を張りやがった…

「じゃ、弾いてもらおうか？唯先輩？」

俺が借りていた唯のギターを唯に差し出す

「いたたた！新歓ライブの時、ぎっくり腰になってしまっ…」

苦しい言い訳だ…

「もういいよ…」

唯を適当に捨てて俺は梓に向き直る

「とりあえず、入部してくれるってことでいいな？」

「はい！新歓ライブの演奏を聴いて感動しました！これから」指導
よろしくお願いします！」

梓が深くお辞儀する

「うう…まぶしくて直視できない…」

唯…とりあえず黙っててくれるかな…

「あ、そうだ…空也先輩、入部届です」

梓がポケットから入部届けを俺に渡す

「確かに受け取ったからな。明日からよろしく頼むぞ」

「はい！」

梓はもう一度深くお辞儀して音楽室を出て行った

「私！どうすればいいのかな！」

「練習しろ…」

唯が突然慌てだして澪と律が突っ込んだ

「クーーン、ギター教えてください！」

唯が泣きついてきた

「見栄を張るからそういうことになるんだ、自業自得だな」

「今日の空也は手厳しいな…」

「今まで甘やかしすぎてただけだ」

俺は唯にギターを渡した

「少なくとも今日は練習してもらうつからな」

「は、はい！」

唯はギターを持って立ち上がり、お開きになるまで練習した

「唯、フラフラだったな」

「ああ」

いつもの帰り道を漑と二人で歩く

「漑は今の軽音部をどう思う？」

「どうって？」

「たった一人とはいえ、後輩ができたんだ。いつまでもこんなだらけきった部活をやっても駄目だと思うんだ。せめて、今のティータイムの時間と練習の時間をひっくり返すくらいはしねえって思うんだ」

「空也もちやんと軽音部のこと考えてるんだな」

「まあな…ま、少し頭の片隅にでも入れといてくれ」

二人で悩んでも仕方ないので、解散する

翌日…

「こんにちはー！」

梓が意気揚々と入ってきた

「お！元氣一杯だな！」

「はい！放課後になるのが待ち遠しかったです！」

「じゃあ早速…」

「練習ですか？！」

「お茶にしよう…」

だろうな…

梓は戸惑いながらも席に座って紅茶を貰っていた

「はい、空也君」

「ああ…」

とりあえず受け取り一口飲んでテーブルに置いてギターを手にする

「空也先輩！練習されるんですか？」

「ん？ああ、一緒にやるか？」

「はい！」

梓はウキウキしながら俺に近づいてくる

「ほら」

俺は梓にこれまでの譜面を渡す

「ありがとうございます！空也先輩！何からやりますか？」

「好きな奴選べよ……」

「はい！」

ワクワクしてるのが目に見えて分かるので紅茶を啜りながら笑っていた。その時さわちゃんがやってきた

「あら、貴方が新入部員の梓ちゃんね、顧問の山中さわ子です。よろしくね」

「よ、よろしく願います……」

さわちゃんは紬にミルクティーを頼んで、梓を凝視していた

「あの…なにか？」

「猫耳とか…似合いそうね…」

さわちゃんが良からぬことを呟いていた

「あれはほっとけ…」

「あれって何よ！空也君！」

さわちゃんを無視して俺は練習を再開し、練習に熱が入ってきた。
けっこのような音量になったとき

「うるさい！」

さわちゃんが怒鳴った

「ヒッ！」

梓が反射的に俺の後ろに隠れ、目にいっぱい涙が溜まっていた

「さわちゃん…あんた教師失格だ…人の上に立つ資格はねえ…」

俺はいつもより低い声でさわちゃんを見る

「く…空也君…」

いつもとは違う雰囲気俺に皆が息を呑んだ

「俺と梓が何か悪い事でもしたのか？ここは軽音部の部室だ、お茶

を飲む場所じゃねーんだよ。俺と梓の練習が本来軽音部のあるべき姿じゃねえのか？なあ律、目標は武道館じゃなかったのか？」

律は言い淀んだ

「毎日、お茶飲んで、雑談して、ちよつと練習して、そんなちよつとの練習で武道館にいけないと思ったのかよ、音楽はそんな甘くはねえよ！別にティータイムを否定するつもりはねえが、限度つてもんがあるだろうが！そんなだらけた部活を続けるつもりならこっちら辞めてやるよ、ジャズ研でも外バンにでも入ってやるよ」

俺はギターを持って音楽室から出て行く

「空也先輩！待ってください！」

梓が俺を追って着いてきた

「空也先輩！本当に辞める気ですか？」

校門付近で梓が話しかけてきた

「辞めねえけど？」

俺はいつもの調子で振り向いた

「え？」

振り向いてこないと思っていたのか梓が驚いていた

「お前が俺に着いてきたことが嬉しい誤算だったよ」

立ち話を長く続けると見つかる可能性があるので歩きながら話す

「あいつら、今頃緊急会議を開いてるだろうな。俺と梓が辞めるんじゃないかって、たぶん濠あたりが中心で仕切るはずだ。俺はその答えを聞くまで部には戻らん」

「練習はどうするんですか？」

「音合わせは出来なくなっただが、個人練習は続ける。ここだな」

俺が立ち止まり、目を向ける

「貸しスタジオですか？」

「ここなら、音を出しても問題ないからな。お前も付き合え」

「でも私お金ないです」

「気にするな」

俺は躊躇無く入っていった

「あ、空也先輩、待ってくださいよ」

梓も慌てて中に入る

「皆、久しぶりだな」

俺は受付の男性に話しかける

「空也様！？お久しぶりでございます！大きくなりましたね！」

「あの部屋はまだ残ってるか？」

「はい、あの頃のまま残っております」

「じゃ、使わせてもらうな。しばらくここに来る事になると思うからよろしく頼む」

ふと後ろを見ると梓が固まっていた

「どうした？さっさといくぞ？」

「あ、はい！」

ハッと梓は気付き俺に付いてくる

「あのー空也先輩って…この人達とどういう関係ですか？」

スタジオに入ってから梓が聞いてきた

「簡単言つと経営者と従業員だな。ほら、これを使えよ」

俺は質問に答えつつ梓の前にアンプを置いた

「あ、ありがとうございますって経営者！？高校生で！？」

いい反応だな…

「まあな。さあ、さっきの続きを始めようぜ。どこまでやった？」

「あ、ここです！」

梓は気にしないようにしながら譜面を見せる

「よし、じゃあ続きからだな」

それからしばらく二人で練習し梓は鞆を学校に忘れてきているので早めに解散する

「俺はしばらくここであいつらの答えを待つつもりだ。お前はどっする？ 戻るなら俺は止めはしない」

「私もここに居ます。先輩方の答えが悪いものでも、空也先輩は音楽を続けるんですよね？」

俺は頷いた

「じゃあ私には戻る理由は無いです。ご指導よろしくお願いします」

梓が深くお辞儀する

「了解だ。じゃあここに自由に入れるようにしとくな。今日は帰るな」

「はい、お疲れ様でした」

梓は出て行った

「空也様、お疲れ様です。どうぞ」

係りの者…もとい矢野が俺に飲み物を渡してくる

「サンキュ」

「いい娘ですね。音楽にもの凄く一生懸命で…」

「そうだな…あいつ、しばらくここに顔を出すから、俺が居なくてもここに通してやってくれ」

「わかりました」

矢野が頷くのをみると俺もギターと鞆を持った

「空也様、何があったかは聞きませんが、ひとつだけ言わせてください」

「ん？」

「大丈夫です。自分を信じてください」

矢野は真剣な表情で言っていた

「ありがとう」

素直にお礼を言って家に帰る

少し時を遡り…

《澪 Side》

私の中で昨日の空也の言葉が蘇る

『澪は今の軽音部をどう思う?』

この言葉の意味が今、やっと分かった。空也が居ない軽音部は去年嫌というほど知っている、あの時とは違う、落ち込んでるんじゃない…怒っているんだ…

「皆、緊急会議だ!」

私が声を上げる

「このままじゃ空也も、梓も辞めてしまう!それは軽音部にとっても良くない事だと思うんだ」

「空也はともかく、なんで梓まで辞めてしまうんだよ?」

律が首を傾げる

「梓は空也を追って行ったんだ、梓は練習がしたいんだよ。梓が練習してる時の顔を誰か見たか?」

全員が首を振る

「梓は凄い楽しそうな顔をしてたんだ。空也から譜面を貰った時も、空也から弾き方を教わってる時もだ」

「私たちもやらないと…」

私は真剣だったか…

「よっしゃ！梓の歓迎会でもするか！」

律が的外れな事を言ってしまい、それに賛同する唯とムギ

「あずにゃんには私からメールするよ」

あずにゃんって…いつの間につけたんだそんなあだ名…

「漣はクウをよろしくな！」

「何で私が！」

律の言葉に私は驚いた

「漣ちゃんなら大丈夫よ！」

ムギ………なんの確証があるんだ？

「どうなっても知らないからな」

結局押し切られて頷いてしまい…私は空也の家の前にいる

「空也、帰ってるかな…」

勇気を出して、インターホンを鳴らす

「はい」

家から出てきたのは前に見た執事さんだった

「秋山様で御座いましたか、空也様はまだお帰りになられてませんが…とりあえずどうぞ」

執事さんに中に案内してもらい、空也の部屋に入る

「コーヒーと紅茶、ハーブティーも御座いますが如何なされますか？」

「あ、お構いなく」

「そうはいきません、お客様に、特に空也様のご友人にお茶の一つも出さなければ私共が空也様に怒られますから」

「じゃあ、ハーブティーをお願いします」

私も押しに弱いな…とつくづく思った

「畏まりました」

上品にお辞儀をして部屋から出て行く

「空也の部屋か…」

空也の匂いや空也のベッド…前は空也を元氣付けたい一心だったから改めてみると…すぐここに居るのが恥ずかしい…

「御待たせ致しました。ハーブティーで御座います」

執事さんが机にハーブティーとケーキを置く

「空也様：また出しっぱなしにして…困ったものですね」

机の上に散乱していたギターの弦や作曲中であろうノートを所定の位置に片付ける

「またって良く有るんですか？」

「はい。今、空也様は音楽に夢中になられていて。学校から帰ってからもずっとギターをお触りで御座います。なんでも今は新しく入った後輩のために作曲中で御座います」

「梓のために…」

「お前は毎回いらん事を吹き込むなあ、和田…」

突然空也の声が響いた

「おや、空也様」

「おや、じゃねえんだよ。とりあえずコーヒー頼む」

「畏まりました」

執事さんはお辞儀をして出て行った

「遅くなっただが、いらっしやい」

「お、お邪魔します…」

いつもの空也の笑顔にドキッとしてしまった

「どうしたんだ？こんな時間に？」

ケースからギターを出してスタンドに立てかけ、アコギを手にする
空也…

「律が…梓の歓迎会をするから、空也も来てくれって…」

「それは別に構わない」

空也はあっさりOKした

「空也は怒ってないのか？」

「ま、澁になら言うが…怒ってる事は怒ってる、部活中も言ったが
ティータム自体を否定はしない。人間なんだから休まる時は必
要だ。でも梓が入部してからというもの、ティータムばかりで練
習しようとしなない。それを見た梓はどうすれば良いんだ？新歓ライ
ブで感動してくれて入部を決めてくれたのにあのままなら退部する
のは明白だろ。たぶんだが梓の中にはまだ葛藤が残ってるはずだ。
このまま軽音部でいいのかってな。その葛藤を取り除けるのは俺達
だ。だが俺が言ったんでは意味がないんだ。皆が気づかなければな」

空也は梓が入部してからずっと考えていたのか…空也はいつも先を
見据えてる。執事さんから聞いた梓のために曲を作ってる事も、今
日怒った事も全部先を見据えてのことだったんだ

「俺から言えるのはここまでだ。後は漣や軽音部の皆で答えを出せ、その間は俺が梓を引きとめておくから。後このことは他言無用だ」

それから私は夕食をご馳走になり家に帰った

数日後…

《空也 Side》

「歓迎会ってピクニックかよ…」

レジャーシートを広げて軽音部の女子が座る。俺は木にもたれかかり持ってきたアコギを持つ

「空也先輩、アコギも持ってたんですね」

「まーな。こっちのほうがやりやすい時もあるしな」

梓が俺に近寄ってくる。この数日でかなり懐かれましたようだ

「ほら、律達のところに行けよ。美味しいお菓子が待ってるぞ」

唯が梓の事をあずにゃんと呼んで手招きしている。あずにゃんて…まあ猫みたいな奴だけど…

「やれやれ…」

俺は座ってアコギを弾き始める

「はい、空也君」

細がいつもと変わらず紅茶を差し出してくる。俺は無言で受け取った

「どうだ調子は？」

漣が雑誌を片手に俺の隣に座る

「まあまあだ。てか歓迎会ってピクニックだったんだな……」

「たまには空也ものんびりしろよ」

「そうだな……」

俺はアコギを置いて紅茶を飲む

「良い天気だ……」

「そうだな……」

ぽかぽかとした陽気とさわやかな風に身を委ねる

「空也先輩、漣先輩。お二人は何でそんなに上手いのに外バンを組まないんですか？」

梓がフリスビーをしたらした律たちには参加せず。こっちにやってきた

「まあ、外バンも面白そうだけどな……」

「でも……」

俺の言葉を漑が補足する前に梓はこの場にはいなかった。なぜなら
さわちゃんが出来たから

「身の危険を感じたな」

「みたいだな」

また二人でのんびりしていると二人とも寝てしまっていた

「…ん？」

少し肌寒くなり目を開けると皆がこっちを見ていた

「仲が宜しいですな お二人さん」

律がニヤニヤしながらこっちを見てそう言った

「なん…だ…よ…」

その意味がいまはつきりと分かった。漑が俺の肩で寝ていて、おそ
らく俺も漑にもたれかかって寝ていたのだろう

「証拠写真もバッチリ！」

デジカメのメモリを俺に見せてくる。俺の推測どおりだった

「ん？どうしたんだ？」

俺たちが騒いでいたので漑が起きる

「何でもねえ…」

俺は律の首を掴んで後ろを向かせる

「漣にはバラすなよ…バラしたら明日は無いと思え…」

「ク、クウ…目がマジだ…」

律がコクコク頷くのを確認すると手を離した

「さて、帰るぞ」

俺はギターを片付けて歩き出した

「空也先輩、待ってくださいよ」

それに梓もついてくる

「どうしたんだ？空也？」

「漣ちゃんこれ見て」

紬がデジカメの写真を見せ、漣が顔を真っ赤にしていたことを俺は知らない

《梓 Side》

ピクニックから数日が過ぎ、私は空也先輩との練習に向かう。空也先輩はとても分かりやすく教えてくれて勉強になる、けどピクニック

クからのここ数日、違和感を感じていた。新歓ライブのときやこの前のピクニックは軽音部の先輩方とても仲が良いうちに見えた、これが本来の空也先輩なのではと思うほどに。でも音楽室には行かず、ずっとスタジオに籠っている。空也先輩は必要以上に学校で接しようとはしない…何でなんだろう…もしかして私のせい？私が居るから？ピクニックでムギ先輩が言っていた。私が入ってくるまでそんな事は無かったって…私が軽音部に入部したのは新歓ライブで感動したから。今の軽音部を見ると何で感動したのか分からなくなってきた…

そう思うと私は足が止まっていた。私は軽音部じゃなくて、外バンを組んだほうが良いのかもしれない…そう思った私は足を逆方向に向けた

《空也 Side》

スタジオに行く途中で梓を見つけた。声をかけようと思ったが、深刻な顔をしていて、スタジオとは逆方向に歩き出した

「いよいよヤバくなってきたな…この先にあるのはライブハウスか…」

外バンを組もうとしているのだろうと思い後をつける。梓はやっぱりライブハウスに入っていた

「やっぱりか…」

俺も中に入っていく。端から見たらただのストーカーだな…俺…

自己嫌悪しつつ梓を見つけると浮かない顔をしていた。今演奏しているバンドも、さっき演奏していたバンドも俺たちよりレベルは高かったが、梓の心に届かなかったようだ

「なりふり構ってられる状況じゃ無くなってきたのかもな…」

俺は梓に今日は用事が入ったから練習は無しとメールで送り、家に帰った

翌日：俺はいつものスタジオに居ると、梓がやってきた

「空也先輩…私…「分からなくなっただか？」え？」

「何で俺たちのバンドに感動したのか分からなくなっただ…違つか？」

梓は静かに頷いた

「じゃあ行こうか、俺たちの部室、音楽室に…」

俺はギターを持って立ち上がって。梓と一緒に学校に向かった

「皆、居るか？」

俺は音楽室の扉を開いて入り、後ろから梓も入る

「さ、梓：自分の思いの丈を言ってみな」

俺は梓の背中を押す

「私…分からなくなっただんです…何で新歓ライブで先輩方の演奏で

感動したのか…一緒に居れば分かるかもって思ってたけど、居れば居るほど分からなくなって…」

だろうな…俺は半分バンドから離脱してたし、律たちは練習しないからな…

「よっと」

梓をお姫様抱っこし俺の指定席の長椅子に座らせる

「分からなくなったんなら、思い出させてやるよ。演奏でな…」

俺は皆を見ると全員が頷き演奏を始めた

「梓、ピクニックの時俺達に外バンは組まないのかって聞いたときあつただろ？」

目で演奏を続けてくれと皆に合図し、途中で演奏をやめて、梓に話しかける

「外バンを組まない理由はいいつ等と一緒に居るのが楽しいからなんだ」

「そうだな、空也や律たちと一緒に演奏するのが好きなんだ…梓もそうじゃないのか？」

澪も加わり、二人で梓に手を差し出す

「一緒に演奏しよう！」「」

すると梓は俺に抱き着いて泣いてしまった

「存分に泣け。今日は特別だ、受け止めてやるよ」

頭を撫でながら俺はそう呟き、演奏が終わると、梓が俺から離れる

「泣き止んだな。もう一曲あるんだ。聴いてくれるか？」

梓が頷くと俺はアコギを持った

「梓のために作った曲だソロで悪いが聴いてくれ『永遠の明日』」

バラードの曲調で歌い上げ、終わると梓からパチパチと拍手をされた

「ずるいですよ…ギターも出来て歌も上手いなんて…」

その顔には涙は無く、笑顔だった

「ふっ切れたようだな」

「はい！ご迷惑お掛けしました」

「全くだぜ、クウも嘘臭い芝居までしたのに」

「なんだ、ばれてたのか…」

衝撃の事実だった

「あたしを誰だと思ってんだよ！」

さすが俺たちの部長だな、しっかり見てやがる

「さて、お茶にするか!」

「待て、その部分は嘘じゃねえ…」

台無しだな…

「良いだろー!クウ!ケチケチすんなよ!」

「してねえだろうが!」

そんな漫才をしていると梓が笑っていた。それを見た俺も自然に笑っていた

「そうですよ!唯先輩もこれからビシビシいきますからね!」

「クーくん…あずにゃんが怖い」

「しっかり教えてもらえよ」

「クーくんまで」

そんな唯を見て皆が笑い合った

第十五話（後書き）

アニメ第九話です

半分くらいオリジナルなのは、ご了承ください

第十六話

「うーん…」

俺は譜面を広げて唸っていた

「『Funny Bunny』『キミノトモダチ』『永遠の明日』
…」

「空也先輩、どうしたんですか？」

ブツブツ言っていると梓が近づいてきた

「梓も入ったことだしな、新しい曲を作ろうかと思ってな」

時期は七月半ば、あの一件以来、随分と梓に懷かれてしまい、俺によく話しかけてくるようになった

「漣ちゃん、複雑でちゅね」

「な！そ、そんなことないもん…」

律が漣をからかっていたが漣がいつもの調子じゃなかった。チラチラとこちらの様子を伺ってくる

「どついう曲作るんですか？」

梓は気付いてないようだった

「バラードを作る、過去俺が作った三曲の内二曲がバラードだから。俺にはバラードの方が作りやすい」

「ホツチキスも空也が作ってくれたしな。バラードの方が空也には似合ってるよ」

漣が会話に参加してきた

「アップテンポの曲は、もちろん俺も手伝うが、紬のほうが良い曲を作るから、任せて大丈夫だしな」

そう言いながら俺はギターを持つ

「さて、適当になんか弾くか…」

「曲作りは良いんですか？」

「何かしながらの方が曲は作りやすいんだ。俺にはな…」

そういつてギターを弾き始めるが何も浮かばなかった

「うーん…」

いつもの漣との帰り道でも俺は唸っていた

「何か、悪かったな。邪魔しちゃって…」

「邪魔だなんて思ってたねーよ。気にすんなよ」

俺は漣の頭をポンと叩く

「せめて歌詞が出来りゃあな…」

頭を掻きながら小さいときに作詞した事を思い出した

あれって確か…あの別荘にあつたよな…

「漣、明日暇か？」

「あ、ああ…」

いきなりの事で漣は驚いていた

「なら明日ちよつと付き合え」

「あ、ああ…」

漣は俯きがちに頷いたのを確認すると。時間と場所を決めて解散した

《漣 Side》

空也から誘われるなんて…これって…もしかして…デート？

そんな事を考えてしまった私は一気に顔が赤くなった

「漣、なにしてるの？早く着替えてらっしゃい」

ママが私に言っつてハッと気付く

「う、うん、分かった」

私は慌てて自分の部屋に入った

「私、明日何着ていけば良いんだろ？」

嬉しさの他にも不安があった、空也に嫌われない服装にしなきゃ…

私はその日の夜はほとんど眠れなかった…

翌日…

《空也 Side》

昨日、澪と約束した待ち合わせ場所に向かう

「あ、空也…」

待ち合わせ場所に行くと、いつもはパンツルックなのだが、ワンピースを着た澪がそこに居た

うん、よく似合ってる

「ど、どうだ？」

あまり自信が無いのか赤らめながら俺に聞いてくる

「よく似合ってるよ。可愛い…」

言ってから俺は自分の言った事の恥ずかしさに気付いた

「あ、ありがと…」

漑は顔を真っ赤にしていた。たぶん俺の顔も真っ赤なのだろう

「さ…さあ、行こうか…」

俺はギクシャクしながら駅に向かう

落ち着け、俺：自分から誘ったんだろうが

「どこにいくんだ？」

漑も落ち着かない様子で俺に聞いてくる

「海だ、ほれ」

漑に切符を渡して電車に乗る

「なんで海なんだ？」

「いや、地元から離れた方が動きやすいってのもあるし、それに二人で遊ぶのも初めてだしな」

後半は少し恥ずかしかったので俺は外を見ながら言った

「そ、そういえば去年ムギの別荘に行ったときは逆方向じゃなかった？」

漑が顔を赤らめながら慌てて話題を変えた

「ん？ああ、こっちに俺の別荘があるんだ。とりあえず昼食はそこで作って食べようぜ」

漣が頷き、雑談をしながら、しばらく電車で揺られていると、海が見えてきた

「いや、もう夏だな…」

「今年は合宿するのかな…」

「するだろうぜ、律あたりがウキウキしながら言うだろう」

「そうだな…」

少しすると駅が見えてきたので俺たちは電車から降りる

「懐かしいな…ここも…」

俺は駅から出て周りを見渡す

「昔はよく来てたのか？」

「ああ、たしかこっちだ」

俺を先頭に歩き出してしばらく歩くとそれなりに大きな建物があった

「うちの所有する別荘の中では最小だけだな」

「これで？」

俺は頷き中に入っていく

「ちゃんと掃除もしてあるし、食材もある。漑、何が食いたい？」

俺は別荘の玄関を開け、漑に振り向いた

「あんまり豪華じゃなくて良いよ。というより私にも手伝わせてくれ」

玄関を入り、広いリビングに出る

「そこから裏に出ると、プライベートビーチだ」

リビングの奥の壁は大きなガラス張りの壁になっていてそこから見えるのは大きなバルコニーとビーチが見えた

「さて、ちょっと早いけど、昼食を作るか…」

「そうだな…」

二人で並んでキッチンに立つ

「空也は手際がいいな」

二人で包丁を持って、食材を切っていると漑が俺の手元を見てそう
呟く

「そうでもねえよ、てか、俺の手元見ると手え切るぞ」

「いたっ！」

遅かったようだな…

「言わんこつちゃ無い…見せてみな」

漣の手をとって傷口を確認する

「ど、どうだ？空也…」

自分の血も見るのが嫌らしく、目を瞑っている

「これくらいなら大丈夫だな…」

俺は無意識に漣の指を口につけ、傷口を舐める。すこし血の味がする…

「く…くくく空也！？」

口から指を離し、漣の顔を見ると湯気が出そうになるほど顔が赤かった

「わり！つい癖で！お、俺！絆創膏取ってくる！」

俺はやった事の重大さに気付いて、謝り、慌てて絆創膏を取りに出て行く

《漣 Side》

まだドキドキしてる…空也が絆創膏を取りに行ってくれてる間ずっ

とドキドキしていた。まさか空也に指を舐められるなんて思わなかったから…最初は恥ずかしくて顔から火が出そうになるくらい顔が熱くて、でも今はこのドキドキが心地良い、嫌じゃなかった…寧ろ嬉しかった…あんなに慌てた空也を見た…私はそこまで空也の事が好きなんだな…もう抑えれそうに無い…

《空也 Side》

俺は気持ちを落ち着かせ、絆創膏を持ってリビングに戻る

「あ…」

漑と目が合う、漑の顔はまだ赤らめていて恥ずかしくて直視できなかった

「手え出せ。絆創膏貼るから」

絆創膏に視線を落とすと漑が抱きついてきた

「な！！み…漑…！」

俺の心臓の音がこれでもかって言うほど高くなり、一気に俺の顔が真っ赤になる。

「ごめん…空也…。でも、もう抑えれそうにないんだ…梓が入部してからずっと…」

漑が俺の耳元で呟いている…

「日を重ねるごとに、空也と梓の仲が良くなっているのが分かって、

空也の心が梓の所に行ってしまいそうな気がして…辛かった…」

「漣…」

「今日、誘ってくれた事本当に嬉しかった…空也に嫌われたくなかったから、いっぱいおめかしした。普段着ない服も着た！」

漣は少し俺から離れ、真剣な目で俺を見てる

「わ、私は…空也の事が好きです…世界中の誰よりも空也の事が大好きです！」

漣の言葉が俺の心に深く突き刺さる…LIKEじゃないLOVEなんだって事が漣の真剣さで伝わってくる。俺の答えは……そんな事、考えるまでも無いな…

「空也…！」

今度は俺から漣に抱きついていて

「俺も…漣が好きだよ…世界中の誰よりも…」

ギターを壊したあの時から分かった事だ…俺がギターを壊してまでも助けたかったのは漣なんだ。漣を守る、漣の全てを受けとめたい…それが俺の答えだ…

「俺はもうお前を放さない、ずっと俺の傍に居てくれ…」

俺たちはしばらく抱き合っていた

「お目当てはここだ…」

俺はスタジオのドアを開ける

「スタジオあるんだな」

やっと落ち着いてくれた漣がそう言う

「ああ、俺はここで小さい頃ギターを習ってたんだ。えっと…たしか…」

俺はスタジオの引き出しを探る

「お、あつた…」

俺は一枚の紙を取り出す。そこには『タイムカプセル』と書かれていた

「それがどうしたんだ？」

漣が首を傾げる

「俺のギターの師匠が教えてくれたんだよ。作詞のやり方を、その時に作った作詞だよ」

二人で古い紙に書かれた、歌詞を読む

「なんていうか…子供っぽいけど…悪くないな」

「だな、この歌詞を修正して曲を作る…出来そうだな…」

二人で曲の構成をし、夕方になった

「さ、遅くならない内に帰るか…」

俺は荷物を持って立ち上がったが…

「やだ…」

漣は座ったままですんな事を言い出してしまった

「え？」

「今日はここに泊まりたい」

駄々っ子か？この子は…

「なんで？」

「空也ともっと一緒に居たい。空也は私と居たくないのか？」

「いや、居たいけど…お互に着替えも持ってきて無いだろ」

お互いの気持ちを知ってしまったんだ。どうなるか分かったもんじゃない…

「そんなの買ってくればいいだろ」

どうあっても泊まる気だな…

「わかったよ…家の人にちゃんと連絡しろよ？」

「わかってる」

そういつて漑は家の人に電話をかけていた

「やれやれ…」

俺も和田に電話をかける

「どうなされました？空也様？」

「今日、こつちで泊まるから」

「その件でしたら、本日、朝の時点で想定内でした。空也様のお部屋にお着替えをご用意しております」

「わかってやがったな？」

「嫌ですねえ、分かるわけ無いじゃないですか」

こいつ…さっき自分で想定内って言ってなかったか？だから冷蔵庫にあんなに食材が入ってたのか…

「もついい、じゃあな」

「頑張ってください。空也様」

「うるさい…」

乱暴に電話を切った

「さー！いくぞ！空也」

漣は俺の手を握って歩き出した

「わかったわかった…」

漣と二人で漣の買い物を済まし、戻ってくる

「漣はこの部屋を使ってくれ」

漣を客室に通す

「空也はどこで寝るんだ？」

「俺か？俺は自分の部屋がある」

「どこなんだ？」

なんとなく嫌な予感がするが、とりあえず案内する

「ここだ」

俺の部屋には着替えとキングサイズのベッドが置いてあった。くそ、あの執事何考えてんだよ…

「ここかぁ…」

漣はさも当然のように荷物を俺の部屋に置いた

「だろうと思つたよ、今日は好きにしろよ」

「ああ、そうさせてもらつ」

否定する気も無いんだな

「やれやれ…」

俺は苦笑いするしかなかった

「さ！気を取り直して、晩飯作るか…」

俺は冷蔵庫を開ける

「確か出刃包丁あつたし、魚でも捌くか…」

俺は一匹のキスを冷蔵庫から出してまな板に置き包丁を持つ

「どうした？」

濡がずっとこつちを見てくる、なんとなく言いたいことは分かるが、
まあやりづらいつたらないな

「私にも手伝える事ないか？」

だろうな、言つと思つた…

「じゃあ味噌汁をお願いするよ。晩飯は和食だ」

「うん、わかった」

二人で作業を分担し晩飯を作る。二人分だけなので思いのほか早く終わる

「じゃあ食うか」

俺と漣が向かい合って雑談をしながら食事をし、洗い物を終わらせ、個室にあるお風呂を沸かす

「漣、風呂沸いたから、先に入れよ」

「あ、ああ…」

漣はすこし怯えながら風呂場に向かう

「ぜ、絶対どこにも行くなよ…」

「はいよ…」

俺はリビングのソファに寝転がる

「疲れた…」

本当は作詞のヒントを求めに來ただけなのに、まさかこんな事になるとは…

「漣のほうから告白されてしまったな…」

もともと俺から告白するつもりではいたが、なかなか踏ん切りがつ

かず。今まで来てしまっていた

「すべては俺の心の弱さか…」

そんな事を思いつつ、俺は寝てしまっていた

「……也、……きろ…」

何か声が聞こえた気がして目を開ける

「空也、やっと起きた…」

目の前に漣の顔がアップになっていた

「寝てたのか…俺…」

「なかなか起きなくて大変だったんだぞ」

やっと漣の顔が俺から離れて、起き上がる

「悪いな、漣も風呂から上がったことだし。俺も入るか…」

俺は自室から着替えを取り出し風呂場に向かい、風呂に入る

「だめだな…眠たさが拭えん…風呂場で寝る前にさっさと上がるか…」

体と頭を洗い、俺は風呂から上がって、リビングに向かうと、ソファに座っていた漣の隣に腰掛ける

「私は今、幸せだ。こんなふうに空也と一緒に居れる事が…」

俺の肩に頭を乗せ漣が呟いた

「まだ俺たちは始まったばかりじゃねえか」

「それでも、私は幸せだ。ありがとう、私を好きになってくれて」

俺に満面の笑みを見せる

「ああ」

俺は漣の頭を撫でる

「空也にそうやって頭を撫でられるのが好きだ。不思議と安心できる」

「そりゃ光荣だな…」

頭を撫でていた手を漣の肩に置く

「やっぱり空也は大人だな…」

「大人じゃねえよ、まだ子供だ。必死に背伸びしてんだよ」

漣が俺の顔を見る

「今もこうやって落ち着いているようにしてるが、相当恥ずかしいんだ。触ってみろよ」

漣が俺の胸に触れる

「本当だ、すごい心臓の音が聞こえる」

「だろ？」

そうやって漣に触れられていることも恥ずかしいのと言わないで
おう

「クスッ！また新しい空也が見れた」

「お前の恥ずかしがりはどこに行っただよ…」

「だって此処には空也しか居ないし、空也なら私は大丈夫」

「そうですか…」

時間を見ると、時計は十一時を過ぎていた

「どつりで眠いはずだ…漣、俺はもう眠いから寝るぞ？」

「ああ、私もそろそろ寝るよ」

二人で俺の寝室に向かう…ん？二人？

「ああ…そうだった…」

俺は今日寝れるんだろうか？

「もつなるようになれ…」

開き直ればた多分寝れる……だろう…

俺は後ろの漣に気付かれない様にそう呟き、寝室の扉を開けてベッドに横になる

「邪魔します」

漣がもぞもぞと布団の中を移動し、俺の横に顔を出す

「空也の匂いだ」

漣が横になった俺の体を抱き枕にする、本当にこんな性格だったか…？もっと凛々しかったような気が…

「今日は離さないから…」

俺の耳元で漣がそう呟く、一瞬で俺の顔が赤くなるのが分かる

「わかったからもう寝ろ…」

漣の方を見ず、俺がそう呟く

「うん、おやすみ…空也…」

より一層俺に抱きつく力が強くなる、腕に柔らかい物が触れる

「お、おやすみ…」

本当に今日、俺は寝れるのだろうか？

不安一杯で俺が寝付けたのは三時を過ぎていた…

翌朝…

腕に圧し掛かっている重みで俺は目が覚めた、時計を見ると七時過ぎを指していた

「ほとんど寝れてねえ…」

隣には無防備で寝ている漑が居た

「ま、夢でないのは確かだな…」

俺の腕は痺れていて。冷たかった

「さて、漑が起きる前に朝食を作るか…」

漑が巻きついていている腕を抜いて、寝室から出て、顔を洗いに洗面所に向かい…

「ナイスファイト！俺の理性！」

鏡の前で親指を立てる

「何やってんだ…俺は…」

さっさと顔を洗ってキッチンに向かう

「朝はやっぱりご飯だな！よし！鮭でも焼くか」

米を洗い、炊飯器にセットして、鮭を塩焼きにする

「あとはお吸い物でも作るか…」

朝なので、簡単にあっさりしたお吸い物を作る

「こんなもんだな、あとは漣を起こさねえと」

俺は寢室の扉を開けると漣はまだ寝ていた

「漣、起きろよ、朝だぞ」

漣の肩に触れて軽く揺らす

「まだ早いよ……ママ…」

ママで…コイツ、ママ、パパって呼んでんのか…

「誰がママだ！いいから起きろ！」

俺は布団を引っぺがす

「お前…どれだけ無防備なんだよ…」

どうやら下着だけで寝ていたようで、ズボンを履いていなかった

「とりあえず…戻すか…」

布団を戻して、漣を起こすのを再開する

「ん…空也？」

「やっと起きやがった…着替えて顔洗って来い、飯できてるから、待っててやるよ」

俺はベッドから下りる

「夢じゃ無いんだな？」

「少なくともな、おかげで俺の腕と理性が死ぬところだった」

漣の顔がパツと明るくなる

「おっと、抱きつこうとするなよ。俺じゃなくお前が困ることになる」

時は既に遅かったようで漣が俺に飛びつこうとしていた

「見なかったことにしてやるから、さっさと着替えろ、リビングで待っててやるから」

漣は布団を被って顔を赤くしてコクコクと頷いた

「あ、それと…お前両親の事、ママ、パパって言うてんのな…」

「なっ！！」

一気に漣の顔が真っ赤になる

「さっき寝ぼけて自分で言ってたぞ」

「なななな!!」

澪は顔から湯気が出そうなほど真っ赤になっていた

「はっはっは！それでこそ、澪だ。じゃ待ってるからな」

俺は寝室から出てリビングに歩いていく、リビングに来てしばらくすると着替えてきた澪がやってきた

「お、来たな。じゃあ飯食うか」

作ってあった朝食を温めなおし、テーブルに置く

「美味しい…」

お吸い物を一口飲んだ澪がそう言う

「口にあって何よりだ」

俺も朝食を食べ始める

「く、空也は昨日より落ち着いているんだな…」

澪がギクシャクしながら俺に話しかけてくる

「ん？まあな…何だ？今になって恥ずかしくなってきたか？」

澪が静かに頷く

「ま、その気持ちも分からんでもない、昨日の漣は感情が抑えきれなくなってた感じがしたしな。けど俺はこれで良かったと思ってる」

「え？」

「お前のおかげでお互いの気持ちを知れたんだ。気持ちなんてものは聞かなきゃ分からないし、昨日までの俺には聞く勇氣も無かった」

漣は黙って聞いていた

「だから、その壁を壊してくれた漣には感謝してる。ありがとな」

俺はニツと笑う

「空也…やっぱり大人だな…」

「ほめ言葉と受け取っておくよ」

俺は朝飯を完食し食器をキッチンに持っていく、お茶を淹れる

「ほれ」

俺は漣にお茶を渡す

「昼前の電車に乗るから、そのつもりでな」

俺はリビングから出ようとする

「空也はどこに行くんだ？」

「スタジオに居る。作詞しなきゃな」

古い紙を取り出して漣に見せる

「そういえば、それが目的だったな」

「忘れんなよ…」

「ごめんごめん」

俺達は笑いあった

「なあ空也？」

漣も結局スタジオに来て、俺に話しかける

「ん？」

俺はルーブリーフに目を落としたまま応える

「空也はどうやって歌詞作ってるんだ？」

「まず、何が伝えたいかを決める事からかな」

俺は顔を上げる

「歌で何かを伝える…」

「ああ、『Funny Bunny』は自分の夢、『キミノトモダ

チ』は友達の大切さ、『永遠の明日』は梓の為に」

「梓の為？」

漣は首をかしげる

「梓はなんでも一人で背負い込もうとするからな、もっと俺たちを頼ってもいいんだぞって意味を込めて作った」

「よく見てるな、空也。今作ってるのも何か意味があるのか？」

俺は頷いて、ルーズリーフに目を向ける

「この曲には、大人になっても今の友達と同じ気持ちでいようって意味を込めて作ってる」

「だから、『タイムカプセル』なんだな」

「漣みたいに俺は歌詞を書けないからな、伝えたい事があるから俺は曲を作る。いつか漣の為に曲を作るよ」

「ああ、楽しみに待ってる…」

俺が笑顔を見せると漣も笑顔で返してくる

「さ、そろそろ帰ろうか」

時間を見ると出なくてはいけない時間が迫ってきていた

「わかった、部屋から荷物を取ってくるよ」

俺は頷き、玄関に移動する

「お待たせ」

漣が大きい鞆をもって現れる

「貸せ、俺が持つよ」

漣から鞆をもらい、肩に担ぐ

「じゃ、行こうか」

俺達は別荘を離れる、少し離れると俺は足を止めて別荘に振り返ると漣もつられて振り返る

「ここに、また新しい思い出が出来たな…余計に売却しにくくなっ
てしまったな…」

「売るつもりだったのか？」

「ああ、俺達はもう殆ど使わなくなってしまうてな、地元の町に売
って公共の場にするつもりだったんだが…それも白紙だな」

漣は首を傾げる

「この別荘は、売のを止める。俺に色んなきつかけをくれた場所
だから…」

「きつかけ？」

「ああ、ギターを初めて触ったのも、料理を教わったのも、そして
漣とのきっかけをくれたのも紛れも無くこの別荘だから…」

俺は漣に手を差し出す

「行こうか…」

「うん」

漣の手の影と俺の手の影が重なる

また来るよ…そう思いながら俺と漣は手を繋いで別荘を去っていった

それから予定していた電車に乗って見慣れた町に戻ってくる…時刻
は既に夕方になっていた

「二日連続で遅くなるのは親御さんに悪いから、送っていくよ」

「すまないな、空也」

手は繋がなかったものの、かなり近い距離を二人で歩いて漣の家に
立つ

「ほら」

肩に担いでいた鞆を漣に渡す

「ああ、ありがとな…また、鞆返しに行くから」

「返しに来る必要はねえよ、漑にやる」

「いいのか？」

俺は頷く

「ありがとう、大切にするよ」

「ああ、そうしてくれ。じゃまた明日、学校でな」

俺は踵を返して歩き出す

「……………空也！」

少し歩くと、漑に名前を呼ばれ、振り向くと

「……………ん……………」

「!?!?!?」

唇を塞がれた、何に?なぜ目の前に漑の顔が?

少しすると漑の顔が放れていった

「わ、私のファーストキス…く、空也に…貰ってほしくて……………その…」

言葉が尻すばみになり、顔を真っ赤にしながら俺の反応を待つ漑

「俺もファーストキスだったんだがな……………」

「え！？そ、そうだったのか?!」

漣が慌てていたのを見ると俺は笑ってしまっていた

「漣…」

「く、空也……ん…」

今度はこちらからキスをする

「これでおあいこだな」

「……………ばか………もう離さないから…」

漣が顔を真っ赤にしながら俯いて、小さく呟く

「離さないのは、こっちも同じだ。ずっと俺の傍に居てくれ」

漣の頭を撫でる

「じゃ、本当に俺は帰るな」

「うん、また明日…」

漣が頷くのを確認し、そう離れていない俺の家に帰っていった

「お帰りなさいませ、空也様」

家の扉を開けると和田が待っていた

「ああ」

俺はコーヒーを頼んで自室に入る

「空也様、コーヒーをお持ち致しました」

「早いな」

「そろそろ帰ってくるだろうと、準備してました」

「気が利くな。もう一つ頼まれてくれるか？」

「何なりと」

「親父に伝えてくれ、あの別荘を売却しないという事と、所有権を俺に譲ってほしいという事をな」

「畏まりました。よかったですね、空也様」

「お前の何でも知ってるような口ぶりは、時に腹が立つな」

「嫌ですねえ、いち執事が何でも知ってるわけが無いじゃないですか」

俺の言葉に和田はとぼけていた

「まあいい、じゃ頼むな」

「畏まりました」

和田はお辞儀をして出て行った。今回は和田にも助けてもらったな。食材や部屋の件も含めて、うちの執事で俺の身を一番案じてくれるのかもしれないな…とにかく俺は周りの大人にも助けて貰っている事を忘れてはいけないと強く思った

夕食を食べ、部屋で曲を作っていると不意に俺のケータイが鳴り響いた

「親父…」

ディスプレイには親父と書かれていた

「なんだよ…」

「自分の親父になんだよってのは酷いんじゃないか？空也」

親父はアメリカに行っても変わらないな

「で？用件は？」

「ああ、別荘の件だ」

もう伝えたのか…仕事が速いな…

「空也のその言葉を待ってた」

「は？」

親父から聴いた言葉は予想外だった

「一番小さくて、俺達も殆ど使わなくなったのは確かだが、今まで売らなかったのは、俺が一番最初に建てた別荘だからだ、それに…」

「それに、なんだよ…」

「あそこにはお前も思い入れが有るんじゃないのか？」

時々核心を突いてきやがる

「まあな…」

「なら、尚更だ、あの別荘はお前に譲る」

「ああ、ありがとな…親父…」

「お前が素直に礼を言うなんて珍しいな」

「なんだ？罵倒の一つでも言っただけ欲しいのか？」

「はっはっは！もっと素直になれ、来月には少し戻れるから、遷ちやんと仲良くな」

「やかましいわ！」

俺は乱暴に電話を切った

なんでうちの大人共はこんなに鋭いんだよ…

「まあいい、曲作るか…」

こうして夜は更けていった…

第十六話（後書き）

はい、甘ったるいですね

私は書いててキーボードを投げたくなりましたw

次回は合宿をします

第十七話

「今年も合宿をします!」

夏休みに入り、漑が部室でビシッと全員を指差す

「おおー!今年もやるのか!」

「りっちゃん!楽しみだねー!」

律と唯が確実に別のことで喜んでいた。遊ぶ気満々だな、こいつら…

「あの…どこでやるんですか?」

梓が漑に聞く

「それは、ムギ…今年もお願いできないかな?」

漑が紬を見るが、浮かない顔をしていた

「ごめんなさい!今年は近隣の別荘全部、予定が埋まっちゃって借りれそうに無いの…」

紬が深く頭を下げる

「「えー!」」

それに反応したのは遊び人二人だった

「去年が運が良かったただけだ、そう何度も借りられねえよ」

俺が紬のフォローをする

「じゃあ…どうしようか…」

漣が再び考え始め、遊び人二人がまだブーブー言っている

「やれやれ…うちの別荘使うか？」

俺の言葉に漣が顔を上げる

「そついえばクウの家も金持ちだったな」

律の言葉を横目に、俺は漣に近づく

「心配すんな、あの別荘じゃねえから」

漣にしか聞こえない声で呟く

「う、うん…」

ぎこちなく頷く漣を確認すると俺は振り向く

「クーくん！何処に有るの？！」

唯が俺に近づいてくる

「お前らのご期待に応えて、海だ」

俺の言葉にはしゃぐ二人を横目に俺は紬に目を向ける

「お前の望みの普通とは少し違うかもしれないが、それでもいいか？」

「いえいえ、私の事は構いません。ご招待謹んで御受け致しますわ」

口調がお嬢様になっているな

「ご招待なんてした覚えはねえよ、これは合宿だからな。それと俺に対してはその口調は禁止な」

紬の話し方に釘を刺して、俺は梓を見る

「梓、行き先の詳しい事は言えないが、楽しみにしとけ」

「はい！」

「元気が良くて何よりだ」

こうして今年の合宿をうちの別荘でやる事が決まった

「なあ空也、私にも詳しいことは教えられない？」

漣と二人でいつもの帰り道を歩く

「ま、漣になら構わねえよ。よく聞けよ？」

漣が頷くのを確認すると俺は場所の詳細を漣に告げた

「島だ」

「は？」

案の定ポカンとしてるな

「もう一度言っぞ？島だ」

「島？」

「ああ、うちの所有する島があつてな、確かその別荘が今年空いてた」

説明したところでずっと漣がポカンとしていたから説明をやめて、家に帰った

「お帰りなさいませ、空也様」

「おう、いきなりで悪いんだが、頼みたい事がある」

「何なりと承ります」

和田は手帳を取り出す

「今年の軽音部の合宿で、近くの島の別荘を使いたい、食材の調達、及び清掃、船のチャーターを頼む」

「何泊するご予定ですか？」

「三泊で多分七名になる」

「畏まりました。早速手配致します」

和田が家の奥に消えていく

「頼りになる執事だな…」

俺は部屋に戻り、『タイムカプセル』の仕上げをした

数日後：澪が夏期講習に行ったので、一人で商店街をブラブラして
いると律に出会った

「なんだ：お前も商店街に来てたのか」

「そういつクウこそ…」

「ま、せっかくこうして会ったんだ。適当にブラブラするか」

「そうだな！じゃいくぞ！クウ！」

二人でゲーセンに行ったり、ウィンドウショッピングをする

「そろそろ飯食おうぜ？俺は腹減ったぞ」

「そうだな、ハンバーガーでも食べに行くか」

俺たちはいつものファーストフード店に向かった

「あれ、梓と憂ちゃんじゃないか？」

ファーストフード店の窓を見ると憂ちゃんと梓が居た

「よし、入りに行くぞ！クウはその胸のサングラス掛けるよ！」

「俺、これ掛けるとただの不良になっちまうけど？」

ために俺は律の顔を見ながらサングラスを掛ける

「おお…！確かにこええ…でも似合ってるからそれで頼むな！」

俺に構わず店に入っていく

「やれやれ…」

俺もつられて中に入る

「涼しいなって律！何食うんだよ！」

「クウと一緒に良いよ。私コーラね！」

律は二人の隣の席に座る

「やれやれ、ハンバーガーセット二つ、ドリンクはコーラとアイス
コーヒーで」

「は、はい！」

あ、そうか…今サングラス掛けてるんだった。そら軽くビビるわな
代金を払って、店員さんから御盆を貰い、律のところに向かう

「全く…罪も無い店員さんを怖がらせてしまったじゃねえか」

律にハンバーガーセットを渡す

「サンキュー」

俺は向かい側に座ってハンバーガーを食べだす

「ねえ空也さんって軽音部でどんな感じなの？」

憂ちゃんが話題を俺のことに変える。俺がピクリと反応する

「ん〜空也先輩は何でも出来る凄い人って感じ、ギターも凄く上手いし、唯先輩や私にギターを教えてくれる時も凄く分かりやすいし、曲も作れるし、ムギ先輩に聞いた話だとお金持ちらしいし、イケメンだし、何より優しいし面倒見がいいし…」

べた褒めされてるな俺…

「空也さん、料理も出来るんだよ！」

「そうなの！？」

憂ちゃん、別に今それ言わなくなっただって良いんじゃない？

「は〜やっぱり凄いな〜空也先輩。何か雲の上の存在って感じがする」

梓、それは言いすぎじゃないか？

「私は頼れるお兄さんって感じがするな」

憂ちゃん良い事言った！

「お兄さんかゝ私は澪先輩みたいなお姉ちゃんが欲しいな」

「澪さん、優しいしカッコいいもんね」

二人とも、本当のアイツは子供だぞ？ってかしっかり聞いてんな俺も…

「律さんは？」

憂ちゃんの言葉に律がピクリと反応する、梓…下手な事言つと酷い事になるぞ…

「律先輩は…いいかげんで大雑把だから…パス…かな」

途端に律の目が光る

「ほおゝゝゝ誰が大雑把だつて？」

「ニヤ！」

いきなり声を掛けられた梓が飛び跳ねる…ニヤって…ホント猫みたいな奴だな…

「律さん？」

「よ！憂ちゃん！」

梓の隣に席を移動して梓にチョーキングする

「やれやれ…」

俺は食べ終わったハンバーガーの包み紙とポテトの入れ物をゴミ箱に捨てて律達の所に立つ

「あ、あの…何か御用ですか？」

憂ちゃんが怯えながら俺に聞いてくる

「やっぱ怖いかな？」

俺はサングラスを外し笑う

「空也さん！？」

「よ、失礼するよ。憂ちゃん」

俺は憂ちゃんの隣に座る

「えらくクウのことを褒めてたな、梓は」

「も、もしかして聞いてたんですか！？」

「申し訳ないが、すっかりとな」

見る見るうちに梓の顔が赤くなっていく

「悪かった、でも嬉しかったよ」

梓の頭を撫でる

「卑怯ですよ…そんなことされたら許すしかないじゃないですか…」

梓は心地良さそうに笑う

「お前、ホントに猫みたいだな」

「猫じゃないもん！」

「はっはっは！憂ちゃんもありがとな」

憂ちゃんにも梓と同じように頭を撫でる

「エヘヘ」

憂ちゃんも嬉しそうに笑う

「今日は澪先輩はいないんですか？」

「澪は夏期講習に行ってる」

梓の質問を律が答える

「先輩方は行かなくて良いんですか？」

「あたしが？…夏期講習に？…何で？」

危機感を感じないのか…お前は…

「ですよ…空也先輩は行かなくて良いんですか？」

「漣にも誘われたんだがな、一度習った事をもう一回習う気は無い、時間の無駄だ」

「空也先輩、勉強もできるんですね…」

律とは違う反応を見せる梓

「あ、そういえば先輩方に聞きたかったんですけど」

「ん？」

「ムギ先輩って自前のティーセットや別荘を持ってますけどかなりのお嬢様なんですか？」

「そうだぞー、何せムギの家には執事が居るし、夏休みとかは海外に行くんだからな」

「ホントですか?!」

「だったらいいなーって」

「ま、全部正解なんだが…別に言わないでおこう。そのほうが面白そうだ…」

「結局知らないんじゃないですか…」

「だったらさ、今からムギの家に行ってみようぜ」

律がケータイを出してムギのケータイに電話をかける

「あれ…出ないな…家のほうに電話を試みるか…」

律はケータイをいじり家に電話をかけるとすぐに反応があったようだ

「はい、もしもし…」

律のケータイからご年配の老人の声が聞こえた

「あ、紬さんのお父さんでしょうか？」

「いえ、私は琴吹家の執事で御座います」

「「ホントに居たあ！」」

律と梓が同時に声を上げて慌てだす

「ク、クウ！頼む！変わってくれ！」

律が俺にケータイを差し出す

「やれやれ…」

俺はケータイを受け取る

「すみませんね、ご迷惑をお掛けしまして」

「いえ、構いませんよ」

「申し訳ありません、申し遅れました、私は天城空也と申します」

「空也様で御座いましたか、とんだご無礼を致しました」

「いえいえ、その節はお世話になりました。多分ですけど父が今年もそちらに伺うそうなので、その時は宜しくお願いします」

「こちらこそ宜しくお願い致します」

その間三人はポカンとしていた

「そういえば、紬さんはご在宅でしょうか？」

「紬お嬢様は現在フィンランドに行っておられます。何か火急の御用でしょうか？」

「いえ、大丈夫です。紬さんに宜しくお伝えください。では失礼します」

「畏まりました、失礼致します」

俺は電話を切った

「ん？どうした？」

「「「……………」」」

三人が固まっていた

「まさか…空也さんの家にも…」

「まさか！？クウの家は金持ちだけど大きさは普通だからな！」

俺の返答を聞かず俺の家に電話をかける

「はいもしもし…」

和田の年齢がまだ若いので律が勘違いをする

「あ、もしもし空也君のお兄さんですか？」

「いえ、私は天城家の執事で御座います」

律の手からケータイが落ちる

「「居るんだ…」」

後輩二人が口を揃える

「居ないとは言ってねえからな」

そう言いながら俺はケータイを拾う

「よ、和田！」

「空也様ですか？」

「ああ。悪かったな、手間取らせて」

「構いませんよ。どのようなご用件で？」

「例の件の進行状況は？」

「滞りなく、順調で御座います」

「そうか、それだけが聞きたかったんだ。じゃあな」

俺は通話を切って、律にケータイを返す

「この二人の家って一体……」

後輩二人がそんな事を言っていた

「さて、長居しちゃ二人に悪いからな。俺は失礼するよ」

俺は席を外し、店を後にした

「さて……ゲーセンでも行くか……」

さつき律といったゲーセンに向かう

「これやりたかったんだよな」

俺は腕相撲の機械にお金を入れてレベルを最大に上げる

『レディー・ファイト!』

スタートの合図と共に俺は右腕に力を込める

「コノヤロ……」

機械は予想以上に強かった

「ぜってえ負けねえ……」

五分近くかけて俺の優勢までもってくる

「これで終わりだ……！」

最後に本気の力で機械の腕を倒す

『おおー！』

いつの間にか観客が出来ていた

「何だ？」

「すげー！兄ちゃん！」

観客の中から聡が出てくる

「おお、聡か。久しぶりだな」

「あのゲームでレベル最大に勝ってる人初めて見たよ！」

「そりゃ良かったな」

聡の頭をポンと叩いて俺はゲーセンを後にして家に帰ってギターの練習をした

それからまた数日…

「失礼しまーす」

唯が元気良く職員室の扉を開ける

「あら、貴方達って空也君、制服くらいちゃんと着なさい」

俺は夏服のカッターシャツのボタンを全て開けて、中に柄の大きいシャツ、頭には汗を落とさないようバンダナを巻いていた

「似合ってるだろ？」

「確かに良く似合ってるけど…そういう問題じゃありません」

めんどくさくなりそうなので無視して本題を話す

「そんなことより、来週から合宿すんだけど、先生も来い」

「ああ…合宿ね…」

今思いつきりめんどくさそうな顔をしゃがった

「行き先も聞かずにその顔をするのは感心せんな。というより強制参加だから」

俺がビシッとさわちゃんを指差す

「行き先は海！それもクウの別荘だぜ？！」

「別荘？！海？！」

律の言葉にさわちゃんの顔が一気に明るくなる

「そういうことならもちろん参加させてもらうわ」

なんだこの態度の変わりようは、遊び人が三人に増えただけか？

「んじゃ月曜の朝六時に駅に集合だから」

場所と時間をさわちゃんに説明して、音楽室に戻って練習する

「久しぶりに皆揃った事だし！合宿の買い物に行くか！」

夕方になり、片づけをしていると、律がそう言つと皆が頷き、俺たちは商店街に来た

「何買いに行くんですか？もしかして新しい機材ですか？」

梓が俺に話しかけてくる

「さあな……」

大体予想は付いているがな……

「水着だよ」

唯が水着を指差す

「遊ぶ気満々！？どうせそんな事だろうと思いました」

梓が不満げな顔をする

「別にずっと遊ぶわけじゃないぞ」

「そんなの信用できません！」

「な、何で？」

律の言葉は信用が無いな

「まあ、たまには息抜きも必要だから…な！」

漣が梓を説得する

「そっか…そうですね！」

漣は笑って梓の頭を撫でる

「ま、ゆっくり選べば良さ。俺は帰る」

そう言って俺は歩き出す

「待ってくれ空也！」

漣が俺を止めて寄ってくる

「水着買ったんだったら俺いらねえだろ」

「そうじゃなくて…空也はどんな水着が好みなのかなって…」

澪が少し赤くなって俺に聞いてくる

「似合ってれば何でも良いよ」

俺は笑って頭をポンと叩く

「じゃあな」

右手を上げて俺は帰った

そして合宿当日…現時刻早朝五時

「ねみー、和田あ。アイスコーヒー頼むー」

リビングに下りて既に起きている和田にアイスコーヒーを頼む

「空也様も眠たそうですね」

「朝五時だぞ、バカヤロー…唯一の救いが荷物が少ないって事ぐら
いだ…」

机に項垂れて力なくこたえる。今年はずちの別荘なので事前に着替えなどは持って行っていたのである

「どうぞ」

「サンキュ…」

アイスコーヒーと共にサンドイッチを出される

「留守は任せる。好きに使え」

サンドイッチを食べ、髪をセットしてギター二つと貴重品が入っている鞆を肩に担ぐ

「じゃ、行ってくるから」

「行つてらっしゃいませ。私はこれからまた少し休ませていただきます」

和田は少し眠たそうだった

「ゆっくり休め、じゃな」

そう言つて俺は家を出ると憂ちゃんに電話をかける

「おはようございます。空也さん」

早朝だというのに憂ちゃんは起きていた

「おはよう、憂ちゃん。唯起きてるか？」

「あ、今日から合宿でしたね。今起こします」

やっぱり寝てたか…去年みたいな事は御免だからな…電話して正解だった

時計を見ると五時半だった

「おはよお…クーくん…」

ケータイから唯の声が聞こえる

「挨拶はいい、遅れんなよ」

「はい…」

力なく唯が応えると憂ちゃんに代わった

「ごめんな、朝早くから電話して」

「いえ、私は大丈夫ですから。お姉ちゃんの心配をしてくださってありがとうございます」

「そういつてくれるとありがたいよ。じゃ憂ちゃん、またな」

俺は電話を切って、駅に向かった

「なんだ、皆早いな」

駅には唯以外の全員が待っていた

「クウ、荷物少くないか？」

「俺は既に荷物は別荘に有るからな」

「卑怯だぞ！クウ！」

律がブーブー文句言っているがとりあえず無視する

「初めて家の別荘じゃないところに行くからワクワクします」

「はは、ご期待に添えられるか分かんがな」

紬が落ち着かない様子でワクワクしていた

「私は別荘に行くのが初めてよ」

「ま、普通はそうだろうな、さわちゃん、梓も初めてか？」

「あ、はい」

梓も頷く、初めての別荘が島じゃあちよっと驚くだろうな

「く、空也…」

漣が俺の腕を掴んですこし離れたところで話す

「本当に島なのか？」

「お前に嘘言っでどうするよ」

まだ漣は信じられない様子だったがこればかりは仕方ない

しばらく雑談していると集合時間ギリギリで唯が来て、俺たちは電車に乗って港に向かう

「この方向って去年ムギの別荘と同じ方向だよな」

律が俺に聞いてくる

「ああ、降りる駅もそこだ」

「今年もそこで合宿かぁ…」

律が楽しそうにしていたが、ま、そこじゃないんだけど…

電車から降りると、俺は別荘地とは違う方向に歩き出した

「おーい！クウ！そっちは別荘地じゃないぞ？」

「誰がそこって言ったよ、いいから付いて来い」

行き先を知っている漣とうつすらと場所に気付いた紬が付いてきて、全員が付いてくる

「これに乗るぞ」

俺は少し小さめのクルーザーを指差した

「りっちゃん！クルーザーだよクルーザー！」

「そうだな！唯！」

「空也君、貴方一体…」

唯、律、さわちゃんがいい反応を見せる

「……………」

漣と梓がポカンとしていた

「空也様、お待ちしておりました。いつでも出せます」

英雄さんが俺たちを待っていた

「英雄さん、よろしく頼みます」

「あ、紬お嬢様も宜しく願います」

英雄さんが紬にも頭を下げる

「漣、律、この人が大地の父親だ」

二人に紹介する

「大地の父の不動英雄と申します。息子がお世話になってます」

「「大地の父親と思えないくらい礼儀正しい！」」

二人の感想が被る

「さ、ここで喋っても仕方ない、乗るぞ」

俺たちはクルーザーに乗って各自荷物を置く

「では、出港します」

英雄さんがクルーザーを運転し港から出港する

「りっちゃん！動いてるよ！」

唯と律は甲板ではしゃぎ、梓とさわちゃんは中に備え付けてあるソファでポカンとしていた。紬は落ち着いた様子で唯と律を見ていた

「どうだ？少しは現実味を帯びてきたか」

甲板で風を感じていた漣に話しかける

「ここまで来るとな…初めてだよクルーザーに乗ったのは」

「だろうな…」

「空也はクルーザーの運転はできるのか？」

「一応出来るぞ。中学の時親父から習った」

「じゃあ、今度は二人で来たい…」

漣がすこし赤くなってそう呟く

「ああ、分かった。約束な」

俺は笑って漣の頭を撫でる

「じゃ、俺はまだ固まってる二人を正気に戻してくるな」

俺は船内に入る

「梓？」

「……」

梓に話しかけるが応答が無い

「おい」

「……」

梓の前で手を振るが応答が無い

「猫」

「猫じゃないもん！」

猫には反応した

「あ、空也先輩……」

「まだ緊張してんのか？」

「緊張というか……私なんかがこんな所に居るって思っても見なくて……」

「その気持ちは俺には分からんが、あいつ等を見てもろよ」

俺はまだはしゃいでいる唯と律を指差すと梓も二人を見る

「ま、あそこまではしゃげとは言わんが、もっと年相応にはしゃいでいいと思うぞ」

「空也先輩もあんなにはしゃいだ事あるんですか？」

俺は頷く

「意外ですね」

「今の俺からは想像できないだろうな、まあせっかく来たんだ楽しめよ」

梓に冷蔵庫から出したジュースを渡す

「ありがとうございます。私濤先輩のところに行ってきますね」

「ああ」

梓はトコトコと濤のところに向かった

「空也君は何しても似合うわね」

「そつでもねえよ」

さわちゃんが俺に話しかけてくる

「ある意味女性の敵ね」

「何でだよ」

「貴方のそのルックスであんな優しい言葉かけられたら誰でもドキツとしちゃうわよ。それを無意識で出来ちゃうんだから」

そんなつもりじゃないんだがな、それが無意識で出来るって事なんだろうな

「褒め言葉として受け取っとくよ」

めんどくさいので適当に相槌をうっておく

「なんで特定の相手が居ないのか不思議なくらいよ」

「なにをいきなり言っただよ」

その言葉を聞く限り、俺たちのことはばれてないみたいだな

「だってそうじゃない。澪ちゃんにも言えることだけど、ファンクラブまで出来てる人気者なのよ？特定の相手が居ても不思議じゃないわよ」

「人気者はその手の事は慎重なんだよ、よく芸能人が金曜日さんに撮られてるからな」

適当に返しておく

「もしかして、空也君と澪ちゃんが出来てるとか？」

冗談が半分以上あるんだろうけど、バッチリ正解なんだよな…

「はいはい」

俺は否定できず、曖昧な返事をする

「あら、否定しないわね、もしかして正解？」

さわちゃんが悪い表情になる

「なんの根拠も無しに推測でものを言うのは感心せんな」

「あら、根拠はあるわよ」

「なんだよ？」

「女の勘よ！」

さわちゃんが立ち上がる

「話にならんな」

俺は冷蔵庫からアイスコーヒーとビールを取り出す

「それでも飲んでろ」

さわちゃんにビールを渡して甲板に出る

「あ、空也。さっき梓と話してたんだけど、別荘にスタジオはあるのか？」

「スタジオはあるぞ、思いっきり音出しても大丈夫だし、もちろん電気や水道、ガスも問題ない」

俺は船尾に行き、レーダーを見る

「もうちよつとで見えてくると思う」

「ほんとかー！クウ！」

「ああ」

「楽しみだなー！唯！」

遊ぶ気満々だな…時間を見ると十時だった

「昼前には着くな」

「そうなのか？」

「ああ、高速船をチャーターしてくれてたからな」

しばらく雑談していると島が見えてきた

「見えてきたぞ、あれだ」

全員が俺の指差した方向を見る

「やっと着いたー！遊ぶぞー！」

「」「おー！」「」

律の言葉に、唯、細、さわちゃんが声を出す

「合宿に来てんだろぅが…」

俺の呟きも虚しく響いた

クルーザーが速度を落とし、棧橋に近づいていくと俺は手すりに足をかけた

「空也何する気だ？」

「飛び降りる気だ」

棧橋にさしかかると俺は手すりに掛けていた足に力を込めてジャンプした

「よつと…英雄さん、投げてくれ」

英雄さんがロープをこっちに投げる、それを受け取り近くの杭に縛り付ける

「これでよしっ」と

クルーザーが止まると出入り口が開いた

「全く…驚いたじゃないか…」

「悪い悪い、いつもなら出迎えの執事がやってくれるんだが、今回は誰も居ないんだな」

そう言いながら俺の荷物を持つ

「さ、行こうぜ」

俺を先頭に一行は船を下りて別荘の前に立つ

「何これ…」

「でっけー…」

目の前には城みたいな別荘が聳え立っていた

「素敵ですね、でもまだ小さい方ですね」

「……え!」「……」

紬の言葉に全員が振り向く

「まあな、ちよいと狭いかもしれんな」

「「どれだけの金持ちなんだ…この二人」」

漣と律がそんな事を言っていたがあえて無視

「さて…入るぞ」

玄関の扉を開けると広いエントランスが現れる、俺は気にすることなく中に入っていく

「ここがリビング」

エントランスから奥に入ると広いリビングがあった

「で、階段を上がって右手に行くと六人分の部屋を用意してある。
好きなところを使ってくれ、奥の階段からは直接リビングに行ける」

エントランスのリビングの扉から両脇にある階段をあがって説明する

「あたしたちは七人だぞ？」

「俺の部屋は別であるから大丈夫だ」

「どこにあるんだ?!」

漣が目をキラキラさせて見てくる

「こつちだ」

再び階段を上がり、三階には一間しかなかった

「もしかして…これ？」

「ああ」

俺は扉を開ける

「広っ……」

リビングとさして変わらない広さがあった

「奥にはやっぱり直接リビングに行けるから、あまりエントランス意味無いんだよな」

俺の部屋にとりあえず荷物を置いて部屋の奥の階段からさっき説明した客間に移動する

「荷物置いて、リビングに集合な」

各々好みの部屋に荷物を置いてリビングに集合する

「ま、見てのとおりこのガラス張りの向こうはプライベートビーチだ」

バルコニーがあつてそこから続く階段を通るとプライベートビーチが広がっていた

「唯！」

「りっちゃん！」

「「遊ぶぞー！」」

どたどたと四人が部屋に消えていった

「紬とさわちゃんも行きやがった…」

「とにかく遊びたかったんだな…」

俺と澪が呟く

「どうするんですか？」

梓が俺を見る

「まだスタジオの場所とか説明してねえんだけど、まあいいか…お前らも着替えて来いよ」

「空也はどうするんだ？」

「俺は冷蔵庫を見てくる、英雄さん、頼むな」

「畏まりました、どうぞ」

英雄さんはキッチンに向かって歩き出した

「先に遊んでろよ。後から行くから」

漣の肩をポンと叩き、英雄さんについていく

「こちらが食料庫になっております。四日分の食材を保存しております」

英雄さんから鍵を貰い、重たい扉を開くと大量の食材が入っていた

「足りなくなるより、余った方が宜しいと思ひまして」

「そうだな」

「では、私はこれで失礼致しますね。四日後に迎えに来ます」

英雄さんは踵を返す

「英雄さん、喋り方。直しといてね」

「やっぱり駄目だったかい？」

英雄さんが笑いながら俺に向き直る

「何かね、気持ち悪いから。そんな言葉遣いをされると」

「はっはっは、ごめんごめん。気をつけるよ、じゃあ四日後に迎えに来るから。あ、空也君の部屋にいつもの置いてるから」

「気が利くね。家の執事たちは」

「褒め言葉として受け取っておくよ。じゃあね」

英雄さんはクルーザーに乗って帰っていった

第十七話（後書き）

合宿編その一です

初めて話を跨ぎます。ご了承ください

第十八話

「あつた…これだな」

俺は服を脱いで置いてあつたウエットスーツに着替え、スノーケル付きのマスクとフィンを持ってさっきは見せなかったエレベーターで下りる

「さて、合流するか」

俺はビーチに歩き出した

「なんだ、しっかり遊んでんじゃねえか」

「空也、遅かったなって空也も遊ぶ気満々?!」

パラソルの下に漣と紬がいた。漣は紺のビキニで紬は黄色のビキニを着ていた

「この海は潮の流れが穏やかで綺麗でな、珊瑚礁や熱帯魚が見れるんだ」

「そうなのか?」

「ああ。じゃ、行ってくるわ」

俺はフィンを足につけて海に向かう

「あ、そだ」

頭にマスクをつけて振り向く

「二人とも、水着良く似合ってるよ」

俺は笑いながら言っつて。再び海に向かう

「あ、ありがと…」

漣が照れながら俺に言っていたのを聞くとマスクを顔につけて海に飛び込んだ

太陽光がキラキラ光る海の中を潜る。某熱帯魚映画のアレやテレビでよく見る珊瑚を見る。ここは変わらないな…

酸素ボンベを背負ってないので一度海面に顔を出し、もう一度潜る。それを繰り返しているとさすがに疲れたのでビーチに戻り、海上ではウエットスーツは張り付いて気色悪いので上半身だけ脱ぐ

「クウって意外と筋肉質な体してんだな、腹筋割れてんじゃん」

ビーチで唯と背中合わせに座っていた律が言ってくる

「まあな、ところで疲れたのか？」

「そうです！だから練習のほう良かったんです！」

梓が日焼けで真っ黒になった体で俺のほうに寄ってくる

「梓…真っ黒だな…」

「それは…その…私が一番はしゃいでたから…」

梓が恥ずかしくなって俯く

「それでいいんだよ、遊ぶ時はしっかり遊べ。気を張ってばかりじゃ出来る事も出来なくなるからな」

梓の頭を撫で、別荘に向かう途中、澪がこっちを見ていた

「どうした？」

「いや、意外と逞しい体つきなんだなって思ってたな」

澪もか…

「ま、俺の裸を見る機会も無いからな。そう思って当然だ。各自着替えて楽器持ってリビングに集合だ」

「「え〜！お腹すいた〜」」

遊び人二人が文句を言うてくる

「やかましいぞ、もともところには練習するために来てるんだ。文句を言うな」

ブーブーと未だ文句を言う遊び人二人

「よし、今日練習せず、明日から四六時中練習と、今日練習して、明日以降午前中は遊び、午後は練習のどっちがいい？それでも文句

を言う奴は飯抜きだ」

「さっさと行くぞ！唯！」

「うん！」

律と唯が別荘に帰っていく

「扱いが上手くなってきましたね」

梓が俺を見る

「あいつ等には飴と鞭方式のほうが素直になる。俺としては明日からずっと練習でも構わんのだな」

そういつて俺も別荘に歩き出し、バルコニーから中に入ると俺は階段とは違う方向に歩き出した

「空也、どこに行くんだ？」

漣の言葉に振り向きながら俺は出っ張っている壁に手を当てる

「階段で三階まであがんのめんどくさいんだよ」

俺の手の周りが反応して壁が開く

「指紋感知式のエレベーターだ。家族だけが使える」

「……………」

澪が固まって俺を見ると、遅れて梓が現れた

「澪先輩？どうしました？」

「……………」

澪が静かに俺を指差すと梓と目が合うが俺は気にせずエレベーターに乗って扉を閉めた

「な、なんですか？！あれ？！」

梓がただの壁になった所を指差していた

「やっぱり驚くよな……」

三階の俺の部屋に入り、着替えてギターを担いでさっき使ったエレベーターを使い下に下りるとさわちゃん以外が集まっていた

「なんじゃそりゃー！」

「すごいー！」

律と唯が俺に駆け寄ってくる

「この別荘には色んなところに隠し通路があるんだ。親父の遊び心でな。これはその一つだ」

簡単に説明して全員が私服に着替えてきているのを確認すると

「もうさわちゃんは放って置いて、スタジオに案内するぞ」

俺たちはエントランスに出て玄関から見て左手にある通路を歩く

「ここだ」

防音扉を開くと西側がガラス張りになって海が一望できるスタジオがあつた

「広いね」

「あんなアンプ見た事ないです！」

紬、梓が第一印象を言う

「律はあのドラムを使い」

俺は律に新品のドラムを指差す

「おお、新品のドラムだ！」

律がドラムに走っていく

「あのガラスの壁は夕方になったら眩しくないのか？」

「それはその壁についてるボタンを押せば……」

澁の質問に俺がボタンを押すと上から日よけの壁が下りてくる

「とまあこんな感じだ」

「なんかもう何でもありだな…」

漣がそう呟いていた

「それは否定せんよ」

そういいながら俺はギターを取り出してチューニングを始めた

「あずにゃんのそれって何？」

唯が梓が持っているギターのヘッドに目線をやる

「ただのチューナーですけど？」

「へー、チューナーって言うんだ」

なかなかの爆弾発言だな。音楽をやっている身としては致命的じゃないか？

「え？！じゃあ唯先輩はどうやってチューニングしてるんですか？」

「え？適当にこうやって…ほら！」

唯がギターを弾くとチューニングは合っていた

「く、空也先輩…これって…」

「絶対音感ってやつだ」

俺はチューニングしながら答える

「って空也先輩もチューナー使ってないし！」

「俺は小さい頃に叩き込まれたんだよ。絶対音感なんて持ってねえよ。努力の賜物だ」

「どんな教え方をされたんですか？」

「どんなってチューナーを使わずにチューニングして、その音を外したら蹴られてた」

「スパルタ!？」

梓が驚いていたが、そのスパルタ特訓のおかげでこうやって出来るからな

「よし」

軽く弾くとチューニングは合っていた

「とりあえず皆に渡しておくな」

俺は『タイムカプセル』の譜面を全員に渡す

「出来たんだな。この曲」

澪が俺にそう言う

「ギリギリで間に合った。とりあえずギターパートだけが弾くな」

『タイムカプセル』をボーカル込みで弾き語りする

「相変わらずこの手の曲を作るの上手いなクウは」

「いい曲…」

「さすが空也先輩です！」

「クーくん凄いねー！」

律、紬、梓、唯の順番で感想を口にする

「この曲はこの合宿で音あわせをしときたい、各自練習頼むな」

「よし、じゃあやるか！」

律の号令を合図に音あわせを中心に練習を始める

くく

二、三曲音あわせをする

「今の感じ良かったな」

「そうですね！唯先輩も！」

普段練習しねえのになんでこう上手いかな…これが天才か…

「律もリズムが走らなかったな、何か特訓でもしたのか？」

漚が律を見るとぐったりしていた

「ハラ減った〜力が出ない〜」

ただ単に空腹で余計な力が抜けただけだった

「私も…」

紬が遠慮しがちに手を上げる

「んじゃ、飯にするか…当初の予定通りバーベキューするぞ」

俺たちは楽器をスタンドに置いてバルコニーに向かう

「遅かったわね皆！準備オツケーよ！」

さわちゃんがバルコニーで準備を済ましていた

「じゃあ食材取ってくるか、漚、紬、梓、手伝え。さわちゃんは火を頼む」

俺は比較的安心できるメンバーを選抜し食料庫に向かった。てか教師に指図したな俺…

「ここなのか？」

キッチンの脇を抜けて俺たちは食料庫の扉の前に立ち、英雄さんから預かった鍵を使って扉を開ける

「凄い量ですね…」

入って一言梓がそう言う

「皆は野菜を頼む、俺は肉を持っていくから」

全員が頷き、玉葱やピーマン、かぼちゃといった野菜を持っていく

「肉はこれでいいか…」

真空パックされた牛肉の塊を手にしてバルコニーに向かう

「空也君、そんな大きな塊持ってきてどうするの？」

バルコニーに出ると律と唯が野菜を切り、漑と梓がおにぎりを作り、さわちゃんが炭に火をつける事に悪戦苦闘し、紬が俺に聞いてくる

「どうするって捌く」

俺はこのときの為に買ったM y包丁を取り出し、軽く上に投げてキヤッチして、大きいまな板に塊を乗せて手際よく捌いていく

「空也君って本当に何でも出来るのね」

炭に火をつけることに成功したさわちゃんが俺の手元を見る

「これくらいなら見てれば出来るようになったよ」

「ほんとに人間か？クウ？」

「失礼だな、れっきとした人間だ。よし、終わり」

喋りながらも肉を捌き終え、律達を見るとまだ野菜を切っていた

「ちょっとだけ切つてやる」

かぼちゃを取り、一口サイズにカットしていく

「かぼちゃが豆腐みたいに軽々と…」

「あがり、次！」

玉葱を二つ取り紬とさわちゃんに投げる

「皮剥いといってくれるか？包丁取ってくるから」

「うん、（ええ）」

さわちゃん…やけに素直だな

「サンキュ」

二人に？いてもらった玉葱を受け取り、一般的な包丁で切っていく

トタタタ

「はいいわね」

「りっちゃん、クーくん凄いよ！玉葱切ってるのに涙が出てない！」

「鼻で呼吸すると、玉葱の成分が鼻に入ってその刺激で涙が出るん

だよ。だから玉葱を切る時は息を止めるか口で呼吸すればいい」

そんな事を言ってる間にも玉葱を切り終わる

「こんなもんで後は任せて大丈夫だろ」

「クーくん〜とうもろこしが切れない〜」

大丈夫じゃなかったようだ

「やれやれ…貸せ」

とうもろこしをもらい包丁で切って唯に渡す

「串にさすのは任せた」

さすがに疲れたのでバルコニーのベンチに座る

「お疲れ様、空也」

漣が俺におにぎりの皿を見せる。見事に大きさが二人でぜんぜん違っていたが、俺は大きいほうを取る

「やっぱり私の手って大きいのかな…」

漣が自分の手を見ながら俺に言ってくる

「んなことねえよ、手え出してみな？」

漣が左手を出すと俺の右手と重なると俺のほうが二周り以上大きか

った

「な？」

「クスッ！本当だな！」

やっと笑顔になった漣を見ながらおにぎりを食べる

「というより梓と比べるのがどうかしてんだよ。あいつ他の子と比べると手が小さいからな」

「そんな事ないもん！」

俺の話を聞いていた梓が乱入する

「なんだ、聞いてたのか」

「酷いです、空也先輩…」

梓が分かりやすく拗ねる

「はっはっは！悪い悪い、これから成長するんだもんな」

俺は笑いながら梓の頭をポンと叩くと梓は笑顔になった

「さ、そろそろ律たちのところに戻るか…」

俺は立ち上がってテーブルに向かった

「はい 空也君」

紬が炭で焼いていた肉や野菜を皿に乗せて渡す

「サンキュ」

「よし！みんなグラスを持ったな！」

ジューズが入ったグラスを持たされ律が全員を見渡す

「かんぱーい！」

『かんぱーい！』

律の声に全員が反応し声を出す

「ねえ空也君、お酒はないの？」

「学生の前で酒飲もうとすんなよ」

バーベキューを楽しんでいるとさわちゃんが俺に聞いてくる

「いいじゃない、お酒ぐらい」

「やれやれ……」

俺は皿を置いて中に入る

「さわちゃんも来いよ」

「分かってるわよ」

さわちゃんが嬉しそうについてくる

「ま、さすがに冷蔵庫には入ってねえな」

キッチンにある冷蔵庫を覗くが入ってなかった

「さわちゃん、ワインは飲めるのか？」

さわちゃんがとびっきりの笑顔で頷くのを確認するとワインセラーに向かった

「なに…ここ…」

「なにしてワインセラーだが？」

俺は壁に手を当てると壁が光った

「なにそれ…」

「指紋認知装置」

ゴゴゴと重い音を響かせて扉が開く

俺は適当に一本手に取る

「ほれ、グラスはキッチンにある」

さわちゃんがワインボトルを両手で受け取る

「ロマネ・コンティって書いてあるんだけど…」

「心して飲め、人生で初のロマネ・コンティをな」

俺はそう言つて、バルコニーに戻り、さわちゃんが帰ってくるのは十分後だった

「遅かったな」

「遅かったなじゃ無いわよ！」

おずおずとワインのコルクをあけようとするが、まだためらっていた

「さわ子先生どうしたんだ？」

漣が俺に聞いてくる

「酒が飲みたいだけだよ」

俺はバーベキューを食べ続け、食事が終わる

「はー食った食った！」

律がおなかをポンと叩く

「じゃあ花火やろ」

紬が手持ち花火を持ってきて女子五人が花火をやりだす

「空也はやらないのか？」

バルコニーから海を眺めていると漑が花火をやめて近寄ってくる

「俺はいいよ、皆で楽しんでこいよ」

俺はアイスコーヒーを飲みながら花火をしている女子を見る

「梓もだいぶ馴染んだな」

「ああ、まだ少し戸惑っているけどな」

「いい傾向だ」

「随分、梓の事を構ってるんだな」

漑が不満げな顔で俺を見ってくる

「まあな…って何でやきもち妬いてんだよ」

「やきもちなんて妬いてないもん」

そんな可愛く目を背けないで下さい

「やれやれ…心配すんなよ。俺はいつでもお前の傍にいるから」

漑の頭を撫でる

「ほら、花火をしに戻れよ」

漑の背中を少し押す

「わかった…」

漣が皆のところに戻るのを確認すると俺は中に入っていた

「さて、少し練習するか」

俺はスタジオに入り、ギターを持つ、しばらく練習していると律が入ってきた

「クウ！肝試しをするぞ！」

「頑張れ」

俺は律の言葉を一蹴しギターを弾く

「クウもやるんだよ！さ！いくぞ！」

アンプの電源を落とされ、腕を引っ張られる

「俺は練習がしたいんだが…」

「いいじゃん！」

外に出されると皆が待っていた

「何で俺まで…」

俺が不満を漏らしていたが律は気にせずくじを出してくる

「二人は脅かし役で、二人ずつペアになってもらうから」

各自くじを引いていき最後に残された二枚を律と俺で引く

唯と紬、俺と漑、律と梓が脅かし役に決まった

「なんでお前が肝試しに参加してんだよ」

「勢いで言ってしまったって…」

見栄はったんだな…

「梓！行くぞ！」

「はい！」

二人が森の中に入っていく、数分後に俺たちが出発する

「なんで高校生にもなって肝試しなんてやらされてんだよ」

懐中電灯を持って漑と歩く

「というより、手え痛いんだけど…」

俺の右手がこれでもかというほど漑に握られていた

「さ、先に行くなよ…空也…」

漑が震えながら歩く

ガサツ！

突然誰かが飛び出してきた

「みおせんぱい」

梓がふらついた足取りで出てきた

「キヤ――――！！！！」

俺の右耳に強烈な高音が鳴り響いた

「なつ！」

驚かせる側だった梓が驚いていた

「零、落ち着け……」

未だ右耳がキーンとなっていたが、溼を宥める

「湊先輩ってこんなに怖がりだったんだ……」

梓が呟く

「たぶんだが、漣は最初はやらないって言わなかったか？」

「ええ、言っていました」

「その理由がこういうことだ」

呆然としている漣を見る

「漣、大丈夫だから」

漣の両肩を揺らす

「駄目だな、これは…」

平常心を取り戻せそうに無かったのでとりあえず漣をおんぶする

「俺たちは先に戻る、梓は残りの三人を頼むな」

「あ、はい」

梓の返事を聞くと俺は別荘に向かって歩き出した

「やれやれ…」

別荘に着くと、漣の部屋がどこか分からなかったのでとりあえず俺の部屋のベッドに寝かせ、俺はアイスコーヒーを入れてソファに座る

「ん……？」

しばらくすると、漣が目を覚ました

「目が覚めたか？」

アイスコーヒーを机に置いてベットに向かう

「空也？」

澪が体を起こす

「気を失うくらいならはじめから参加すんなよな」

「私気を失ってたのか？」

「だから俺のベッドで寝てんだろ」

澪は今更気付いたようで顔を赤くする

「さ、起きたなら、下に下りるぞ。そろそろ皆帰ってる筈だからな」

俺はエレベーターを起動させる

「行くぞ？」

俺は澪に手を差し出す

「あ、ああ……」

澪は俺の手をぎこちなく取ってエレベーターに乗り、リビングに戻ると皆が帰ってきていた

「皆帰ってきてるな」

壁が突然開いたので再び驚く面々、何度見ても面白いな

「さ、風呂に入るか。場所はエントランスを玄関から見て右側の通路を進むとあるから、間違っても男の方に入るなよ」

驚いていた面々にそれだけ言って再びエレベーターを起動し、俺の部屋に戻り大浴場に向かう

「ふう…」

体を洗い湯船に浸かって体を伸ばす

「一人だけだと無駄に広いな、とつとと上がるか…」

風呂から上がり、自室に入る

「何か飲むか…」

俺はリビングに下りると律がいた

「お前前髪を下ろすと別人だな」

「うるせー！クウ！」

律が牛乳を取り出して飲んでいた

「でもさ、お前、前髪下ろしたほうが可愛くね？」

「なっ！」

律の顔が赤くなる

「はは、やっぱりお前も女の子だな」

アイスコーヒーを取って律の頭を撫でる

「クウは無意識でそういう事するよな」

「ん？何がだ？」

「ほら無意識だ」

なんのこつちや…？

「まあいい。じゃ、おやすみな」

「うん、おやすみ」

俺はエレベーターに乗って自室に入った

「おやすみとは言ったものの眠たくねえんだよな」

とりあえずアイスコーヒーを飲んでベッドに横になる

「今日はギターの練習あまり出来てねえし、練習するか」

俺はスタジオに向かった

「ん？誰か居んのか？」

スタジオの扉に付いている窓から光が漏れていた

「梓…と唯か？」

俺はスタジオの扉を少し開く

「ここが難しいんだよね」

「最初はゆっくり弾いて見ればいいんですよ」

「あ、そうか！」

テンポは遅いが『ふでペン』のコードをしっかりと弾けていた

「弾けたあゝ！ありがとゝあずにゃん！」

唯が梓に抱きつくと梓は戸惑いながらも嬉しそうに笑った

「お楽しみの所悪いが、もういいか？」

いつまでも此処に居てられないので、二人に声をかける

「空也先輩！い、いつからそこに？！」

梓が顔を赤くして慌てる

「ま、しいて言うならお前が唯にゆっくり弾けばいいって言った辺りからだな」

「ほぼ最初からじゃないですか！」

「そうなのか？ま、気にするなよ」

「気にします！」

梓がやいやい言っているのをやんわり回避する

「そういえばクーくんはなんでここに？」

唯が俺に聞いてくる

「お前らと一緒の理由だよ」

そう言っただけ俺はギターを持つ

「せっかくだ、しっかり教えてやるよ。梓もな」

「ありがとー！クーくん！」

唯が俺に抱きついてこようとするが唯の頭を押さえて制止する

「わかったから。抱きつかんでもいい」

「空也先輩」

梓を見ると新曲の譜面を持っていた

「どうした？」

「ここなんですけど…」

梓の質問に答えつつ、唯の練習に付き合っていた

翌日…前日の言葉通り午前中は遊びにあて、午後は練習をする

「唯…凄く上手くなってるな」

音あわせをした後、漑が唯を褒める

「クーくとあずにゃんのおかげなんだ」

唯が俺たちを見ると漑もつられて俺たちを見る

「昨日、俺たち三人で練習したんだよ。唯は飲み込みが早くてな、なかなか出来てんだろ」

唯の頭に手を置いて漑に言う

「そ、そうだな…」

漑は複雑な表情で俺に言った

「複雑でちゅね〜漑ちゃん」

律がからかう様な目線で漑に言う

「そ、そんなこと…ないもん…」

なんか俺と付き合う様になってから凜々しいお前が見れなくなったな…ま、そろそろ隠すのも限界だな…

「もう、この際だから皆に言っておくぞ、漑こっち来い」

全員の前に俺と漑が立つ

「俺たち、付き合うことにしたから」

俺の爆弾発言に澪を含め全員が固まる

「くくくく空也！い、いきなり何を…！」

「何で澪まで慌ててんだよ…遅かれ早かれ気付かれる事だろうが」

「し、質問！」

唯が手を上げる

「はい、唯」

「クークンにとって澪ちゃんとは！」

愚問だな…

「彼女だ」

俺は澪の肩に手を置く

「なんて生々しい言葉…」

唯が膝をつく

「おめでと〜澪ちゃん！」

紬が澪に抱きつく

「やっとくつついたか」

律の言葉はなかなか爆弾発言だな

「知ってたのか？」

「あたしも中学から一緒なんだぜ？ぶっちゃけると、さっさとくつつけよ鬱陶しいって思ってた」

それはぶっちゃけ過ぎだな

「私達も漑ちゃんがクーくんの事を好きなのは気づいてたよ」

唯の言葉に紬が頷く

「お前バレバレじゃねえか」

漑の頭に手を置く

「うう……」

漑は恥ずかしくなって俯いてしまった

「……………」

梓がポカンとしていた

「梓？どうした？」

「空也先輩のギターと漣先輩のベースが息ピッタリだったのはそういう理由だったんですね」

「まあな、練習再開するぞ」

俺はギターを持つと全員がスタンバイする

「ワン・ツー・スリー・フォー」

律がリズムを刻んで練習を再開した

夕食と入浴を済ませ、ベッドに横になる

コンコン

不意にドアがノックされる

「開いてるぞ」

扉から現れたのは梓だった

「空也先輩はもうお休みになられますか？」

「いや、まだ寝る気は無い」

「じゃあ少し練習しませんか？」

俺は頷くと梓は笑顔になった

「梓は練習好きだな」

「はい、今はギターを弾くのが楽しいんです」

俺は梓の頭を撫でると壁のボタンを押した

「ニヤ！」

いきなり開いた通路に梓が驚いていた

「いくぞ、隠し通路其の二、スタジオまでの直通通路だ」

俺はその通路を歩いていくと梓がついてきた

「行き止まりですよ？」

薄暗い通路を歩いていくと行き止まりに着く

「見てな」

行き止まりの壁に手を当てると壁が淡く光り壁が開く

「……………」

梓が固まっていた

「この別荘、なかなか面白いだろ」

そう言いながら、俺はスタジオに入ると唯が居た

「クーくん、あずにゃんも凄い所から出てきたね……」

「ま、いきなり壁が開いたら誰でも驚くわな」

扉を見ると普通の壁に戻っていた

「なんか、もう…何でもアリですね…」

俺と同じように梓が壁を見ながら言っていた

「それ、澪も言ってた。さ、練習しようか」

俺はギターを手に取る

「はい！」

梓が笑顔でギターを手に取り、前日と同じように三人で練習していた

合宿三日目…

「今日くらいは、一日練習にしないか？」

朝食を全員で食べていると澪が提案してきた

「俺は構わんぞ」

「私もです」

俺と梓が賛同する

「えっ！」

「遊びた〜い！」

律、唯が反論する

「私は皆と一緒にならどちらでも」

紬はどちらでもよさそうだった

「後はさわちゃん…」

皆で一斉にさわちゃんを見るとめんどくさそうな顔をしていた

現状、練習三票、遊ぶ三票、無効票一票か…

「空也、何か案ないか？」

澪が俺に助けを求めてくる

「紬は練習でもいいんだよね？」

紬を見ると紬が頷いていた

「唯、律こんなのはどうだ？」

俺は一つの案を出す

「明日の昼過ぎに迎えが来る。明日はそれまで自由に遊ぶ、その代わり今日は練習」

俺の言葉を聴いて、二人は少しグラつく

「で、今日の夕食は腕によりをかけて俺が作ってやる。豪華な夕食にしてやる。どうだ？」

「やる！」

二人が賛同する

「その代わり今日練習中に遊びたいと言ったら豪華な夕食は無しだからな」

二人が頷いた

「それでいいか？ 漚？」

最後に漚に確認を取ると漚が頷いた

「さわちゃんも強制参加だからな」

俺はビシッとさわちゃんを指差す

「えゝ私も？」

まだ洪ってんのか…仕方ない…

「今日の練習、まあ主に唯のギターの指導を付き合ってくれたら、ロマネ・コンティ一本出してやるけど？」

「やります！」

さわちゃん陥落と…

「ロマネ・コンティって私たちでも聞いたことあるけど、高いワインじゃないのか？」

漣が俺に聞いてくる

「ロマネ・コンティって言っても高いのと安いのがあるの。ロマネ・コンティは一年で六千本程度作られるんだけど、テレビとかでよく見るロマネ・コンティは其中で高級な物を出されるからそう思うだけの」

俺の変わりに紬が説明し

「安いつつつても一本三十万程度だけどな。高いものだと二百万位するやつもある」

俺が補足する

「何か凄い会話だな。一介の高校生がロマネ・コンティの説明されてる」

漣が俺たちを見る

「ロマネ・コンティはよくお父さんたちが飲んでるから」

「俺んところも、家には無いがパーティや別荘に来ると親父が飲んでるから」

「これくらいは普通」

俺と紬の最後の言葉が被る

「お二人の家ってどれだけ大きいんですか…」

「ご想像にお任せするよ。さ！練習するか！」

俺は立ち上がり皿を洗ってスタジオに向かい、夕方まで練習していた

「さて、俺は夕食の用意でもするか…」

俺はギターを置く

「何作ってくれるんだ?!」

「合宿中は肉料理が多かったからな今日は魚だ。すぐに出来るから待ってる」

俺は壁に手を触れると前日使った通路が現れる

「もう慣れてきたな、壁が開くことに…」

「だろうな…」

俺は通路を通り、リビングに下りる

「さて…」

俺はキッチンの壁に手を触れる

ゴゴゴと音を立てて寿司屋でよく見る冷蔵庫が現れる

「酢飯は昼の間に作っておいたからよし、後は魚の切り身を冷蔵庫に……」

食料庫から色んな魚の切り身を冷蔵庫に入れていく

「出来たかー！クウ！」

全員がリビングに入ってくる

「良いタイミングだ」

「って何だこりゃ！」

「何って寿司を握ろうと思ってな、何が食いたい？」

全員がダイニングに座る

「「大トロ！」」

「サーモン」

各自好きなもの言うってくる

「了解だ！」

言われたものを俺が握っていくというスタイルで夕食を済ました

「お寿司も握れるんだな」

俺の分の寿司を食べていると漣が話しかけてくる

「まあな。このセットも俺のために作られたようなものだからな」

俺はさっきまで寿司を握っていたところを指差す

「というか…これどうやって持ってきたんだ？」

俺は寿司を食べ終わると立ち上がった

「ちょっと下がってな」

俺はさっきの壁に触れると、元のキッチンに戻った

「ま、こういうことだ」

「わかりやすい説明だな」

「だろ？まだこの別荘には秘密があるんだがそれはまた今度な」

俺は漣の頭をポンと叩き、俺は風呂に入ってベッドに横になる

「今日は疲れた…」

コンコン

前日に続き誰かが俺の部屋をノックする

「開いてるよ」

「空也、ちょっといいか？」

現れたのは漑だった

「構わんぞ。どうした？」

「明日帰るんだと思うと少し話をしたくてな」

「話ならいつでも構わんが、どうせなら場所変えるか……」

俺は立ち上がり、ベッドの近くの壁に手を触れるとまた新しい通路が現れる

「ついてきてくれるか？俺のとおきおきの場所だ」

漑は頷いて俺についてくると月明かりに照らされたバルコニーに着いた

「綺麗……」

海に月が写つてとても幻想的な場所だった

「俺と親父以外は知らない秘密の場所だ」

手すりにもたれながら漑に振り向く

「ありがとな、空也」

突然お礼を言われた

「何の事だ？」

「皆に私達の事を話してくれて」

「あの時も言ったと思うが、遅かれ早かれ気付かれる事だよ」

「それでもだよ。嬉しかった」

漑は俺の横に来て体を預けてくる、自然と俺の手が漑の肩に回る

「私ね、空也に想いを言ったあの日からまるで実感が沸かなかった。部活中も一緒に帰ってる時も空也はいつもと変わらない。私たちは本当に特別な関係になったんだろってずっと思ってた…」

確かにそうだ、俺自身が学校や下校中も漑と必要以上に接してはいなかった。というより接そうとしていなかったのだから

「それを空也は一気に吹き飛ばしてくれた、彼女だって言ってくれた事が嬉しかった…」

「あの時は彼女って言ったが、正確には少し違う…」

漑が俺の顔を見る、俺と漑の目が合っているのを確認すると

「漑は俺の……恋人だよ」

「恋人…？」

「ああ、俺の勝手な持論なんだが、彼氏彼女の関係はお互い好きあってはいるけど、どこか軽い感じがするんだ。恋人の方が俺にとつてかけがえの無い存在、大切な人なんだって思ってる。誰かを好きになるのは簡単だ。LOVEじゃなくてLIKEでも好きっていう意味だからな。けど恋ってるのはLOVEからしか出てこないものだと思ってる、だから恋人だ…」

俺の言葉を聴くと漣は抱きついてきた

「私も空也はかけがえの無い存在だ、空也以外の人を好きになれそうにない…」

「光荣だね」

漣の頭を撫でて漣を抱きしめ、そしてキスをする

「空也」

唇を離すと漣が甘えた声で俺の胸に顔を押し付ける

「やっぱ皆の前と二人だけの時とで性格違うなお前は」

「だって恋人だもん」

しばらくいちゃついて漣が落ち着くと部屋に帰っていき、翌日の昼まで遊んで俺たちは別荘を後にした

第十八話（後書き）

初めての一万オーバーの文字数です

長かった…最後の方ぐだぐだ…いろいろ問題ありですね…ぐだぐだ
にならないよう頑張ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8594z/>

けいおん! 俺の奏でる音

2012年1月12日20時49分発行